長崎県高来町文化財調査報告書　第１集

中江遺跡・上田井原遺跡

――小江地区県営圃場整備事業にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書――

１９９３

長崎県高来町教育委員会

中江遺跡・上田井原遺跡

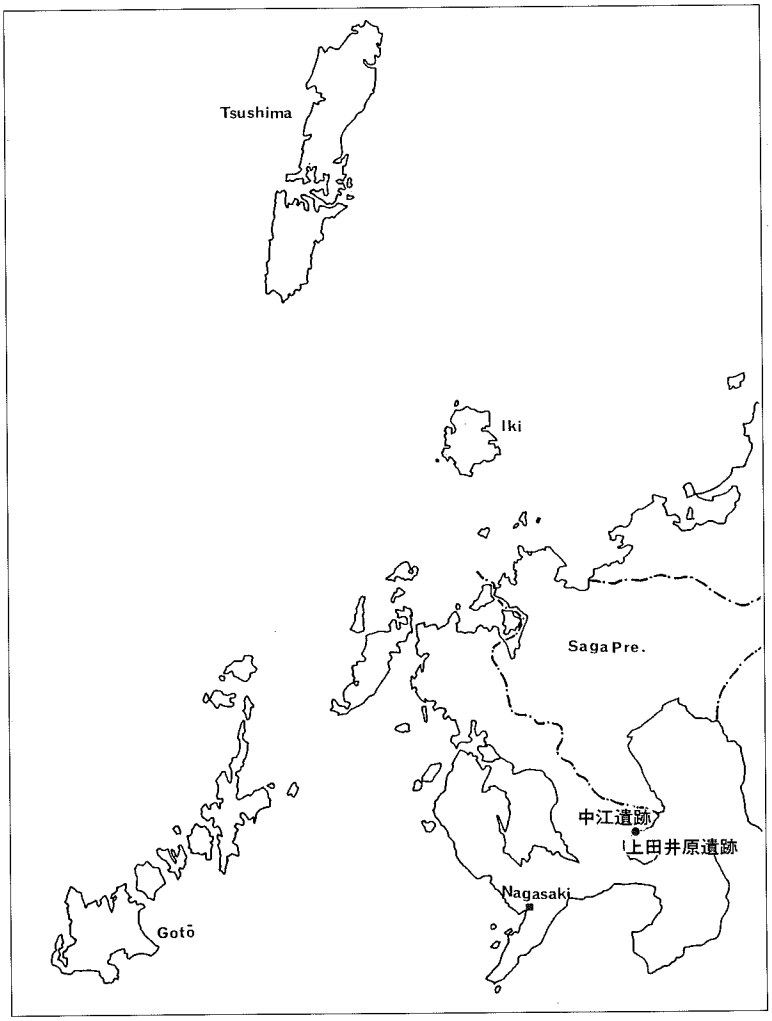


Fig. 1　遺跡位置図

発刊にあたって

高来町では，縄文時代の遺跡とみられる磨製石斧や黒曜石・サヌカイト剝片等が，黒新田十郎丸・小中尾遺跡より発掘されたことにより，わが郷土の歴史の始まりを知ることができます。

なお，上坂元遺跡や弥生時代と思われる高野遺跡（水ノ浦の石棺・素焼壺），泉遺跡（弥生式土器）から当時の農業集落が想定され，溝口遺跡（弥生式遺物），それに上田井原遺物（土器）等，数々の遺跡や遺物の発掘・出土により，より一層確かな郷土の歴史を認識することができると思います。

このたび，高来町小江下与名の中江地域で，高来町基幹産業振興事業の圃場整備が行われましたが，この工事中に，19基に及ぶ遺跡（箱式石棺墓地）が発見されましたので，さっそく長崎県文化課に緊急発掘調査をお願いしました。

この箱式石棺墓地には弥生時代中期の土器が含まれており，石棺構築前段階の溝の形などから，弥生時代の生活の様子が伺えるということで極めて詳細な調査分析が行われてまいりました。

この中江の地は，北に多良岳の水と緑を背負い，南は有明海を隔てて雲仙岳を迎える四季に恵まれた風土豊かな小高い平地で，いかにも昔から人々が生活を営むにふさわしい適地であります。

発掘された数々の遺跡や遺物等の一つ一つが，私たちの祖先の知恵や力を出しあって培った様々な生活文化を想定できるものとして極めて尊い宝物であろうと思われます。

どうか，この調査報告書が，時代の偉業や当時の生活を知る貴重な文化財資料としてご活用いただければ幸甚に存じます。

この調査報告書を発行するに当たり，県文化課の先生方の熱心な発掘調査研究努力に感謝を申し上げ，関係各位のご協力に心からお礼を申し上げます。

平成5年3月

高来町教育長　**高　川　　定**

例　　言

一、本書は，圃場整備事業に伴って実施した北高来郡高来町小江名に所在する中江遺跡・上田井原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

二、調査は，高来町教育委員会が事業主体となり，長崎県教育庁文化課が実施した。

三、本書は下記により分担執筆した。

I	安楽　勉
II，III　一，二，三	高野晋司
III　四	分部哲秋，佐伯和信，永島聖司
IV　一，二，三，四，五	村川逸朗

四、IV，四－２．については渡辺康行氏の玉稿をいただいた。

五、本書の遺物撮影は町田利幸が行ったが，鉄器のＸ線写真撮影は長崎大学医学部放射線科の御協力による。

六、本書関係遺物は現在県文化課で保管している。

七、本書の編集責任は高野にある。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過……3
Ⅱ　遺跡の地理的歴史的環境……2
Ⅲ　中江遺跡の調査……6
一、調査方法と概要……6
二、出土遺構……7
1．箱式石棺及び石室の調査……7
2．溝の調査……48
三、出土遺物……51
1．土　　器……51
2．鉄　　器……53
3．まとめ……56
四、長崎県高来町中江遺跡出土の人骨……57
Ⅳ　上田井原遺跡の調査……69
一、調査方法と概要……69
二、試掘調査……69
三、本　調　査……75
四、出土遺物……75
1．土　　器……75
2．石　　器……91
五、まとめ……98

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡位置図 …… 3
Fig. 2　町内遺跡分布図 …… 3
Fig. 3　町内出土磨製石斧 …… 5
Fig. 4　善神さん古墳線刻 …… 5
Fig. 5　中江遺跡遺構配置図 …… 8
Fig. 6　中江遺跡Ｂ地点遺構配置図 …… 9
Fig. 7　中江遺跡Ｃ地点遺構配置図 ……10
Fig. 8　中江遺跡　1号石棺実測図 ……10
Fig. 9　中江遺跡　2号石棺実測図 ……12
Fig. 10　中江遺跡　3号石棺実測図 ……14
Fig. 11　中江遺跡　4号石棺実測図 ……16
Fig. 12　中江遺跡　5号石棺実測図 ……18
Fig. 13　中江遺跡　6号石棺実測図 ……20
Fig. 14　中江遺跡　7号石棺実測図 ……22
Fig. 15　中江遺跡　8号石棺実測図 ……24
Fig. 16　中江遺跡　9号石棺実測図 ……26
Fig. 17　中江遺跡　10号石棺実測図 ……28
Fig. 18　中江遺跡　11号石棺実測図 ……30
Fig. 19　中江遺跡　12号石棺実測図 ……32
Fig. 20　中江遺跡　13号石棺実測図 ……34
Fig. 21　中江遺跡　14号石棺実測図 ……36
Fig. 22　中江遺跡　15号石棺実測図 ……38
Fig. 23　中江遺跡　16号石棺実測図 ……40
Fig. 24　中江遺跡　17号石棺実測図 ……42
Fig. 25　中江遺跡石棺系石室実測図 ……44
Fig. 26　中江遺跡　2号溝実測図 ……49
Fig. 27　中江遺跡出土土器実測図 ……52
Fig. 28　中江遺跡出土鉄器実測図 ……54
Fig. 29　人骨の残存図 ……58
Fig. 30　上田井原遺跡試掘調査及び本調査位置図 ……70
Fig. 31　上田井原遺跡試掘調査土層図 ……71

Fig. 32　上田井原遺跡本調査土層図 …… 72
Fig. 33　上田井原遺跡（ＴＰ８）柱穴等検出状況 …… 73
Fig. 34　上田井原遺跡（ＴＰ９）高杯出土状況 …… 74
Fig. 35　上田井原遺跡本調査遺構配置図 …… 77
Fig. 36　上田井原遺跡出土土器　① …… 78
Fig. 37　上田井原遺跡出土土器　② …… 79
Fig. 38　上田井原遺跡出土土器　③ …… 80
Fig. 39　上田井原遺跡出土土器　④ …… 81
Fig. 40　上田井原遺跡出土土器　⑤ …… 82
Fig. 41　上田井原遺跡出土土器　⑥ …… 83
Fig. 42　上田井原遺跡出土土器　⑦ …… 84
Fig. 43　松尾永一水田出土土器他 …… 85
Fig. 44　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土土器 …… 86
Fig. 45　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器　① …… 92
Fig. 46　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器　② …… 94
Fig. 47　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器　③ …… 96

表　目　次

Tab. 1　中江遺跡箱式石棺及び石室計測表 …… 7
Tab. 2　人骨資料 …… 57
Tab. 3　頭蓋計測値比較（男性） …… 62
Tab. 4　四肢骨計測値比較（男性，右） …… 63
Tab. 5　脳頭蓋計測値 …… 65
Tab. 6　顔面頭蓋計測値 …… 65
Tab. 7　上腕骨計測値 …… 66
Tab. 8　橈骨計測値 …… 66
Tab. 9　尺骨計測値 …… 66
Tab. 10　大腿骨計測値 …… 66
Tab. 11　脛骨骨体計測値 …… 66
Tab. 12　腓骨計測値 …… 66
Tab. 13　上田井原遺跡出土土器観察表　① …… 87
Tab. 14　上田井原遺跡出土土器観察表　② …… 88

Tab. 15　上田井原遺跡出土土器観察表　③ …… 89
Tab. 16　上田井原遺跡出土土器他観察表　④ …… 90
Tab. 17　石材別器種組成表 …… 91
Tab. 18 …… 97

図　版　目　次

PL. 1　中江 1号石棺 …… 11
PL. 2　中江 2号石棺 …… 13
PL. 3　中江 3号石棺 …… 15
PL. 4　中江 4号石棺 …… 17
PL. 5　中江 5号石棺 …… 19
PL. 6　中江 6号石棺 …… 21
PL. 7　中江 7号石棺 …… 23
PL. 8　中江 8号石棺 …… 25
PL. 9　中江 9号石棺 …… 27
PL. 10　中江10号石棺 …… 29
PL. 11　中江11号石棺 …… 31
PL. 12　中江12号石棺 …… 33
PL. 13　中江13号石棺 …… 35
PL. 14　中江14号石棺 …… 37
PL. 15　中江15号石棺 …… 39
PL. 16　中江16号石棺 …… 41
PL. 17　中江17号石棺 …… 43
PL. 18　石棺系石室 …… 45
PL. 19　中江遺跡遠景，遺跡近景 …… 46
PL. 20　中江遺跡遺構配置近景，調査風景 …… 47
PL. 21　中江遺跡１，２号溝 …… 48
PL. 22　中江遺跡出土鉄器 …… 53
PL. 23　中江遺跡鉄器Ｘ線写真 …… 55
PL. 24　１号石棺人骨 …… 67
PL. 25　16号石棺人骨 …… 68
PL. 26　上田井原遺跡試掘調査 …… 100

PL. 27　上田井原遺跡 …… 101
PL. 28　上田井原遺跡本調査状況 …… 102
PL. 29　上田井原遺跡本調査区儼全景 …… 103
PL. 30　上田井原遺跡出土の土器　① …… 104
PL. 31　上田井原遺跡出土の土器　② …… 105
PL. 32　上田井原遺跡出土の土器　③ …… 106
PL. 33　上田井原遺跡出土の土器　④ …… 107
PL. 34　上田井原遺跡他出土の土器等 …… 108
PL. 35　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器 …… 109

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過

多良岳の南麓，有明海に面する高来町は，西を諫早市，東を小長井町と交わり，北部を佐賀県の山脈に境を接している農林業主体の町である。

町では基幹作物である稲作からの転換をはかるべく，農業基盤整備が計画され，小江川，深海川沿岸に展開する，受益面積99haの農地の事業施行認可申請が，昭和62年10月28日小江土地改良区より提出された。内容によると，工事期間は昭和62年着工，平成６年完工の計画で，１工区から７工区に分けられ県営圃場整備事業として認可されている。

以上は耕地課から文化課に提出された計画書の概要であり，計画地の中に埋蔵文化財包蔵地が１ヶ所含まれていたため，遺跡の取扱いについて協議が必要となった。

遺跡は昭和57年の県内遺跡詳細分布調査で確認されたもので，昭和37年の集中豪雨の際，水田が抉られ，遺物が採集されている。遺物は土師質土器が中心で，椀や坩など完形品も含まれており，上田井原遺跡（84―63）として県遺跡台帳に登録された。

県耕地課から県文化課へ最初の協議がなされたのは平成元年度である。県文化課では同年９月，現地において諫早耕地事務所，町農林課，町教育委員会の四者による協議を行った。協議の結果は試掘調査が必要との結論に達した。

試掘調査は，平成２年11月，８日間実施され，縄文時代晩期の土器，弥生時代後期の土器，古墳時代の土師器・須恵器，中世の中国輸入陶磁器，瓦器等が出土した。この結果は当初の予想を大きく越えるものであり，遺跡の現状保存等について，改めて協議することとなった。

試掘調査の結果をふまえて，遺物の出土範囲についての設計変更が検討されたが，水がかり等の問題で，すべての変更は困難であり，一部削平される部分について本調査を行った。その後，さらに変更不可能な水田１枚と，排水溝の部分について調査を追加した。結果的には上田井原遺跡の大部分の範囲が設計変更により保存されることになった。

さらに，峰を一つ越えた第２工区では，平成３年８月から工事が進められていたが，10月16日諫早耕地事務所より，工事中石棺が発見され，中に人骨が残っているとの報がもたらされた。

文化課では町教育委員会とも連絡をとり，現場に急行した。現況は，すでに崖が削り取られ石棺は１／３程残存している状況であり，さらに周辺を観察すると3基の石棺が認められ，実測を始めたが，周囲はその間にも1.5m～２mの深さで削平されその度に石棺の出土が相次ぎ，調査体制も強化することになった。最終的には19基にのぼる石棺と弥生時代の溝が検出された。調査は，１月８日に完了したが，調査費用については諫早耕地事務所と町教育委員会が負担した。

なお遺構の移設復元については，当初町において前向きの発言が見られたが，未だ実現されていない。棺材等については保管されており，早い段階での実現が望まれる。

II　遺跡の地理的歴史的環境

高来町は，五家原岳（1,057m）を頂点とする多良山系から派生した数条の尾根と５本の小河川で形成された扇状地からなる。

しかし，何れの河川も小規模であり，また流路も短いために流域面積も限定され，したがって形成する扇状地も小さくならざるを得ない。

このため，有明海を干拓して耕地を確保する土木工事は，享保年間に始まり最近にいたるまで連綿として続けられている。河口部分の平坦地や現ＪＲ線以南の可耕地は，全てこの干拓工事によって得られた土地である。

高来町の地質は多良岳火山類の噴出により，山岳部は角閃石安山岩が，裾野は輝石安山岩が分布している。棺材として利用されている石は何れも輝石安山岩であるから近くにあった手頃な石材を利用したことになる。

町内の遺跡を概観してみよう。

現在町内には24箇所が遺跡として周知されている。

この内，旧石器時代の遺跡はまだ知られていない。

縄文時代の遺跡として考えられるものは，１十郎丸遺跡，２小中尾遺跡，３柳原溜池遺跡，７上坂本遺跡，そして21上田井原遺跡等である。この内，上田井原遺跡を除くと，時期を示す土器が殆ど出土していないために，正確な時期判定が出来ない。

このような状況の中で，上田井原遺跡からは晩期の浅鉢に籾の圧痕が認められた。県下では２例目にあたるが，有明海に面する小扇状地に晩期の段階の稲作の痕跡を認めた意義は大きい。

弥生時代の遺跡としては５箇所が周知されていたが，中江遺跡の発掘によって，当該期の墓地が増えたことになる。

溝口遺跡は境川の東岸，標高18m程の平坦地に位置する。遺物は弥生土器の他，古墳時代の土師器，中世の輸入陶磁器を含む複合遺跡の様相である。14泉遺跡は，同じ境川の下流域左岸の扇状地の微高丘陵上に位置し，弥生中期の土器が採集される。12高野遺跡は有明海に突き出た台地上にある。弥生時代の箱式石棺であると思われるが，縄文晩期の遺物を多く出土した上田井原遺跡からは弥生時代前期から後期の土器も多く出土する。

古墳時代の遺跡としては封土を持つ高塚古墳が１基と墓地が１箇所，そして包蔵地が２箇所知られているのみであったが，中江遺跡において新たに古墳時代の石棺と石棺系石室の確認をすることが出来た。このタイプの古墳は大村湾沿岸にある黄金山古墳に次ぎ２例目である。

包蔵地としての遺跡である高野遺跡と上田井原遺跡については前述したので省略する。

９の善神さん古墳は標高25m程の丘陵上に位置する。もともと円墳であろうが，現状は横穴式石室が露出し，天井部にはコンクリートが打たれ，その上に瓦が葺かれている。羨道部はすでに無く，玄室のみが残存する。玄室は奥行2.3m，幅2.2mのほぼ正方形である。この古墳は

番号	名称	種別	時代	所在地
1	十郎丸遺跡	散布地	縄文	湯江黒新田名十郎丸
2	小中尾遺跡	〃	〃	〃 小中尾名小中尾
3	柳原溜池遺跡	〃	〃	〃 平原名柳原溜池
4	古田城	城跡	中世	〃 善住寺名高城
5	東門寺跡	寺跡	中・近世	〃 〃 御所園
6	丸葉山城	城跡	中世	〃 上坂元名西大谷
7	上坂元遺跡	散布地	縄文	〃 〃 中坂元
8	尾元遺跡	〃	〃	〃 湯江名尾元
9	善神さん古墳	古墳	古墳	〃 三部壱名尾ノ上
10	溝口遺跡	散布地	先～歴	〃 溝口名
11	溝口西ノ前遺跡	墳墓(石棺)	古墳	〃 〃 西ノ前
12	高野遺跡	〃 〃	古墳	〃 水の浦名高野
13	水の浦城	城跡	中世	〃 〃 城ノ下
14	泉遺跡	散布地	弥・古	〃 泉名西川良・東川良・柿ノ木田
15	武田城	城跡	中世	〃 町名峯・寺ノ下（光宗寺）
16	天神ノ尾城	〃	〃	〃 法川名天神神ノ尾
17	鍛冶屋園遺跡	製鉄跡	〃	〃 里名鍛冶屋園
18	釜遺跡	散布地	縄文	〃 黒崎名釜（海中干潟）
19	犬木溜池遺跡	〃	弥生	小江西尾名犬木溜池
20	小江城	城跡	中世	〃 小江名城ノ本
21	上田井原遺跡	散布地	弥・古	〃 峯名上田井原
22	田渕遺跡	〃	古墳	〃 〃 田渕
23	萬福寺跡	寺跡	中・近世	〃 小江名内蔵床
24	中江遺跡	墓地	弥・古	〃 〃
25				

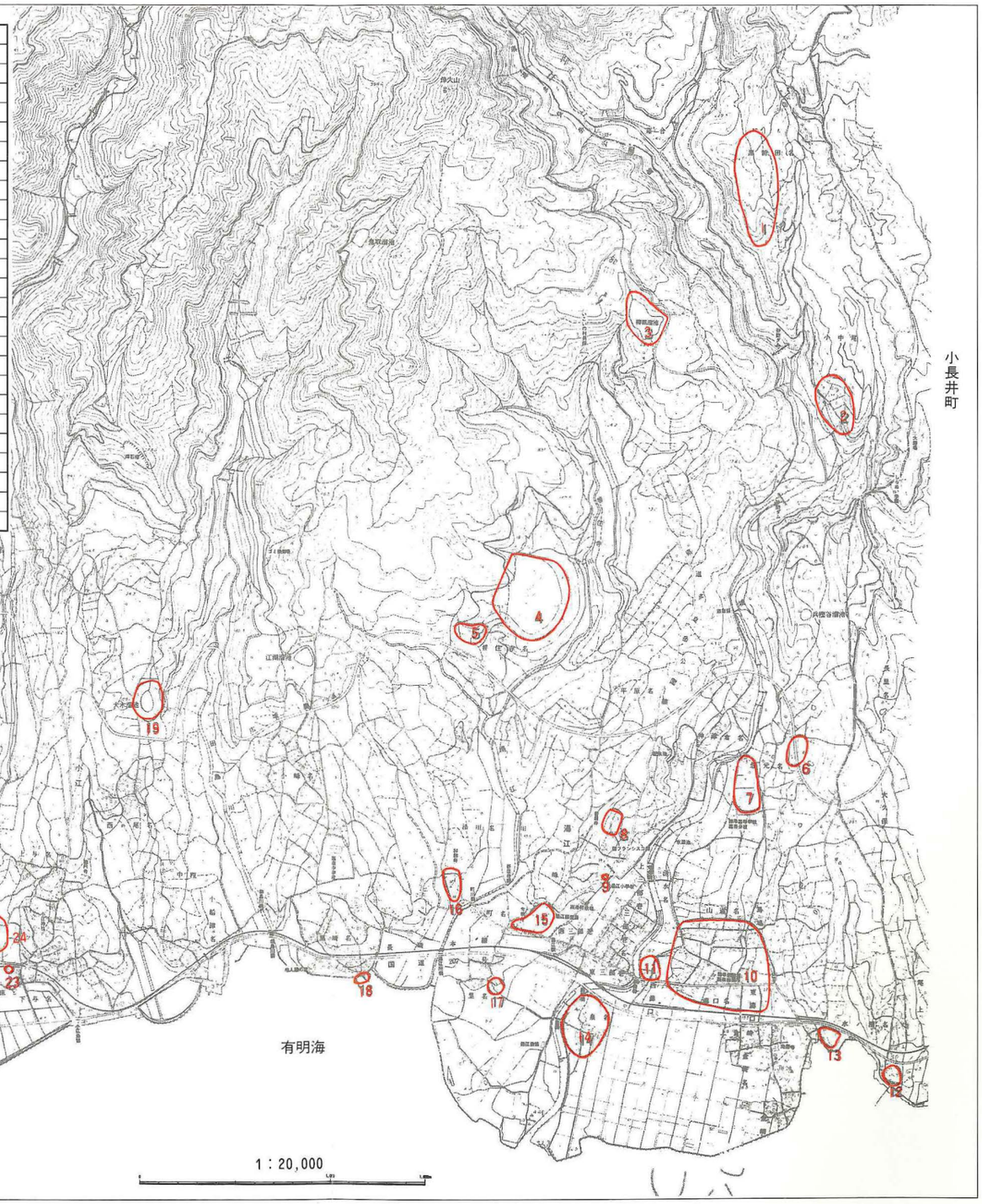


Fig. 2　町内遺跡分布図

7世紀初頭が考えられている。

西ノ前遺跡は標高16m程の台地上に位置する。昭和2年宅地造成中，人骨の入った箱式石棺が出土している。「長さ六尺五寸，幅三尺，深さ二尺五寸」と記録されている。副葬品がなく正確な時期は不明であるが，石棺の法量から判断すると古墳時代に属する可能性が高い。

律令時代における高来町はよく分からない。肥前風土記によれば，彼杵郡として驛二所とある。盤氷，大村の二駅であるが，盤氷は彼杵町，大村は旧大村町あたりに比定されており，現在の高来町とは一致しない。

安楽　勉「高来町の歴史」『高来町郷土誌』所収　高来町 1987
「肥前風土記」　日本古典文學大系2　岩波書店　1958

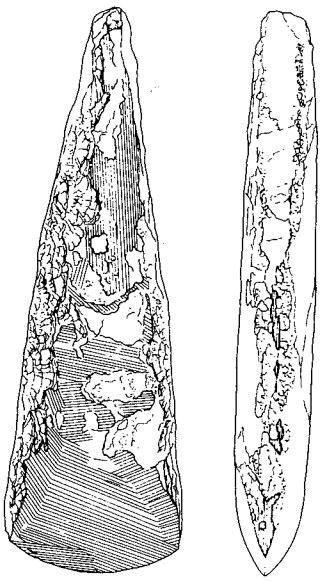
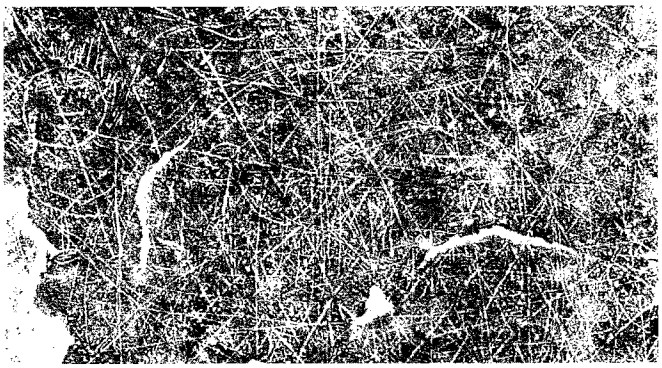
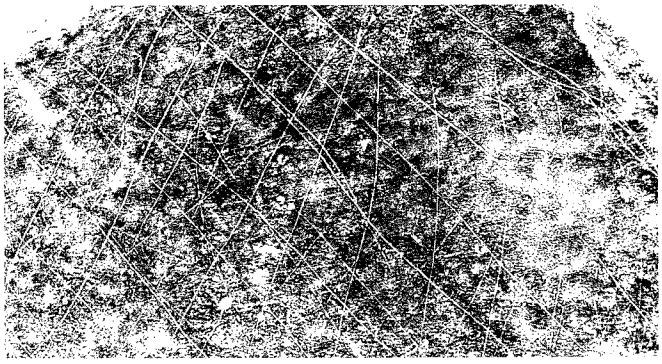


Fig. 3　町内出土磨製石斧



玄室奥壁



玄室側壁

Fig. 4　善神さん古墳線刻

Ⅲ　中江遺跡の調査概要

一、調査方法と概要

遺跡は前述した如く，多良山系から南側に延びた尾根の先端部分，有明海を見下ろす標高10mから35m付近に位置する。ＪＲ古江駅からは北方約100m位の場所にあたる。

平成３年10月中江地区の圃場整備の工事中に新たに発見された遺跡であり，一部の石棺を除いて，ほとんどの遺構が工事計画区域内に含まれており，また工事の進捗状況からこの段階での設計変更等は不可能な状況にあったため，緊急調査を実施したものである。

当該地は且つてはゆるやかに南面する傾斜地であったはずであるが，後世の耕作によって狭い段々畑になっている。

当初，遺跡は工事によって露出した箱式石棺19基程度からなる墓地であるという認識であったが，細かく見ると墓地は４地点位に分類できる。すなわち標高が34m位の地点，25m～27m付近の地点，22m位の地点，そして標高が一番低い16mあたりの地点である。それぞれＡ地点～Ｄ地点と呼称しておく。

また，この内Ｄ地点にある18号石棺とした遺構は当初考えていたような箱式石棺ではなく，封土の有無は確認できなかったが，石棺系石室であることが分かった外，石棺が集中するＢ地点には石棺によって切られた断面Ｖ字形でゆるいカーブを描く２条の溝が検出された。

溝の中には弥生中期の土器が含まれており，石棺構築の前段階に溝によって囲まれた生活址があったことを示している。住居址はまだ検出されていないが，特に第２地点の比較的平坦地部分に二重の溝が見られることは，当該地に環濠を持つ集落があった可能性を示すものとして注目される。

墓地が築かれた時期は，副葬された土器が破片であることから明確さを欠くが，溝を構築した時期が弥生中期以降であることと，これまで県下各地で調査された石棺の例と比較すると弥生後期以降古墳時代にかけて築かれた可能性が高い。

なお，調査期日と関係者は以下のとおりである。

調査期日　平成３年10月28日～11月13日
　　平成４年１月６日～１月８日

調査関係者　高野晋司　文化課主任文化財保護主事（現埋蔵文化財班係長）
　　安楽　勉　〃　〃
　　村川逸朗　〃　文化財保護主事
　　浦田和彦　〃　〃　（現県立波佐見高等学校）
　　正林　護　〃　文化財調査員　（退職）
　　下田章吾　現東彼杵町事務吏員

二、出土遺構

1．箱式石棺及び石室の調査

前述した如く，中江遺跡は大きく4地点に分かれるようである。その何れもが基本的には箱式石棺を主体とする墳墓群である。

また，これとは別に，規模とその延長は不明ながらも弥生時代中期に属する二重の環濠らしき遺構が発見されたのは重要である。時間の関係でこの面についての調査が十分に出来なかったのは残念であるが，有明海に面する地域にもあるいは環濠を伴う集落があった可能性を示唆しており，これまで知られていなかった当該地の弥生時代の研究の上でも究めて貴重な資料ということができよう。

Tab. 1　中江遺跡箱式石棺及び石室計測表

遺構番号	法量（単位cm）			遺構主軸方位	副葬品	備考
	長さ(内)	幅(内)	深さ(内)			
1	0.87＋α	0.87＋α	0.25	不明	無	石室朱塗，人骨
2	1.66	0.32	0.27	N－34°－W	鉄製刀子	石枕
3	1.80	0.38	0.20	N－5°－W	無	
4	1.61	0.36	0.30	N－40°－W	無	石枕，人骨
5	1.72	0.38	0.38	N－31°－W	土器細片	
6	1.66	0.31	0.26	W－21°－S	土器細片	石枕，土器
7	1.68	0.47	0.37	N－76°－W	無	床面敷石
8	1.55	0.36	0.29	W－7°－S	無	石枕，床面砂利
9	1.84	0.32	0.30	W－9°－S	無	石枕
10	1.59	0.41	0.25	N－68°－W	無	石枕
11	1.98	0.35	0.36	N－89°－W	無	石枕，床面敷石
12	1.60	0.32	0.26	W－7°－S	無	石枕
13	1.77	0.48	0.30	W－6°－S	鉄器？	石枕
14	1.91	0.58	0.30	N－89°－W	鉄鉈	石枕
15	1.86	0.40	0.30	W－7°－S	無	石枕
16	1.68	0.50	0.38	W－19°－S	無	石枕，人骨，朱，敷石
17	1.81	0.32	0.35	W－10°－S	無	石枕，人骨，朱，敷石
18	1.92＋α	0.90	0.80＋α	N－84°－W	刀子	石棺系石室
19	現地保存につき未調査					

A 地点
19
MN
B 地点
9
10
14
13
12
15
6
5
8
7
4
2
3
11
2 号棺
1 号棺
1
C 地点
16
17
18
D 地点
0
100m

Fig. 5　遺構配置図

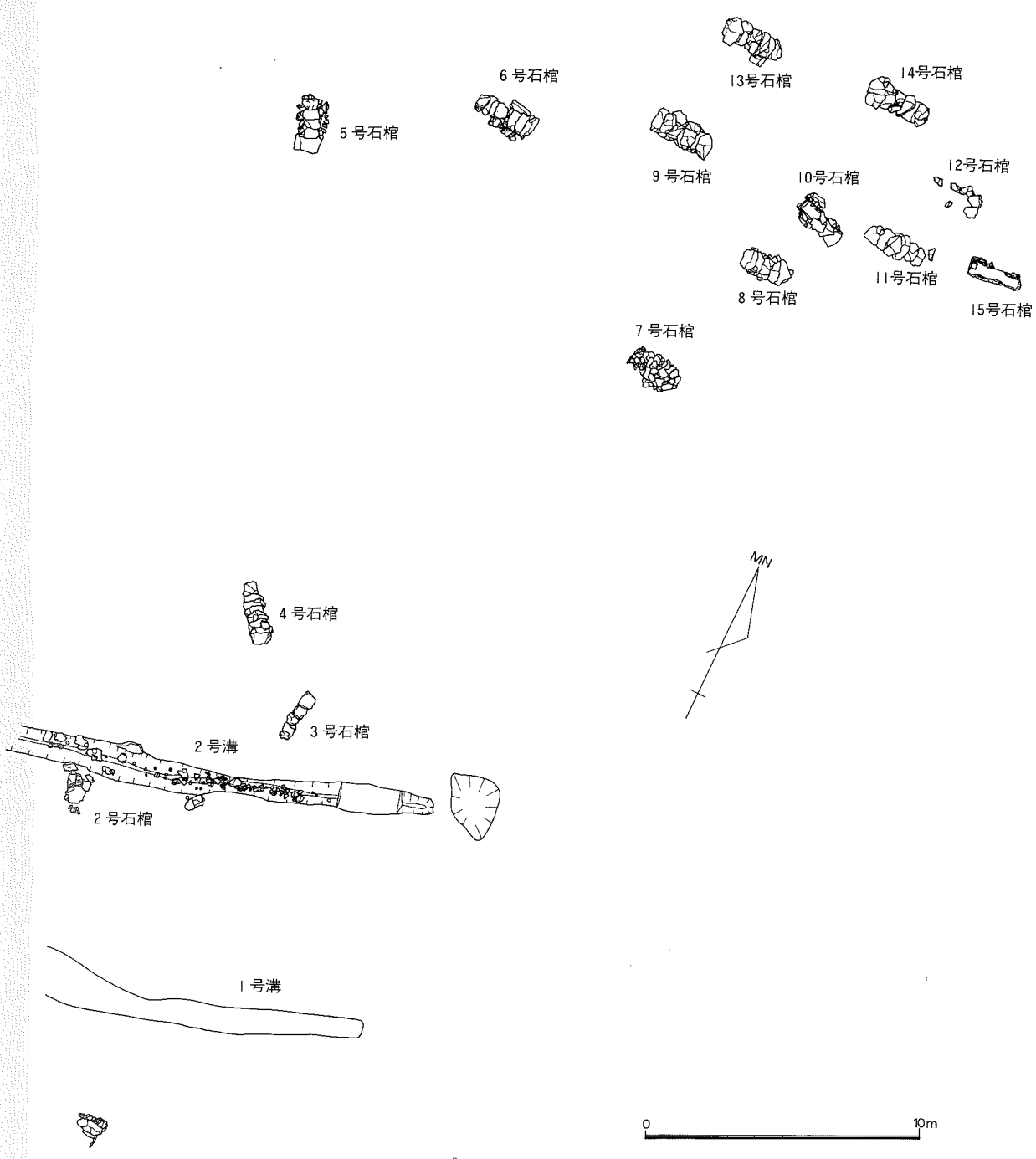


Fig. 6　B 地点遺構配置図

A地点の箱式石棺は見つかっている限りでは１基のみである。ただ，この石棺については現地保存が可能ということになり，未調査のままその位置を記録するだけで埋め戻しをおこなった。

B地点は標高25mから27m位の比較的平坦地に位置しており，この区域に15基の石棺と２条の溝が集中していることになる。

C地点は，あるいはB地点の中に包括されるべきものかも知れないが，距離的に60mと５mの標高差があることから一応地点を分けた。

D地点はやはり１基だけの遺構であるが，他の石棺とは構造が明らかに異なる。

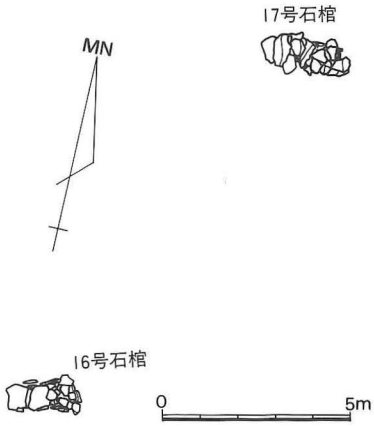


Fig. 7　C地点遺構配置図

以下，各石棺の概要についてはTab. 1に記載しておいたので参照頂きたいが，いくつかの石棺について，若干の補足をしておきたい。

１号石棺は土砂削平によって殆ど半壊した状況である。棺内の清掃の結果，中に人骨が残存していることが分かった。

側壁には朱が塗られており，幅が0.87cmもあることからすると石棺というより，石室とした方が良いかも知れない。

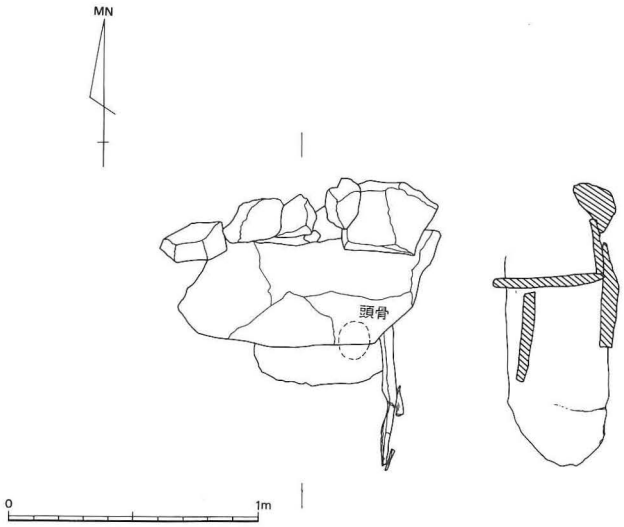


Fig. 8　１号石棺実測図

表で18号とした石棺系石室はやはり，工事中土砂削平によって半壊しているが，現存値は長さ２m強，幅0.9mを計る。天井部は欠損しているため不明であるが，0.8m以上は確実である。現存している部分は閉塞部を含む丁度北半分になろう。

北側側壁から構造を見ると，３枚の扁平礫を縦に並べ，その上に小さい扁平礫を積み重ねている。最終的に何段重ねるのかは不明である。閉塞部には９枚の扁平礫を重ねあわせている。側壁と閉塞壁の一部には朱が塗布されている。床面には特に敷石等の敷設は見られないが，南西隅に刀子が１本副葬されている。

ＰＬ．１　中江１号石棺

発現状況

石棺露出

人骨出土状況

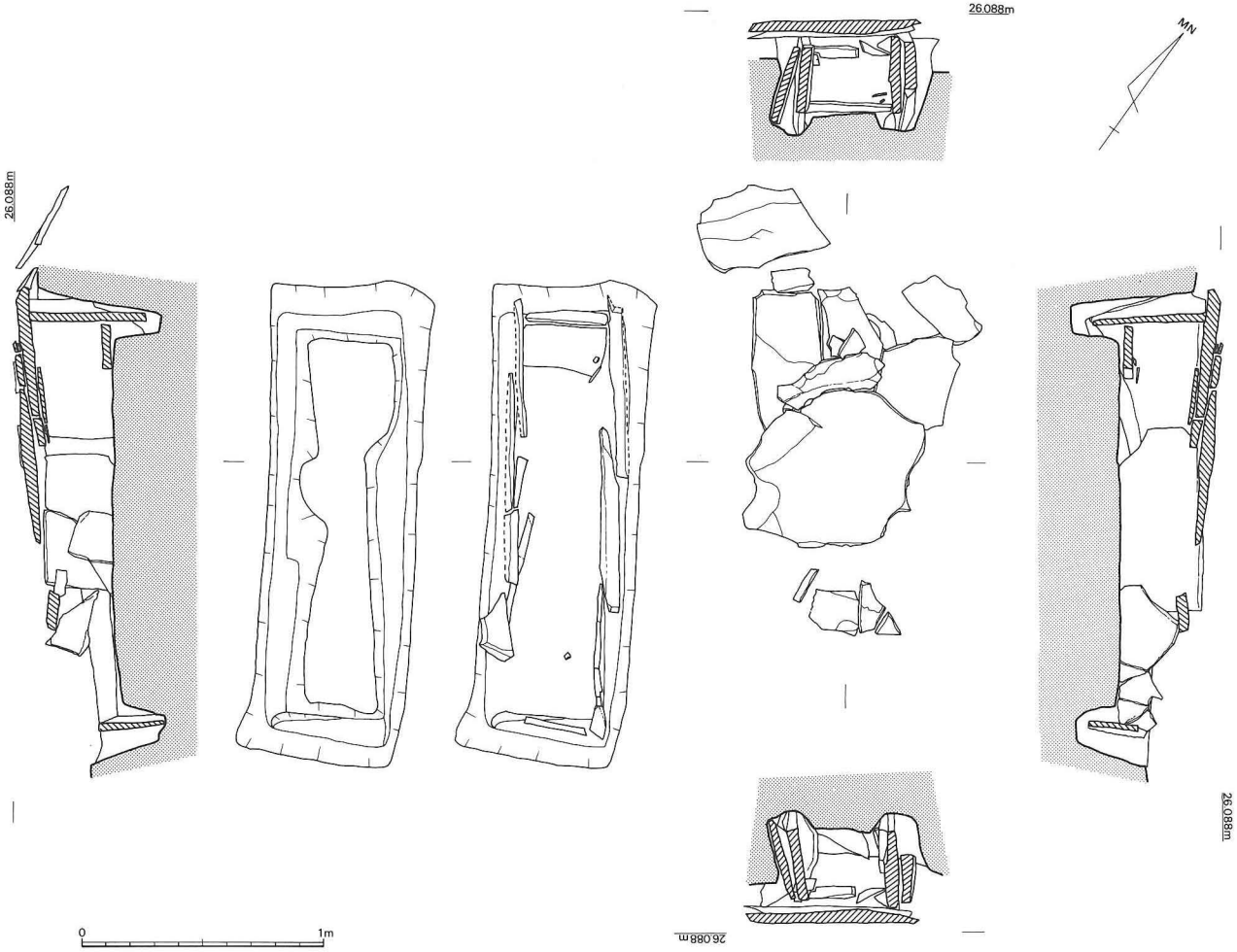
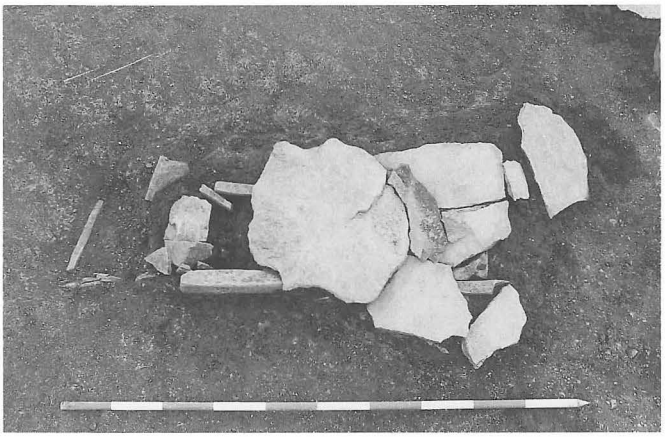


Fig. 9　2号石棺実測図

PL. 2　中江2号石棺



蓋石

蓋石除去状況

遺物出土状況

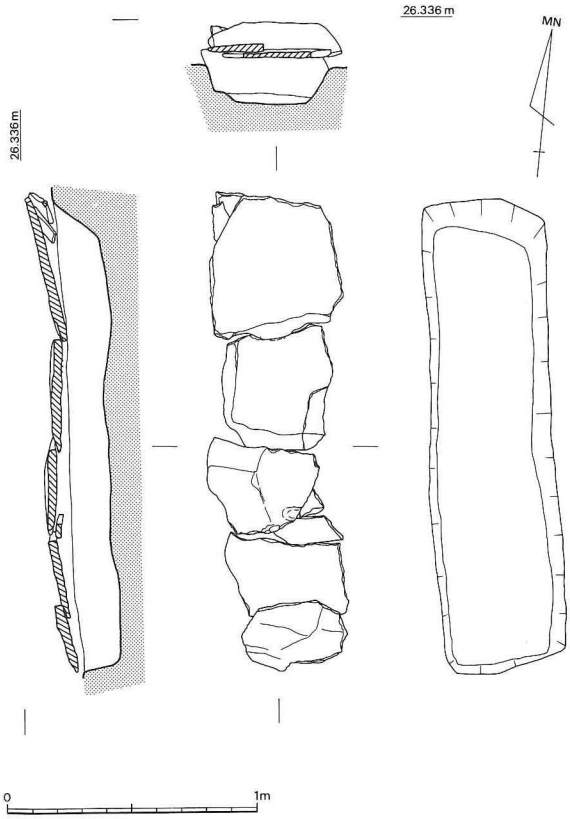


Fig. 10　3号石棺実測図

PL. 3　中江3号石棺

遺構露出

土　　壙

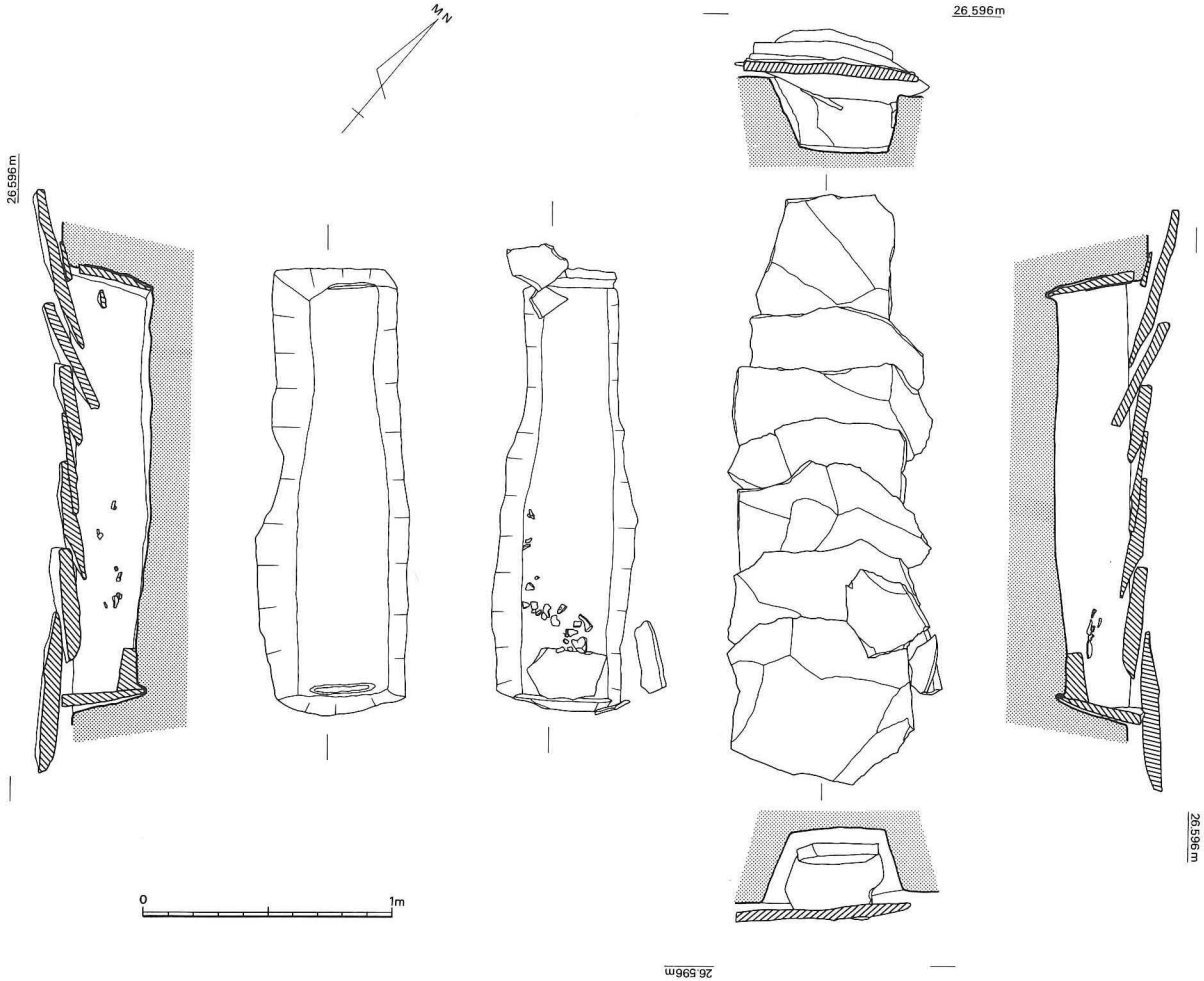
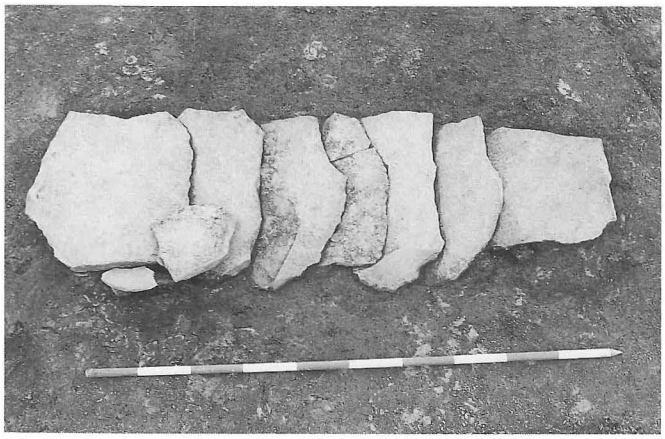
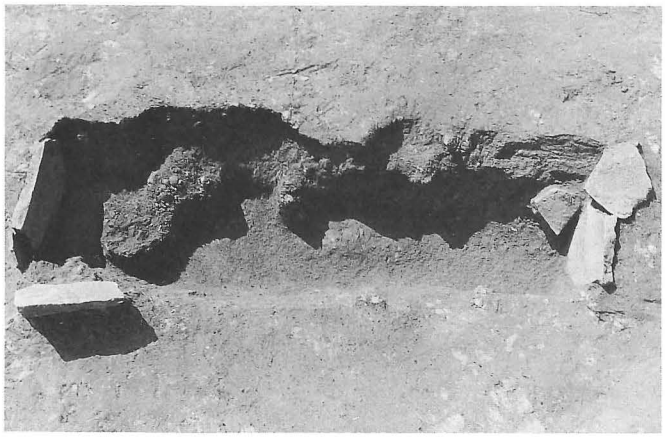


Fig. 11　4号石棺実測図

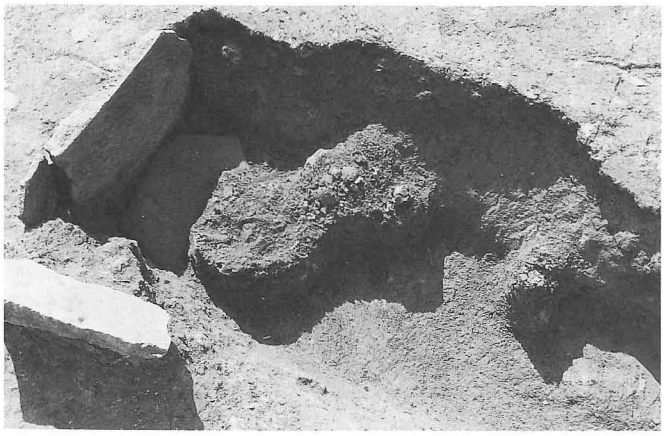
PL. 4　中江4号石棺



全体写真



蓋石除去



蓋石除去

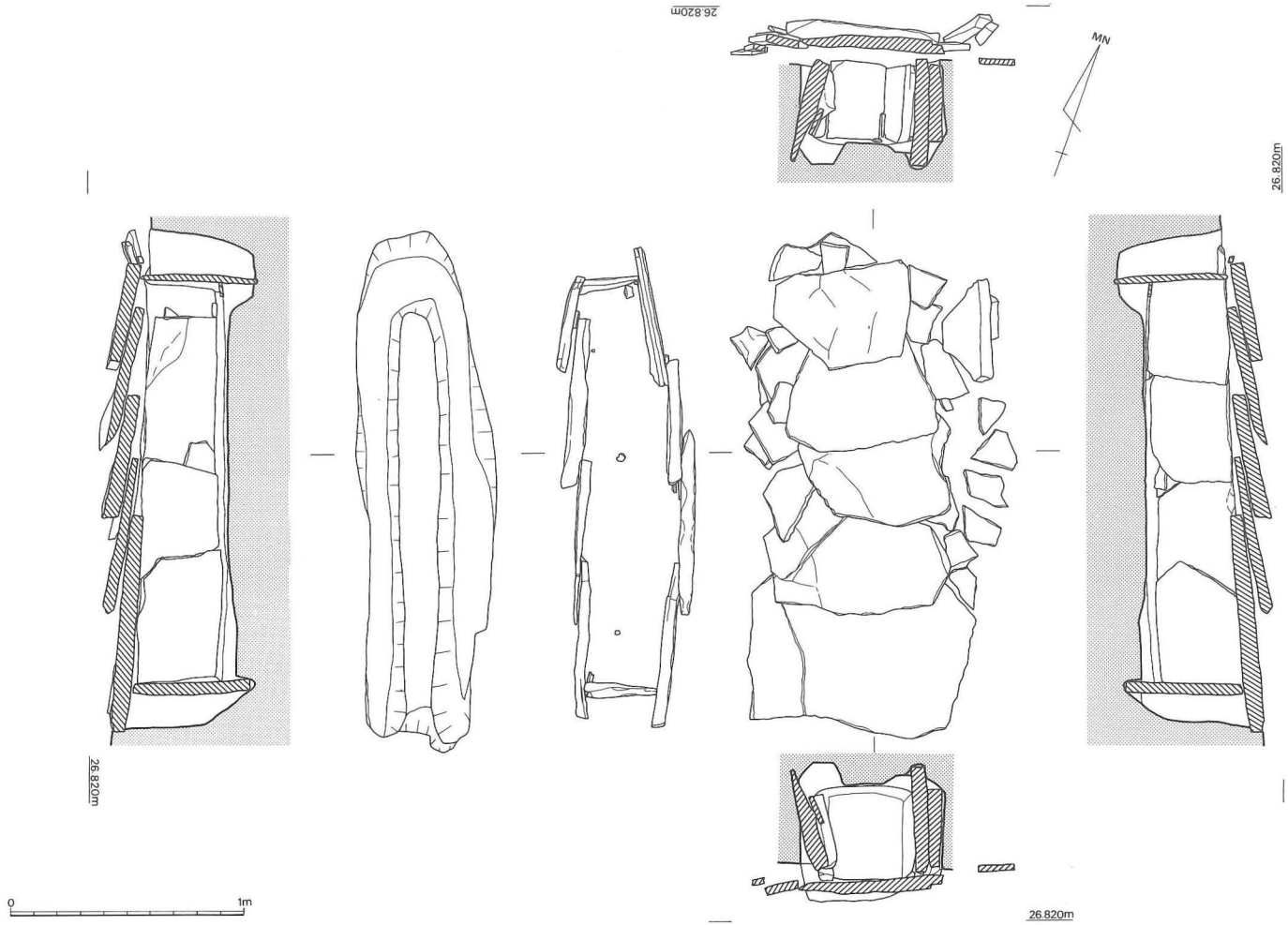
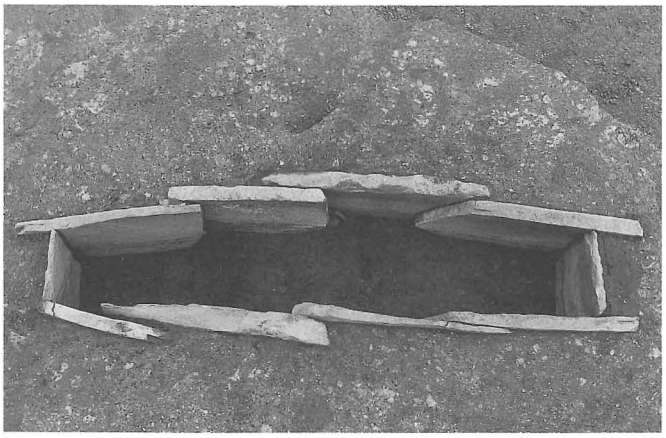


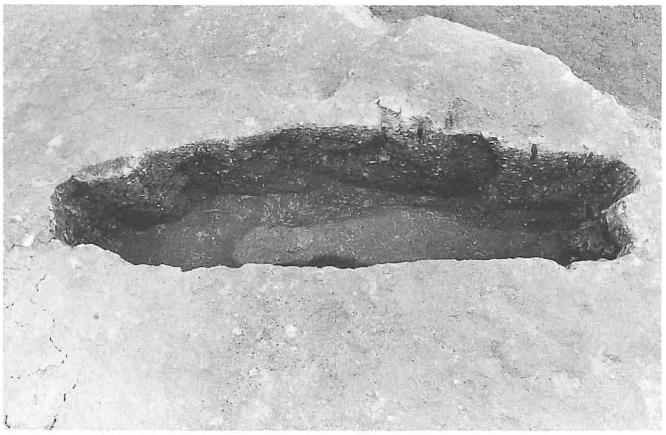
Fig. 12　5号石棺実測図

PL. 5　中江5号石棺

全体



蓋石除去



土壙

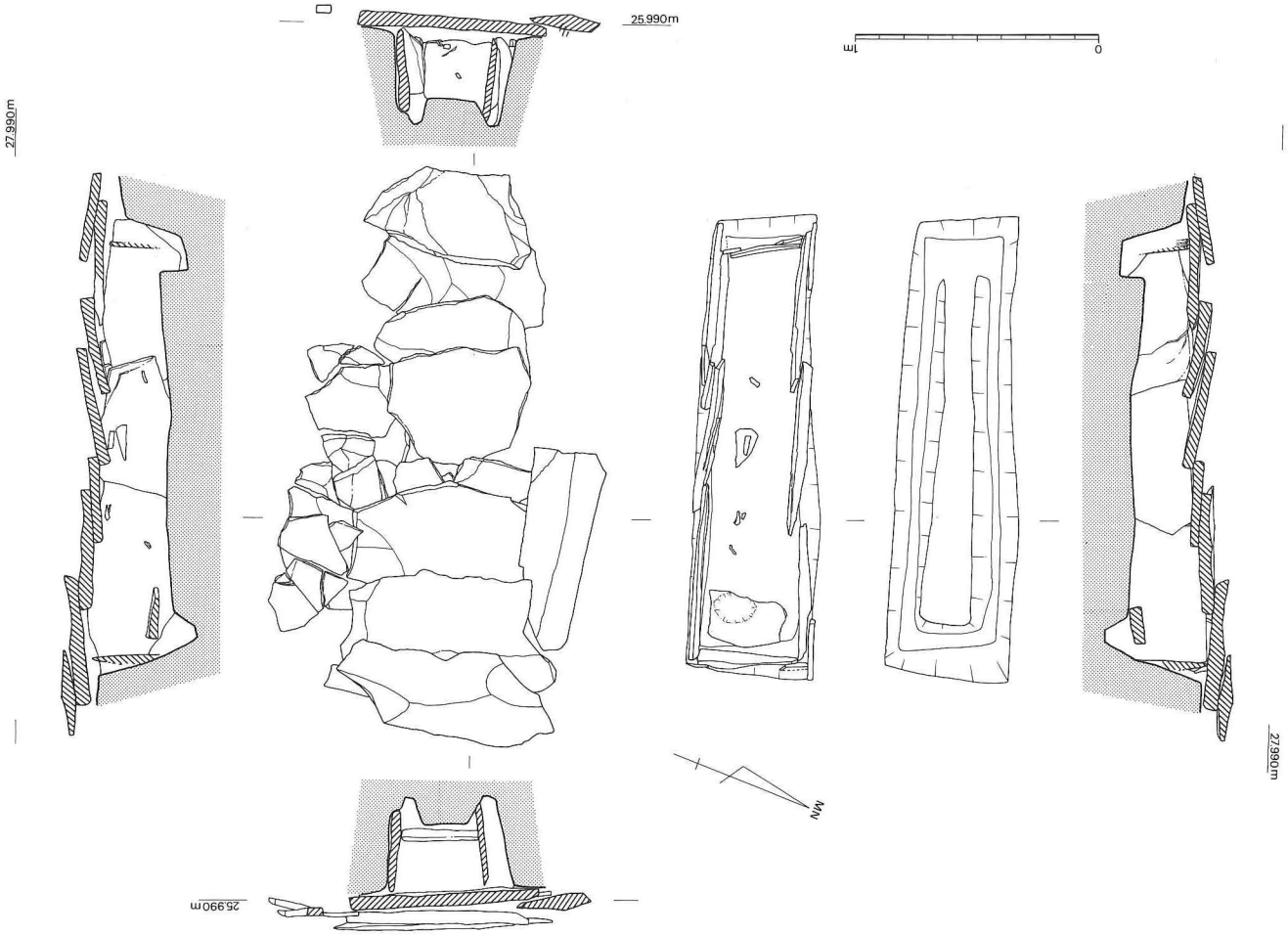
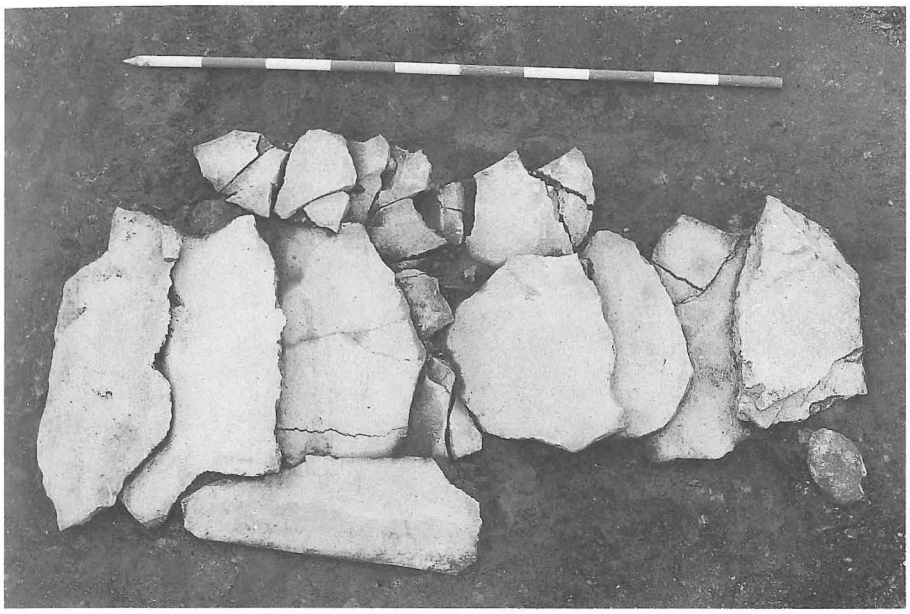
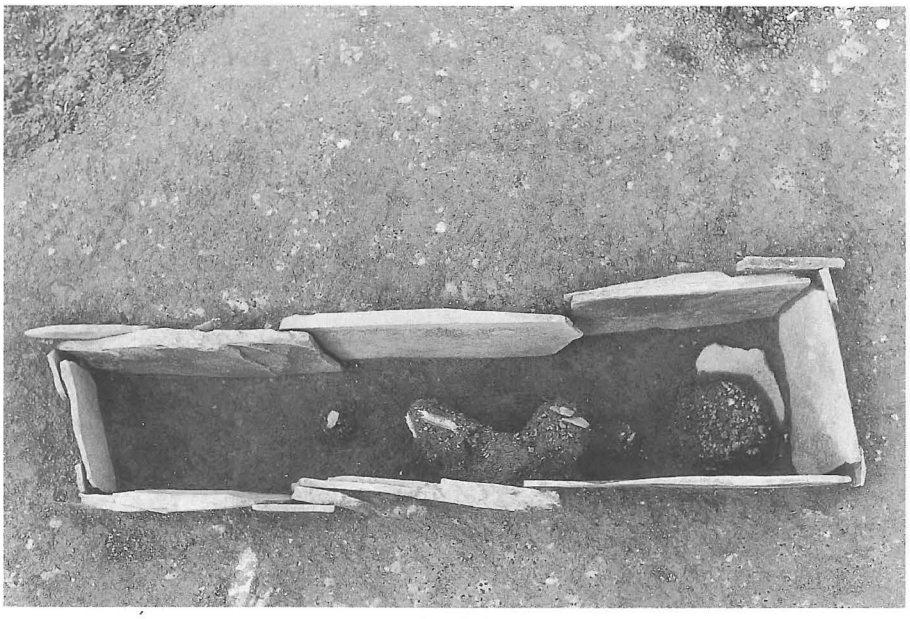


Fig. 13　6号石棺実測図

PL. 6　中江6号石棺



全　体



蓋石除去

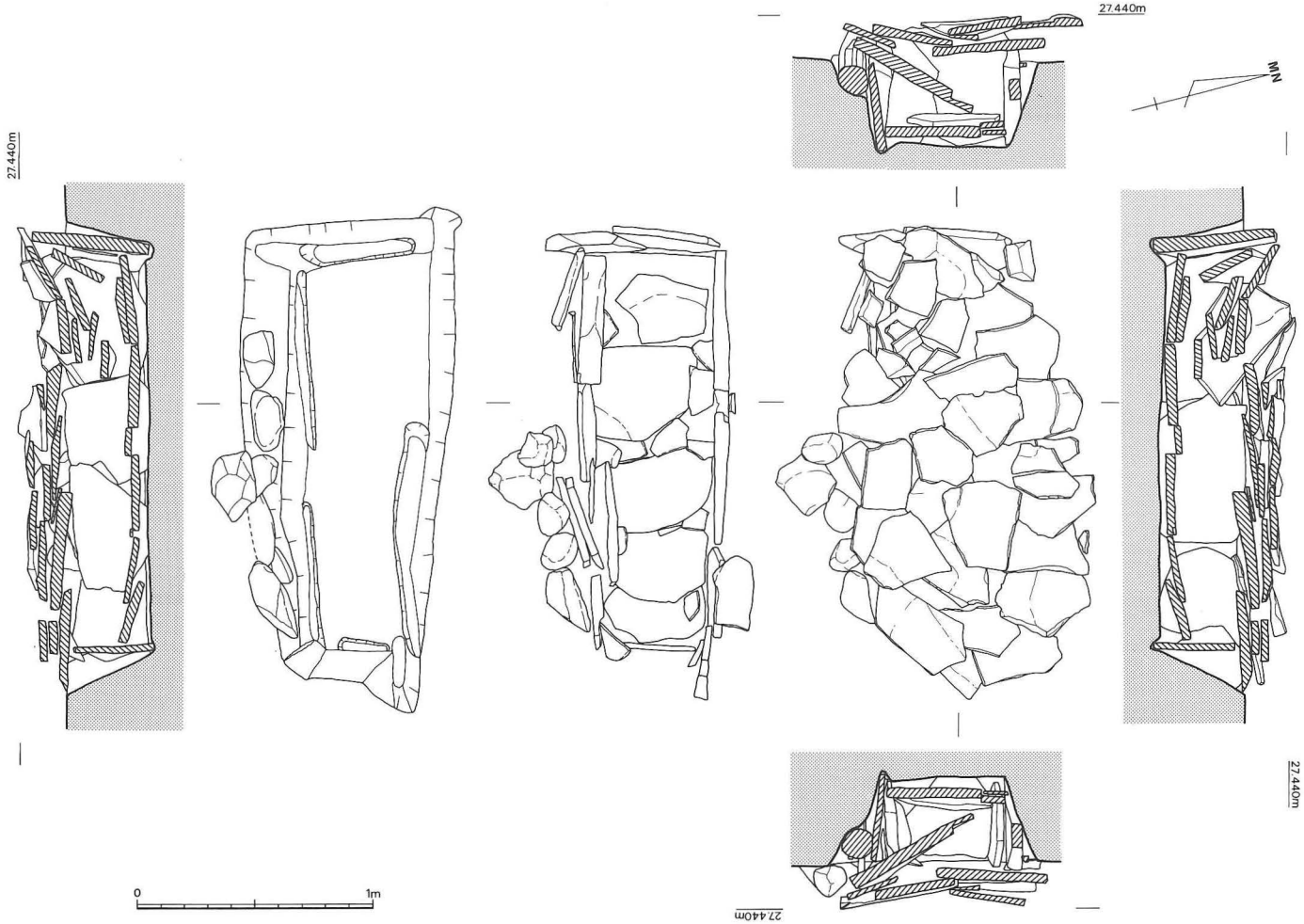
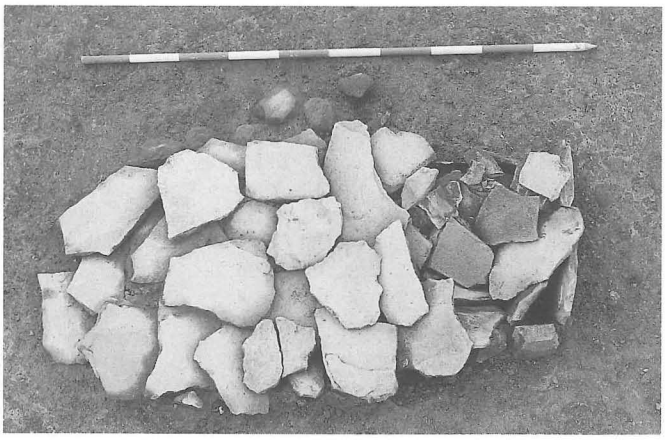


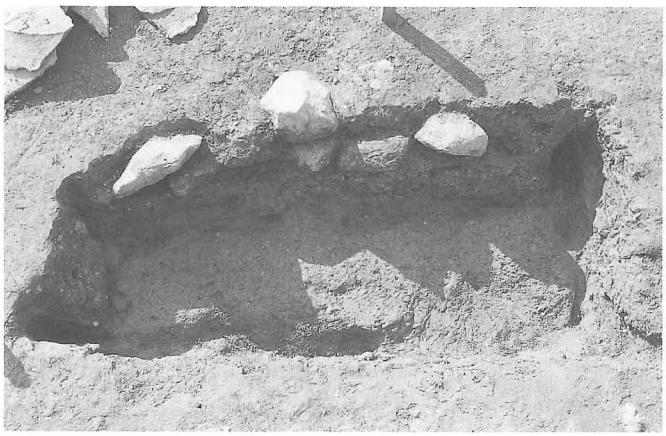
Fig. 14　7号石棺実測図

PL. 7　中江7号石棺



全体

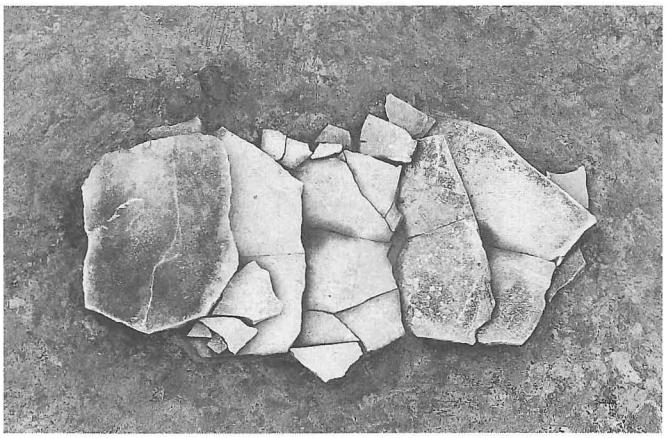
蓋石除去



土壙

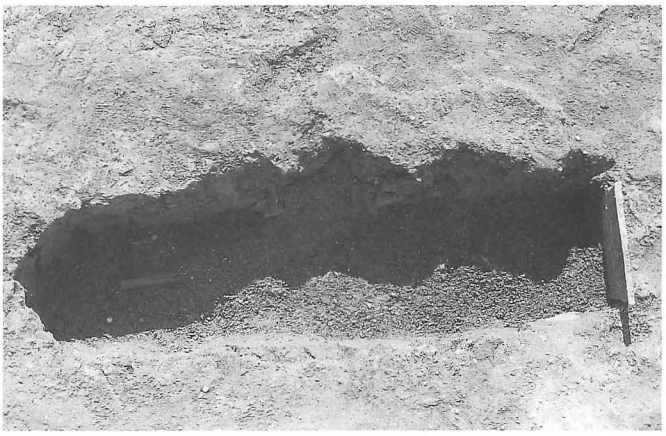
Fig. 15　8号石棺実測図

PL. 8　中江8号石棺



全体

蓋石除去



土壙

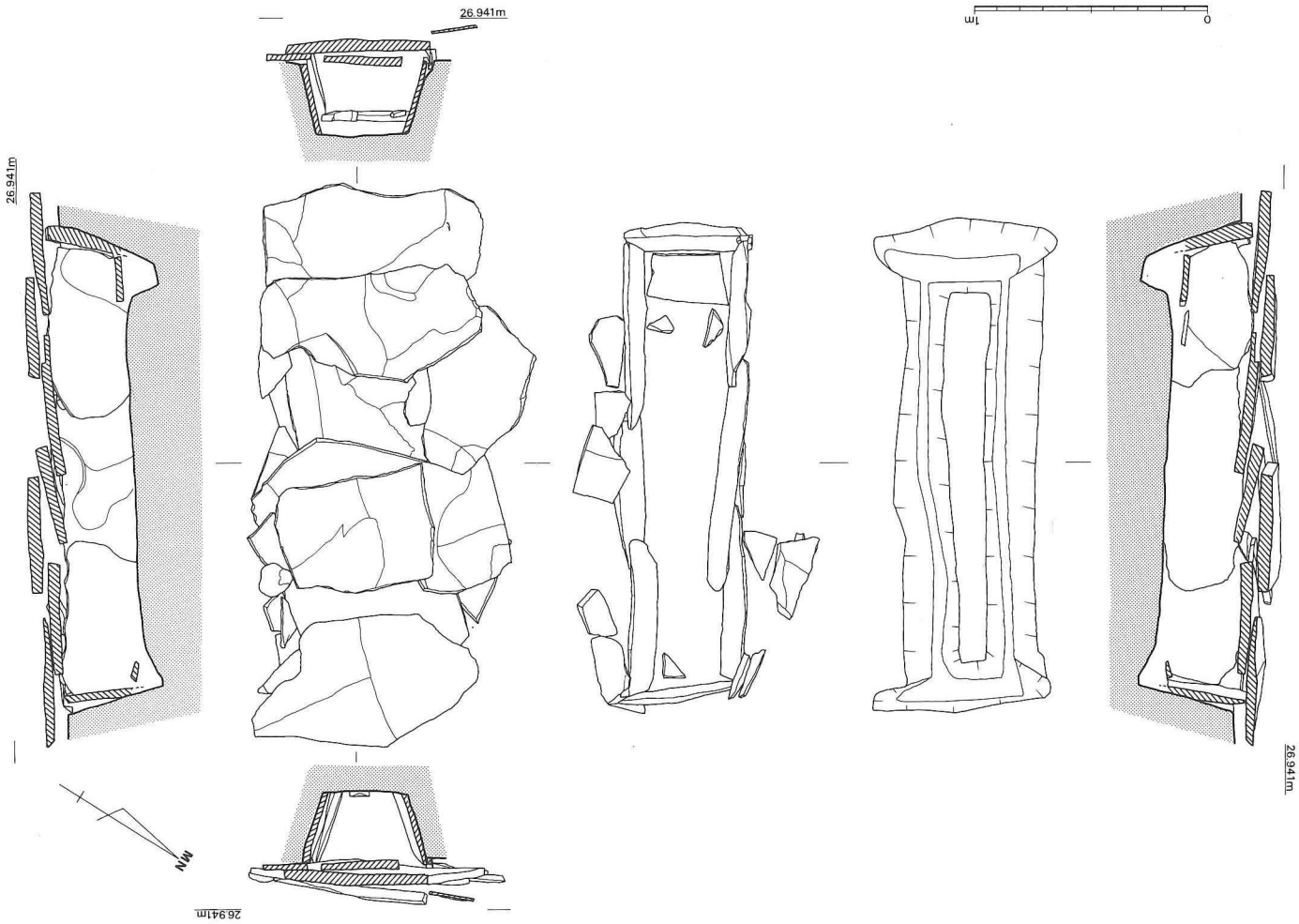
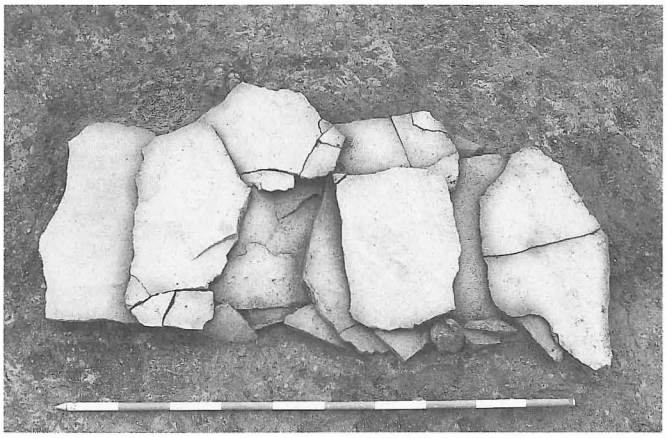
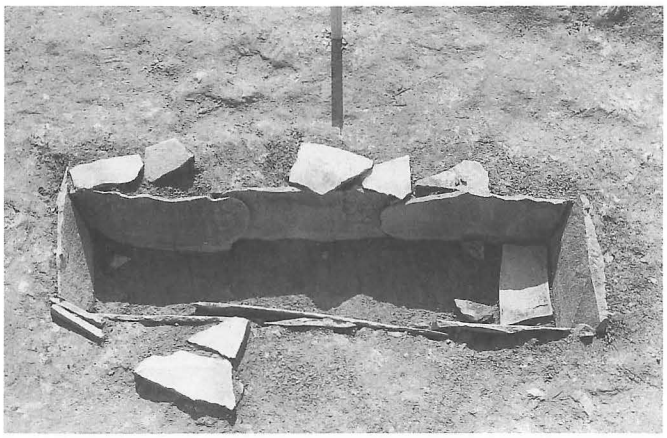


Fig. 16　9号石棺実測図

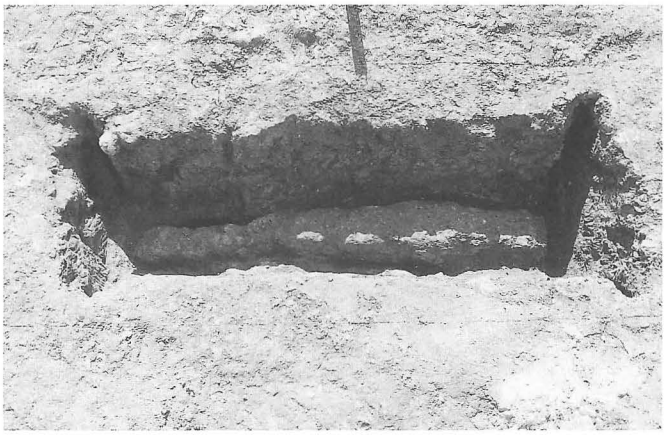
PL. 9　中江9号石棺



全体



蓋石除去



土壙

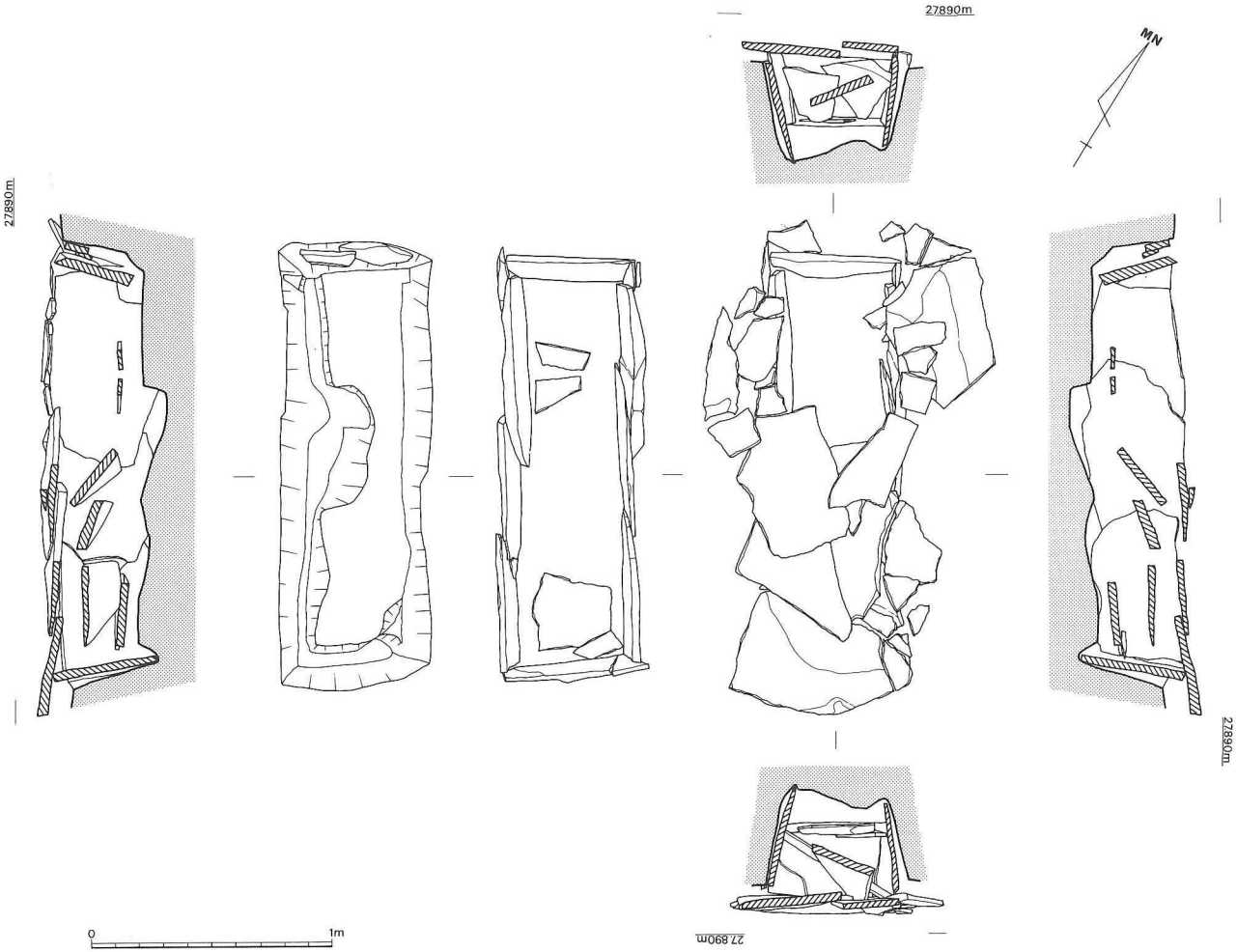
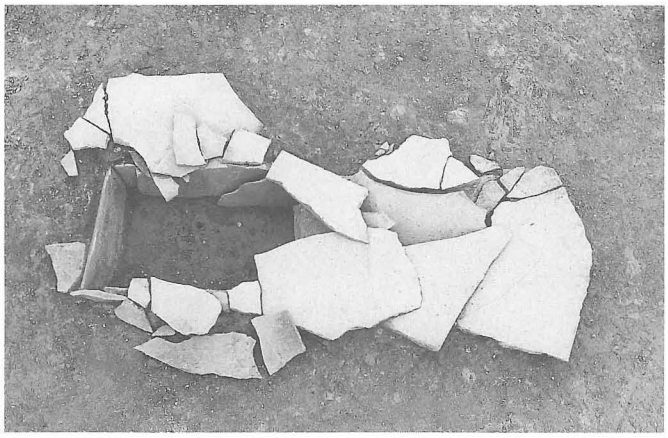
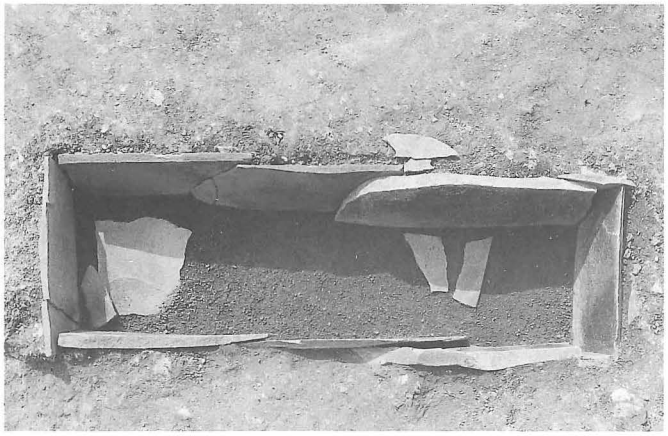


Fig. 17　10号石棺実測図

PL. 10　中江10号石棺



全体



蓋石除去

土壙

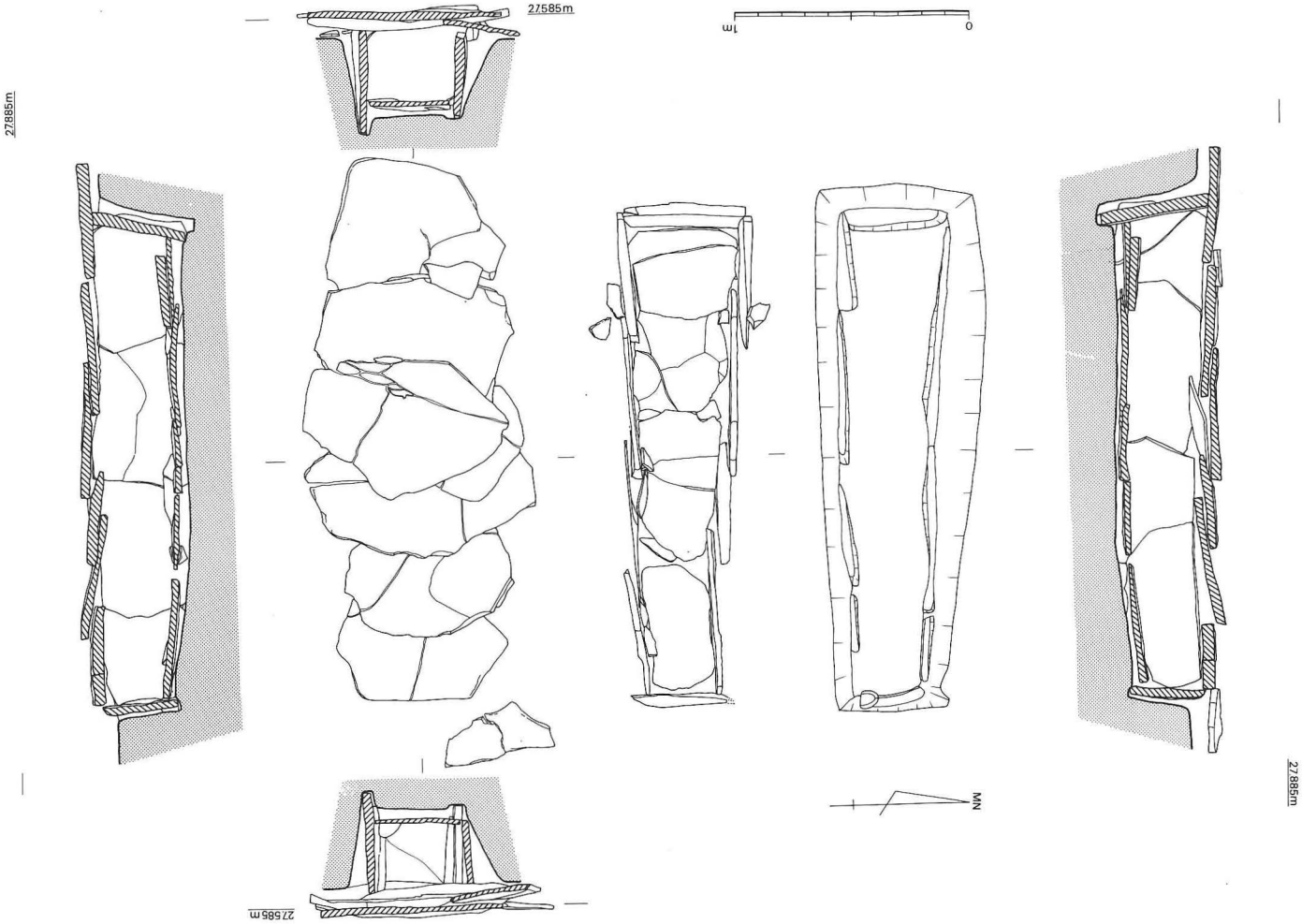
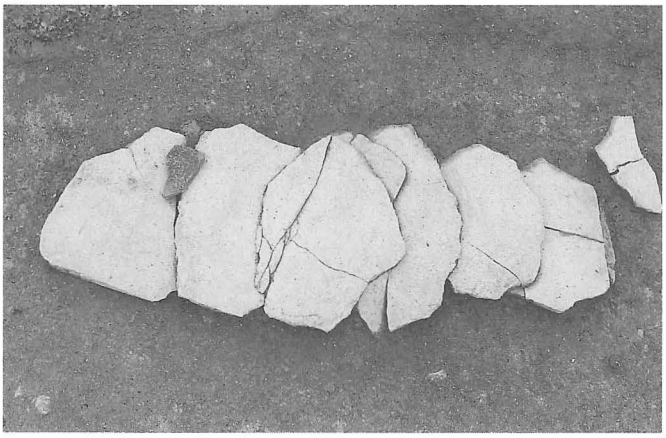
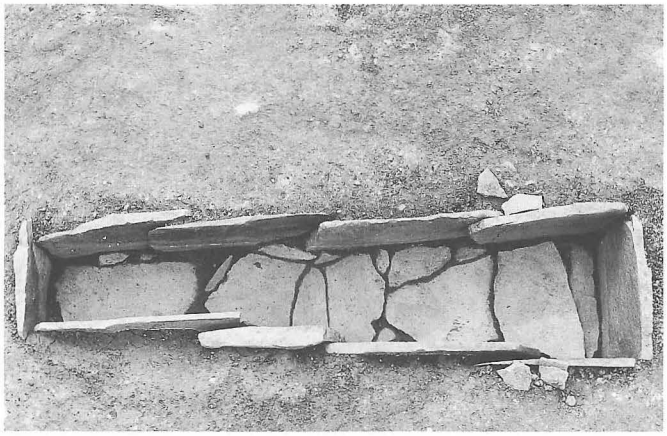


Fig. 18　11号石棺実測図

PL. 11　中江11号石棺



全体



蓋石除去

土壙

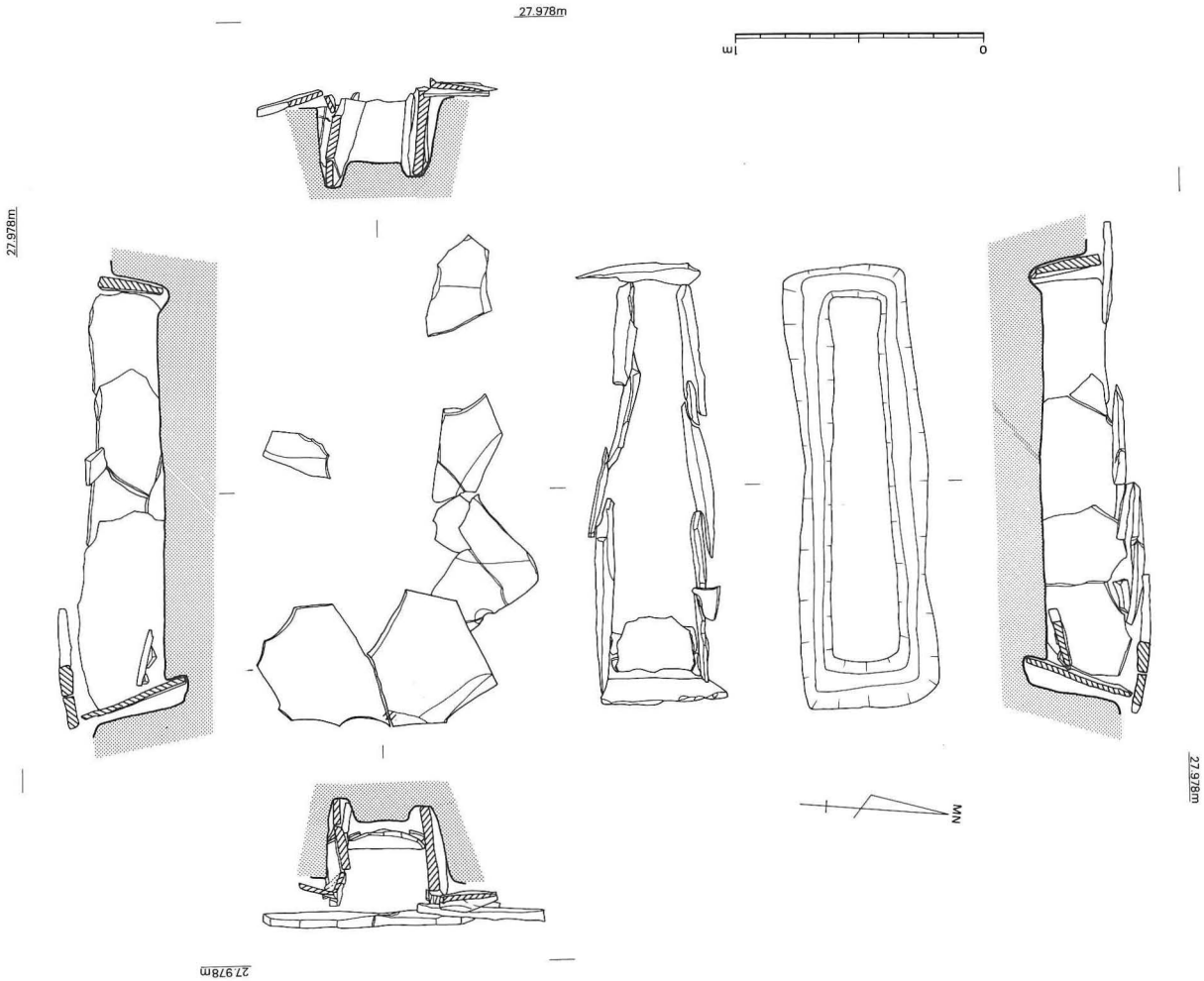
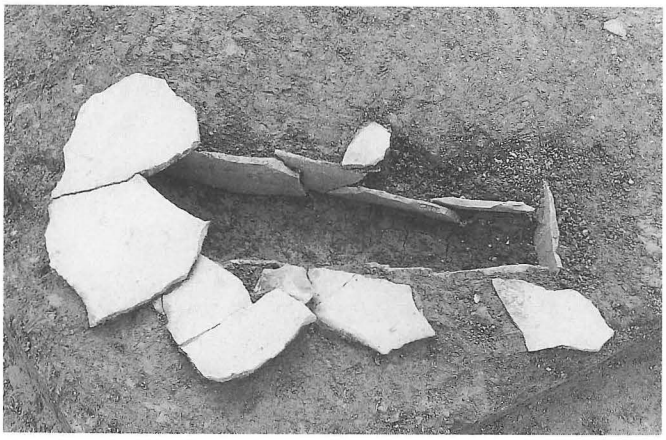
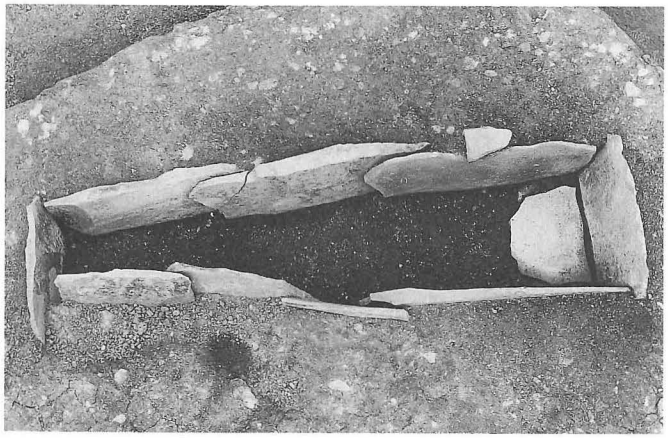


Fig. 19　12号石棺実測図

PL. 12　中江12号石棺



全体



蓋石除去

土壙

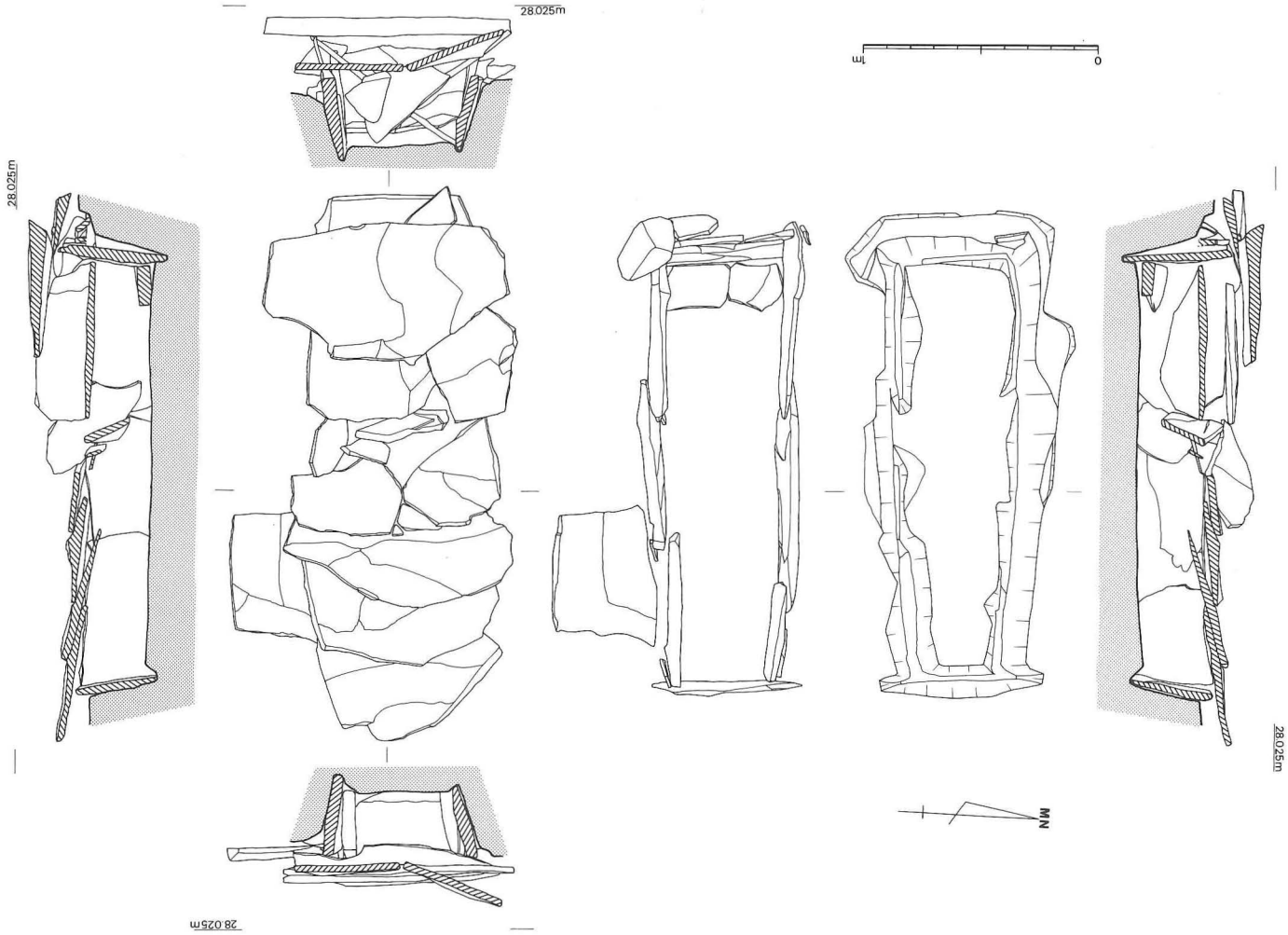
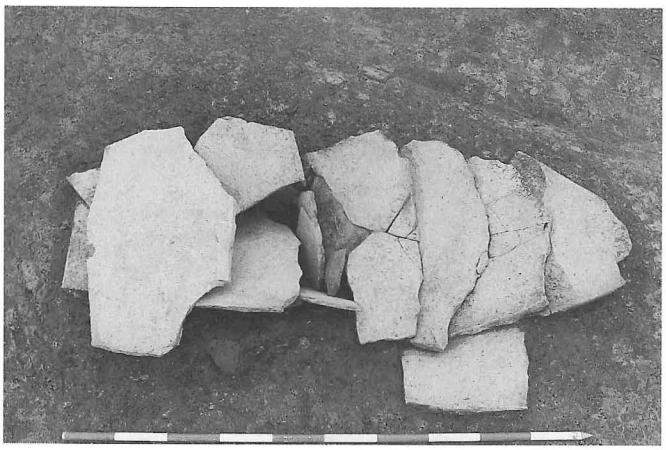
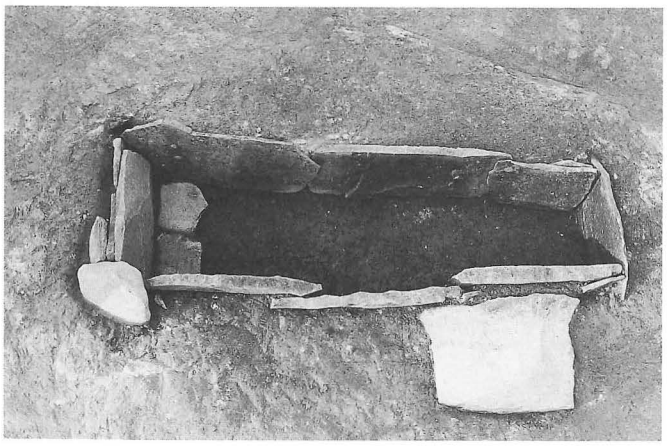


Fig. 20　13号石棺実測図

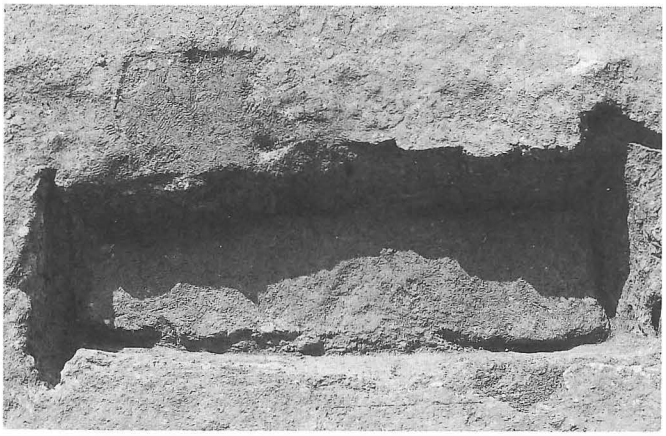
PL. 13　中江13号石棺



全体



蓋石除去



土壙

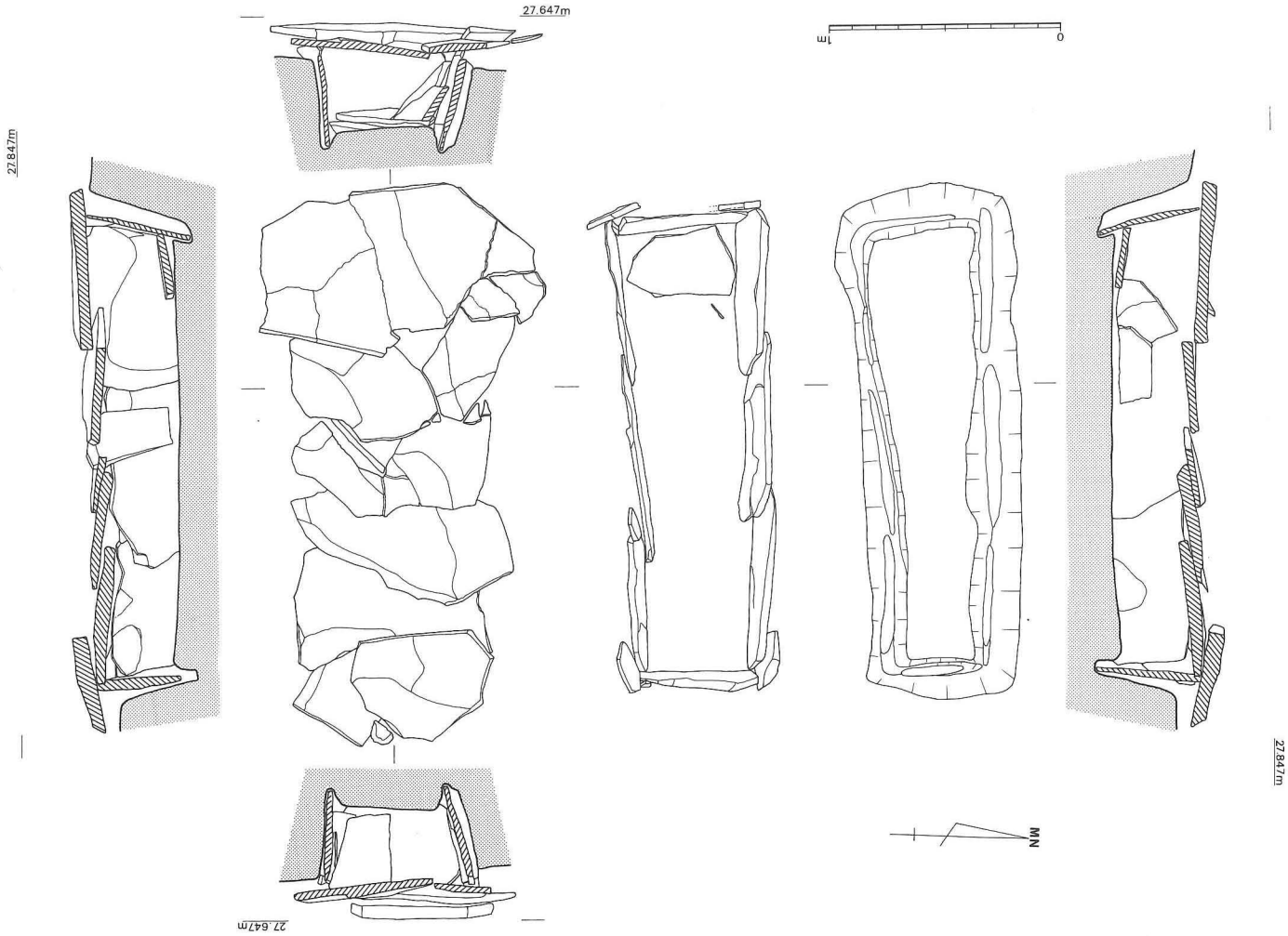
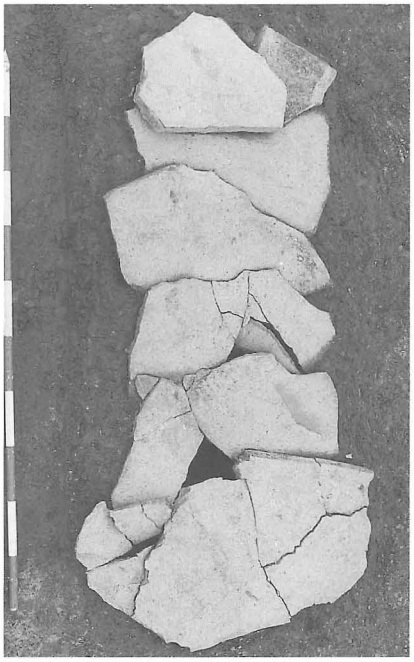


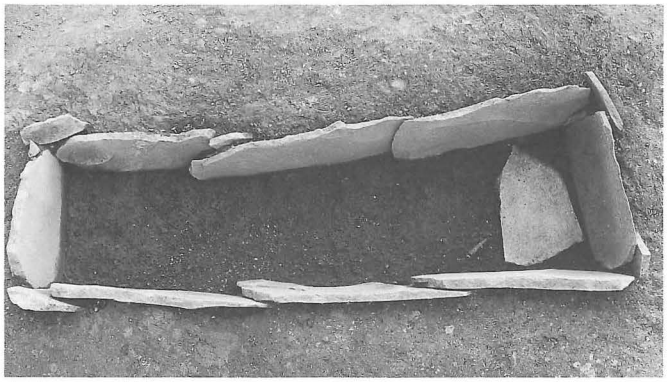
Fig. 21　14号石棺実測図

PL. 14　中江14号石棺

遺物出土状況



全体



蓋石除去

土壙

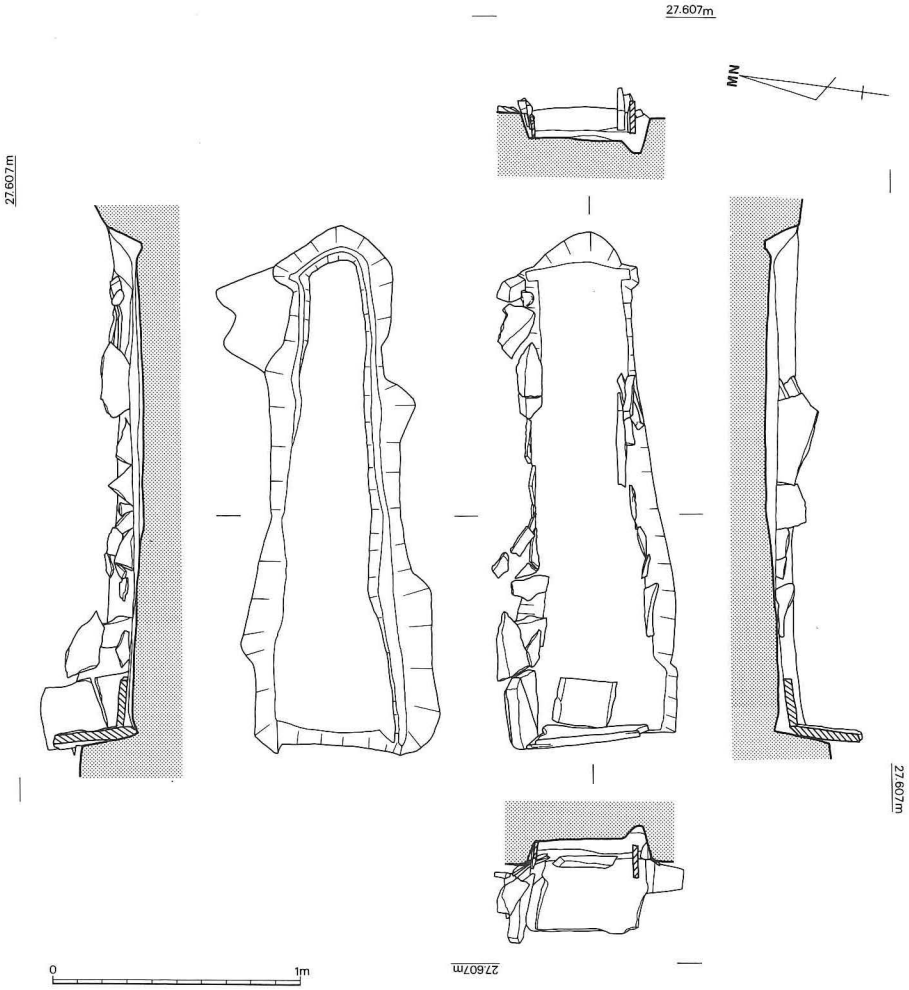
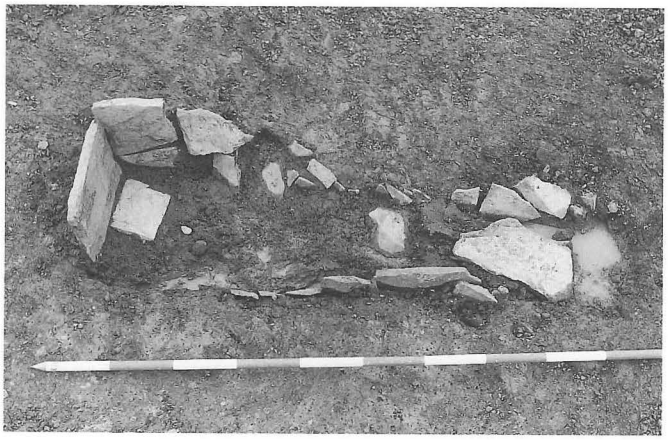


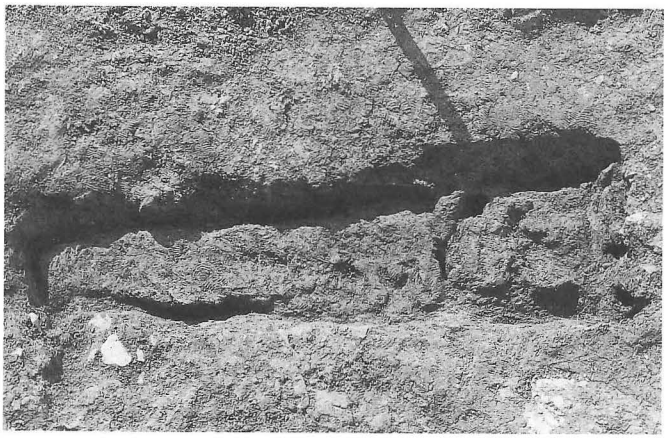
Fig. 22　15号石棺実測図

PL. 15　中江15号石棺

全体



同上



土壙

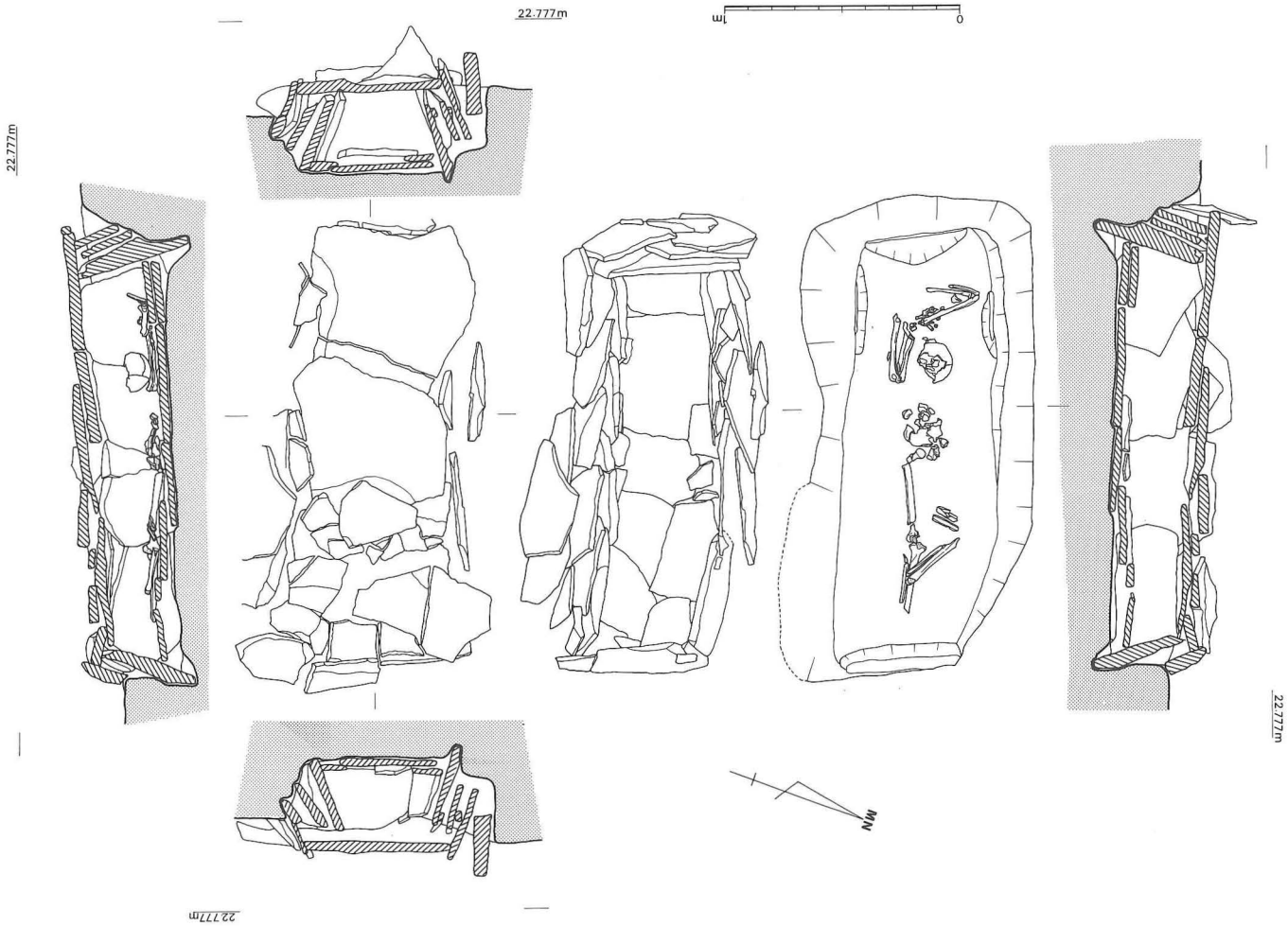
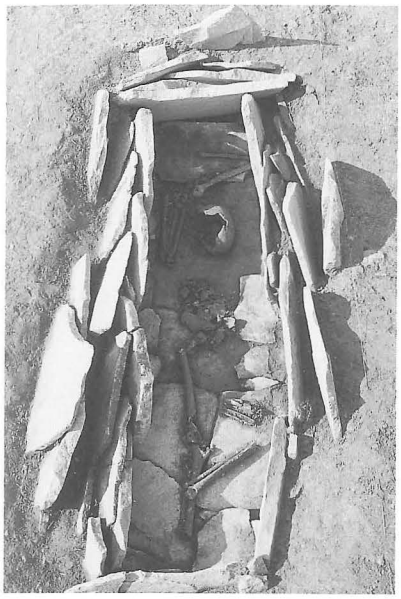


Fig. 23　16号石棺実測図

ＰＬ．16　中江16号石棺



蓋石除去

全体

人骨出土状況

土壙

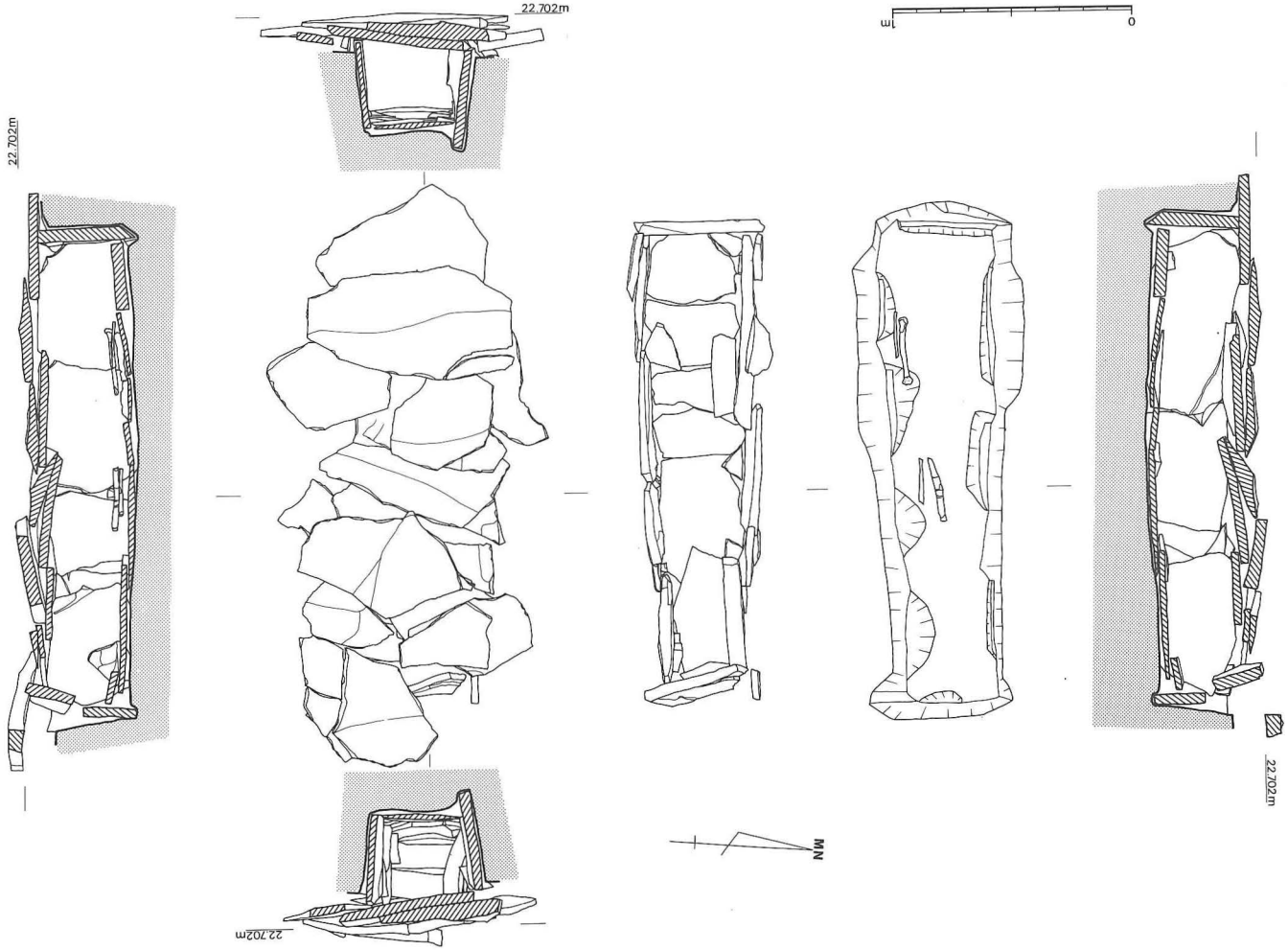
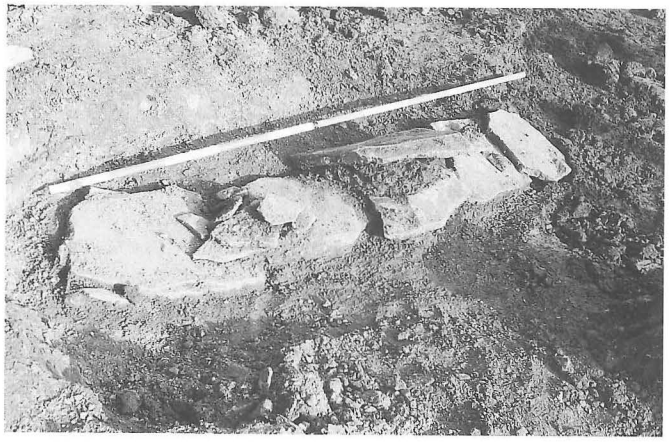
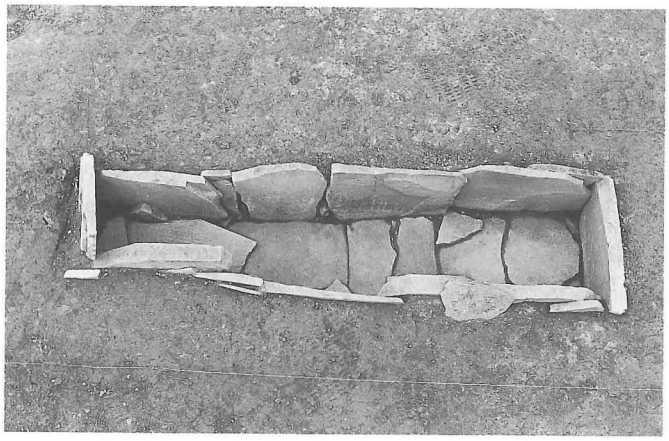


Fig. 24　17号石棺実測図

ＰＬ．17　中江17号石棺



全体



蓋石除去

土壙

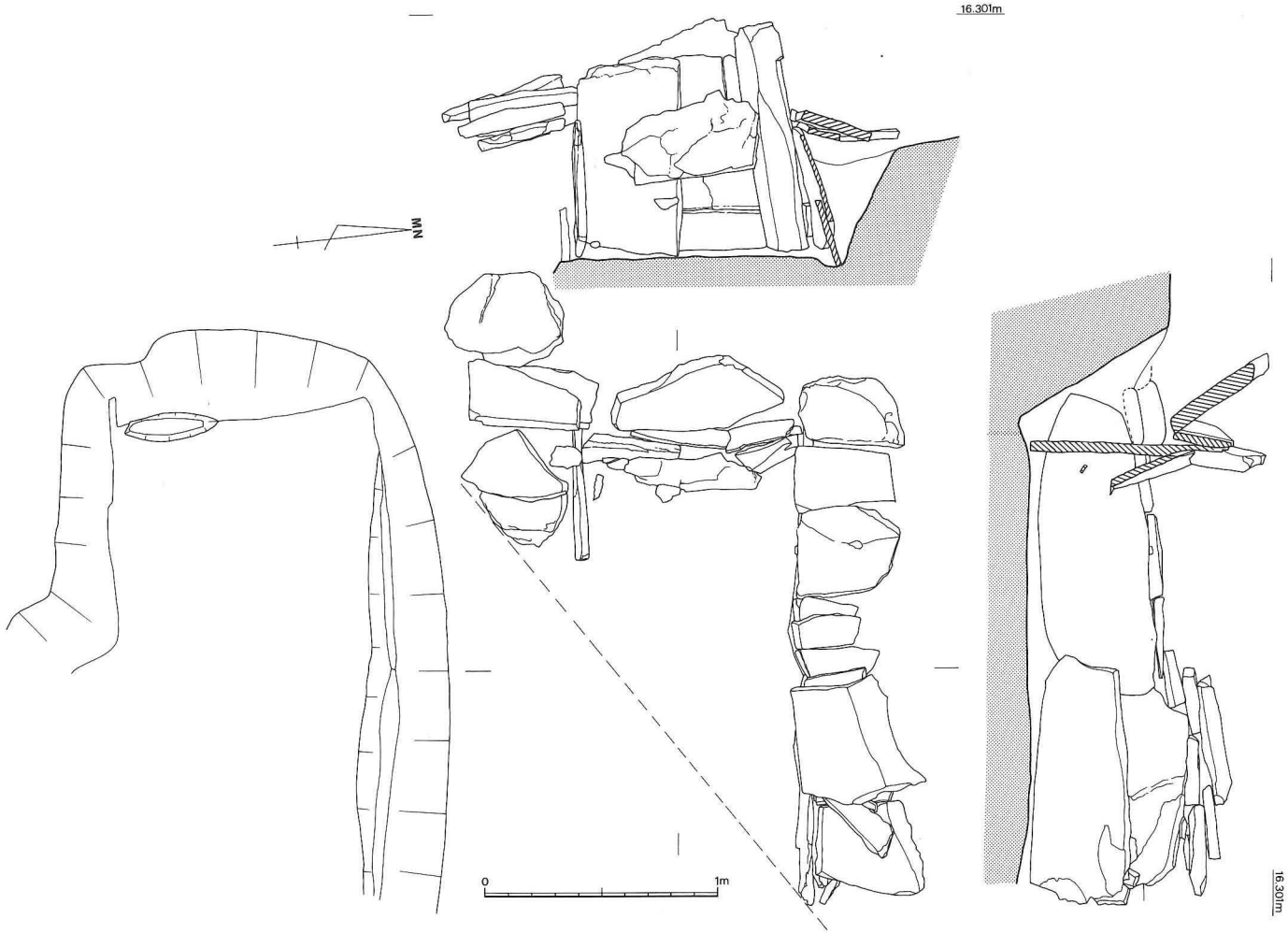
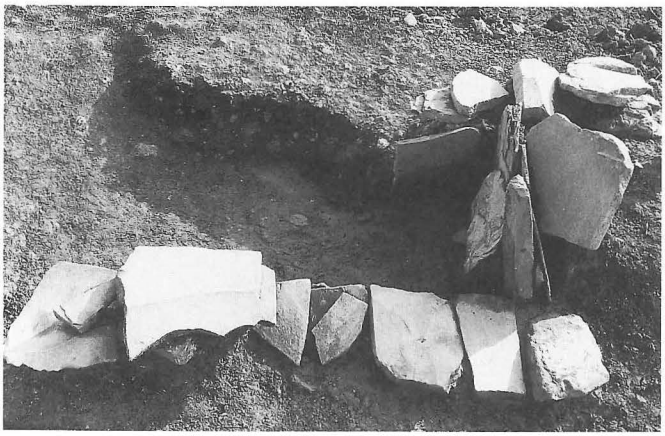


Fig. 25　石棺系石室実測図

PL. 18　石棺系石室

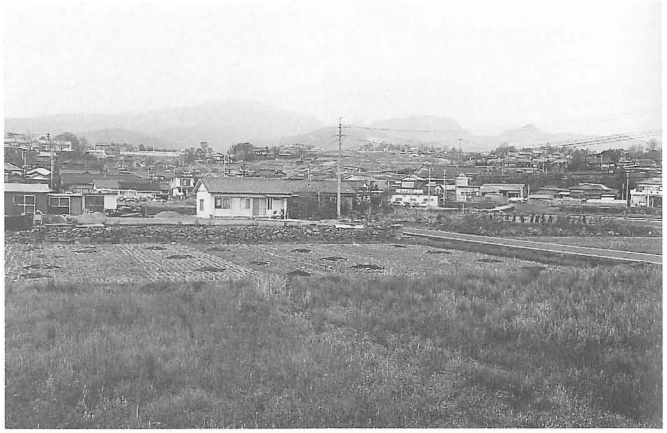
全体

閉塞状況

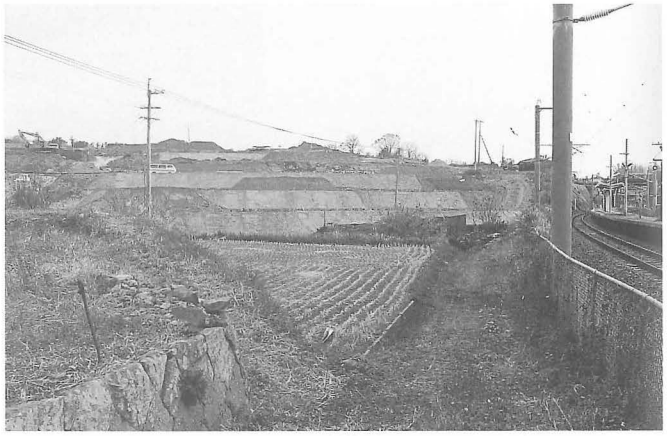


清掃後

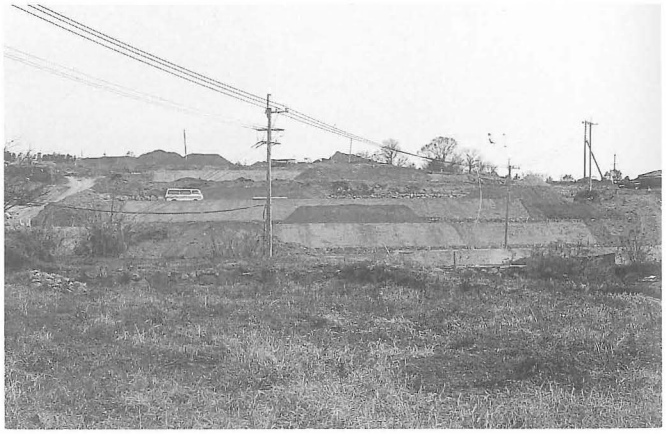
ＰＬ．19　遺跡遠景，近景



遠景（南側）

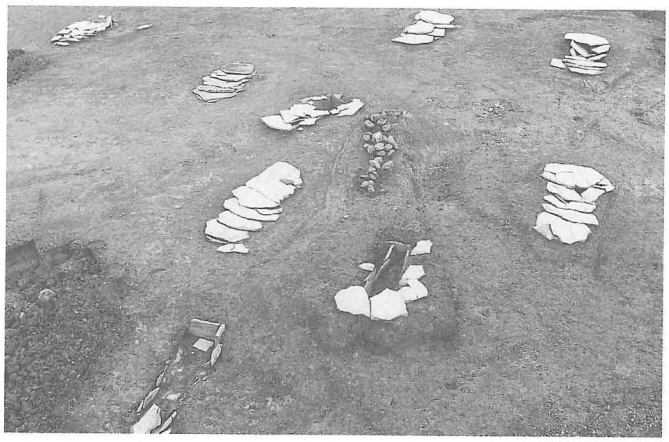


近景（西側）



近景（西側）

PL. 20 遺　構



B地点

B地点

調査風景

2．溝の調査（Fig. 5，6，26）

溝は2条が検出された訳であるが，調査の最終段階の清掃中に発見されたために，十分な精査がされないまま埋め戻しが行われた。残念なことであったが，削平工事はすでに終了しており，これ以上の破壊は免れているのがせめてもの幸であった。

1号溝は現存長12m，幅1m～2mで，東西に緩やかなカーブを描くが，その西側延長は工事によって損壊され旧状を留めていない。東側については一旦終結している。

2号溝は1号溝の北8mの場所にやはり同じよう緩やかなカーブを描いている。現存長は約16mであるがやはり西側は工事によって消滅しているが，東側延長部は1号溝と同様一旦終結している。ここでは2号溝について若干の説明を加えておきたい。

2号溝は全体的に東から西に向かって低く傾斜している。長さは約16m程が残っているだけであるが，幅は狭いところで0.6m，広いところで1.2m程度である。深さは0.4m～0.6mしかなく，溝の断面はV字形に近いU字形をなす。溝上面はそれほど削られた痕跡は見られないことから，本来の形状と大きく異なることはないものと思われる。溝の中には礫が集中的に見られる場所があるが，それらの石は溝上面にある扁平礫とは異なって塊状をしている。

なお，溝西側で2号石棺によって溝が一部切られていること，溝中から出土する土器と溝上面から出土する土器に時期的相違があることから，溝は石棺構築に先立つ弥生中期頃には作られていたことが確認できる。

PL．21　溝

1号溝（左）

2号溝（右）

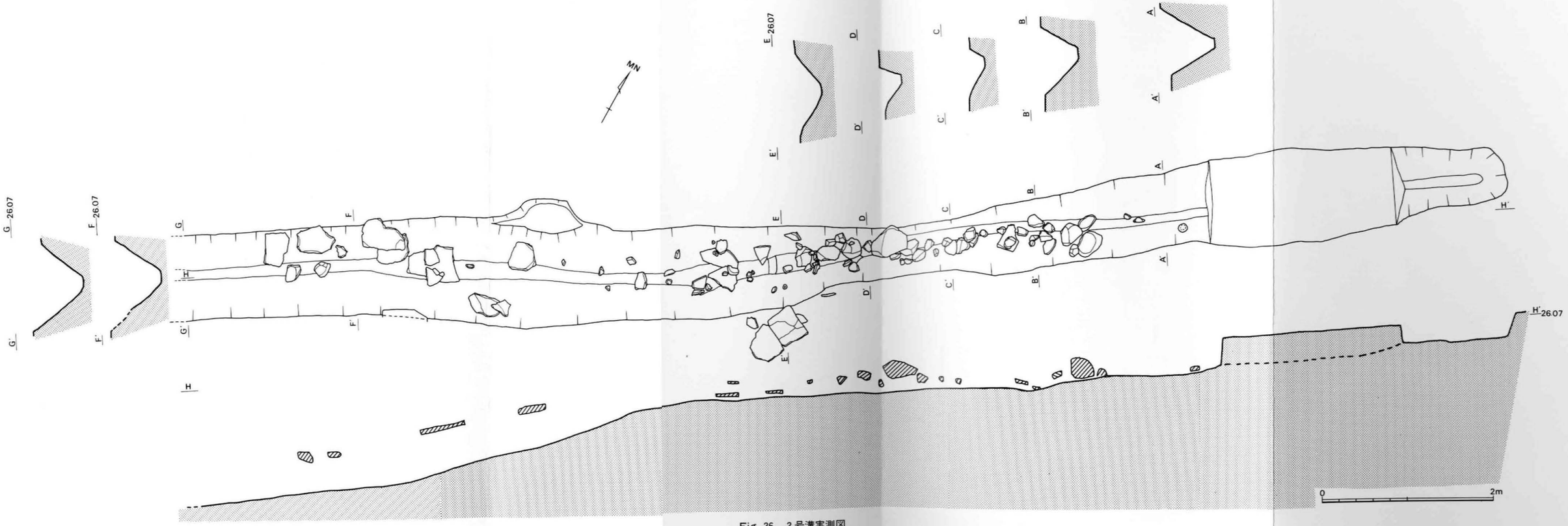


Fig. 26　2号溝実測図

三、出土遺物

1．土　器

中江遺跡から出土した遺物はそれ程多くない。基本的に箱式石棺を主体とする墓地からは，これまで調査された本県の他も遺跡の例からも副葬品を含む遺物はあまり出土していない。

ここで掲載する土器類は全て，B地点の中で検出された溝中から出土した分と，主に2号石棺，3号石棺，4号石棺の周辺から採集された資料である。その他の地点からは遺物は発見されなかった。1～7は弥生土器である。

1～3は2号溝中からの出土である。

1～6は，色調・胎土・焼成などの特長が極めて似ている。すなわち，色調は暗黄褐色で胎土に石英粒と雲母・及び少量の角閃石を含み，焼成は良好である。

1は復元口径が32cmの甕口縁部である。口縁は平坦で，器壁全面に丁寧なナデ調整を行なう。3は高台付甕底部である。底径8cmでゆるく内反しながら安定した底部を形成する。4は復元口径が29cmの甕口縁部である。他の資料に比して胎土に多量の雲母と大粒の石英粒をふくんでいる。7は復元口径が17cm程の鉢であろう。淡い赤褐色で胎土は精選され，金雲母を若干含む。口縁部はやや下がり気味で，その内側の接合面に調整不十分なための凹みが残る。

これらの土器は弥生中期中葉から中期末にかけての資料であり，2号溝の埋没時期の一点が中期末頃にあったことを示している。

8～13は高杯の脚部である。短脚であり，欠損した裾部を推定して加えても5～6cm程にしかならない。

8は黄灰色で胎土に角閃石と雲母を含む。器壁は9mmと厚い。焼成は良いが，器壁に磨滅が見られるため調整痕は明らかではない。胴部・底部とも欠損しているため全容は不明である。9～13は何れも淡い赤褐色系の色調と精選された胎土を持つ。焼成は良好であるが調整痕はあまり明瞭ではない。脚部の裾は何れも大きくラッパ型に広がるが，完形品はなく全容を知り得ない。杯身は底にやや平坦面があるが，すぐゆるやかに内湾しながら胴部にいたる。脚部は中空ではなく，裾部との接合面から段をなして急速に広がる9，11，12，13と接合面に段差が見られずスムーズな広がりを持つ10のタイプがある。脚部の穿孔数は何れも脚と裾部の接合面付近にあり，その数は11～13で3個が確認できるが9，10では確認できない。

14は丸底の鉢である。胴部以上を欠損しているため器形の全容が不明瞭である。色調は明るい赤褐色で，胎土は精選され，僅かに雲母を含む。調整痕は今一つ明瞭でないが，内部底面に指頭による押圧痕が観察される。焼成は良好である。

9以下の資料はこれまで，大村市稗田遺跡3，4号住居址から出土しており，報告者[註1]は布留式の古段階を考えている。

註1　橋本幸男ほか「稗田遺跡」長崎県大村市稗田遺跡調査会　1988

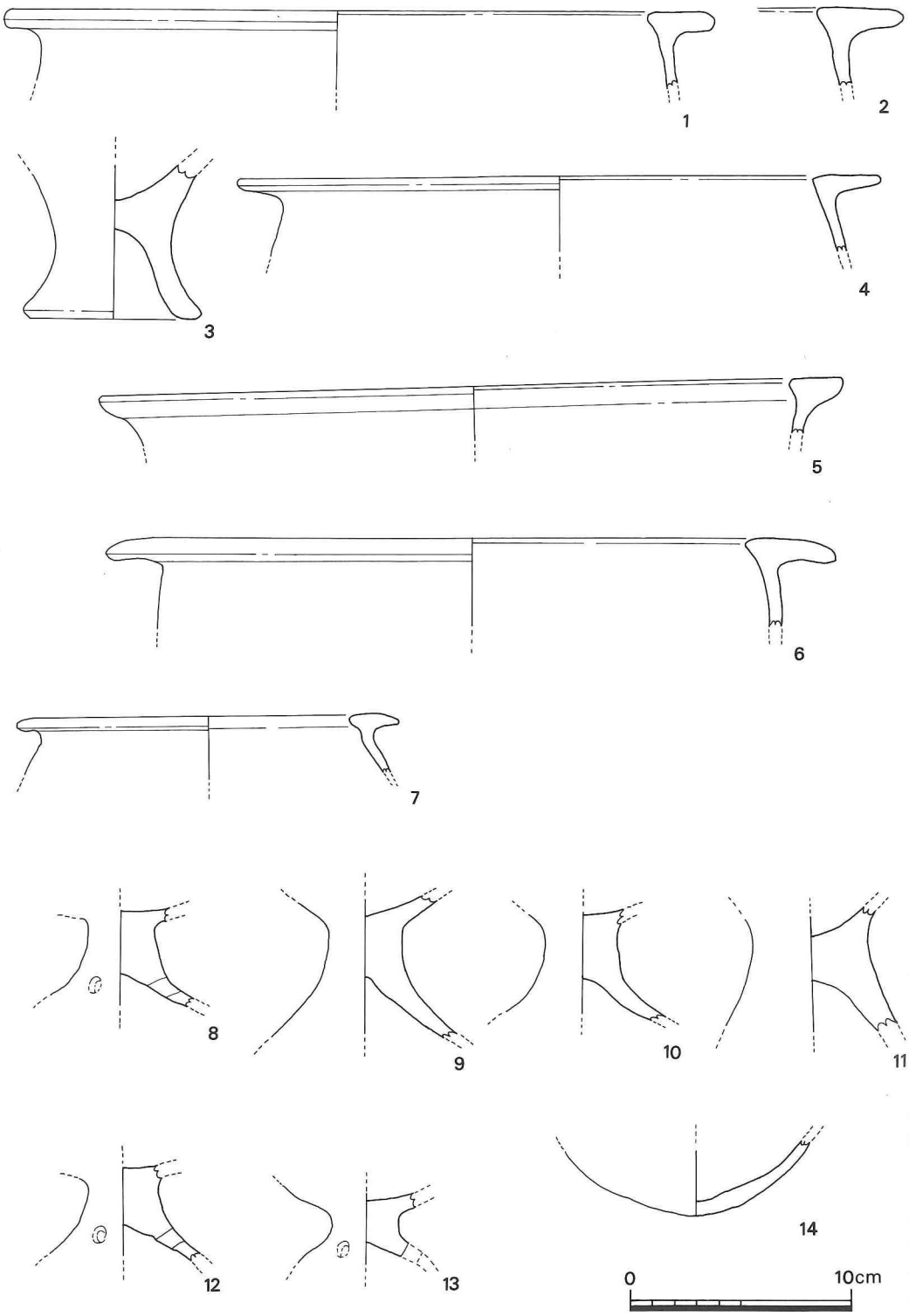


Fig. 27　中江遺跡出土土器実測図

2．鉄　　器（Fig. 28）

全部で７点の鉄器が出土した。

１は刀子の先端部である。現存長4.8cm，幅1.5cm，厚みは背部で５㎜である。毀損面があたらしいので工事によって破損したものと思われる。１号石棺周辺出土である。

２は鉄鏃の先端部である。平根鏃であるが，基部を欠損しているため全容が不明である。身は薄く３㎜程である。やはり１号周辺から出土している。

３は刀子である。先端部をやや欠損している。現存長11cmで茎部長が3.4cmである。厚みは背部分で４㎜であるが，茎部は断面が方形をなす。やはり１号周辺からの出土である。

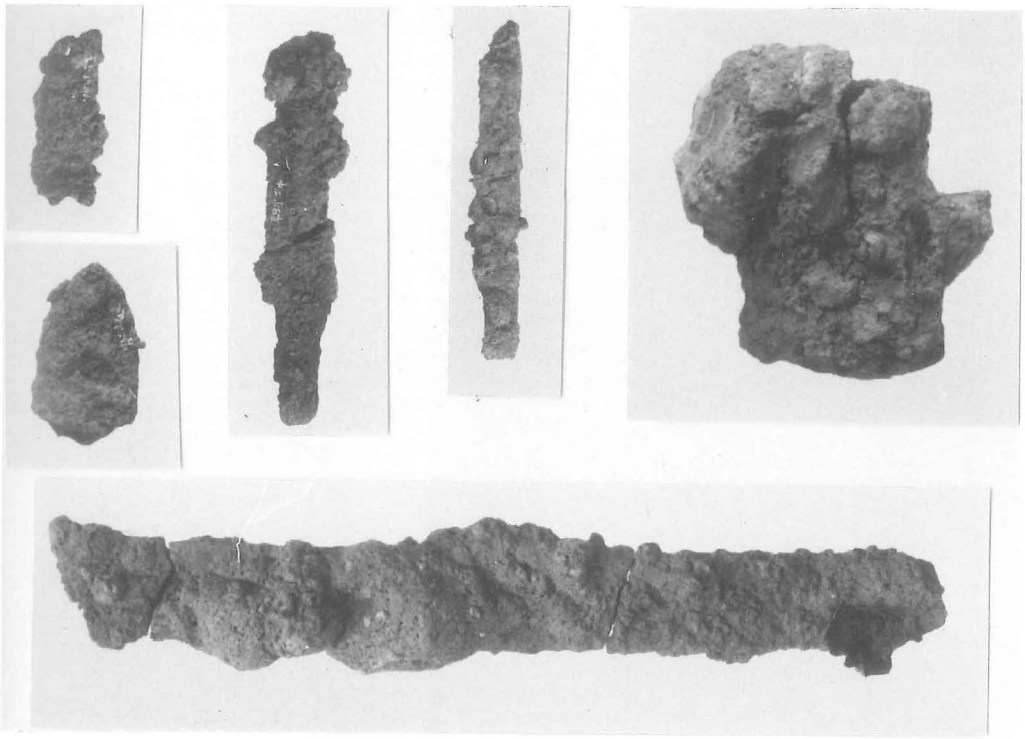
４は２号石棺内出土の副葬品である。完形品で，全長9.3cm，幅1.2cmを測る。茎部長は２cm程あるが，刃部との境部には明確な段はない。

５は鉄剣と思われるが，先端部，基部共に欠損しているために全容が不明である。現存長は25cmで幅2.6cmを測る。身の厚みは７㎜で断面は菱形を呈する。Ｂ地点表採資料である。

６は有袋鉄斧である。長さ8.5cm，幅５cm，袋部の厚さは２cmで170ｇを測る。袋部は断面方形で完全につながらない。13号石棺周辺出土である。

以上の鉄器は何れも鍛造品である。

ＰＬ．22　出土鉄器



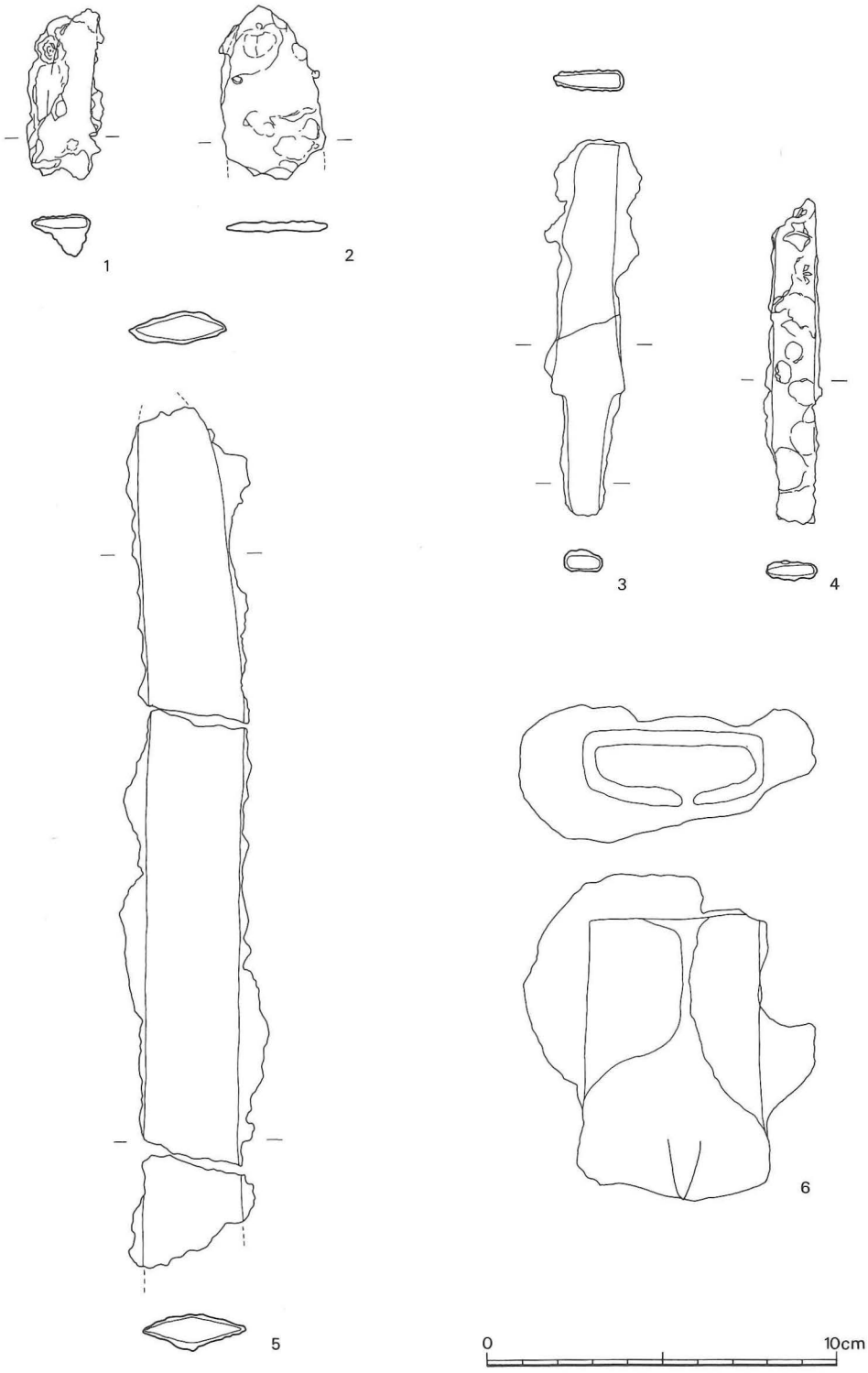
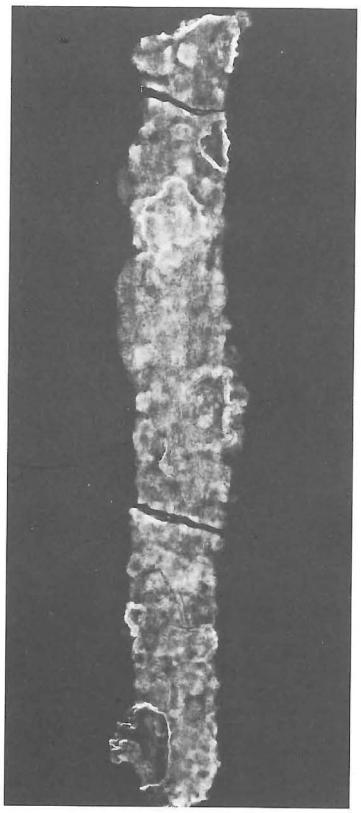
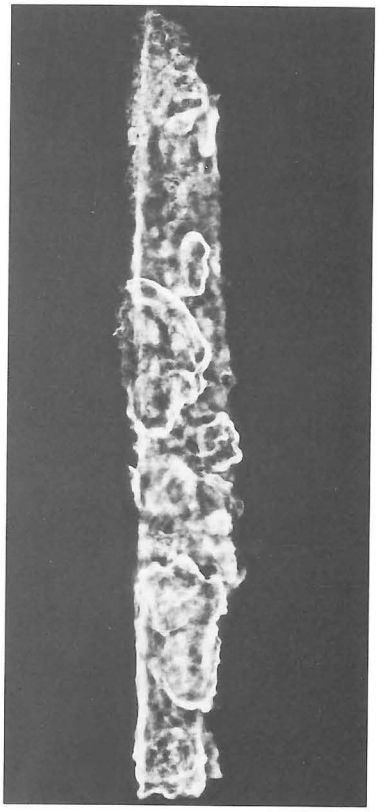


Fig. 28　中江遺跡出土鉄器実測図

ＰＬ．23　鉄器Ｘ線写真（縮尺不同）

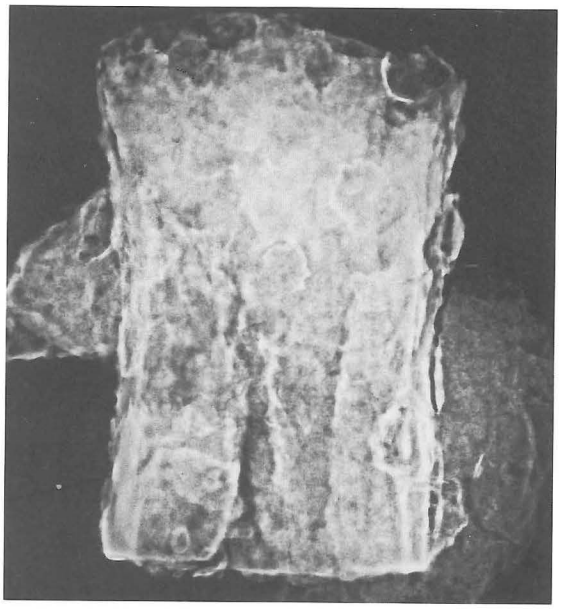


鉄剣（Fig. － 5）



刀子（Fig. － 4）

鉄斧（Fig. － 6）



3．まとめ

今回の発掘調査で確認した19基の遺構の内，石室である1，18号と未調査の19号を除く箱式石棺の特長を述べておきたい。

各遺構の計測表等についてはTab．1に掲載したが，長さ1.5～1.7m程度のもの6基，1.7～1.9m程のもの8基，そして1.9～2mのもの2基の3タイプが見られる。幅は0.3～0.4mと0.4～0.6m程度の2タイプがあるが，長さと幅との間には特に規則性は見られないようである。ただ，石室とした1，18号は幅画0.9m以上あり，他の石棺とは明瞭に異なる。

石棺の方位については，石枕の位置から判断すると11基が西または南西方向，3基が東，1基が南で不明1基となっている。圧倒的に西枕が多いことになる。この方位については石棺の築かれた場所が特に地形的制約を受ける理由もないことを考慮すると，この遺跡においては明確な埋葬方位の意識のもとに築かれたものと思われる。

石棺の構造については，側壁材がそれぞれ3～4枚と共通しているのに比べて蓋石の数に大きな差が見られる。一般的に蓋石の数は5枚から多くて9枚程度であるが17号石棺は11枚と多く，7号石棺にいたっては20枚と不必要と思われる位の多さを有している。この場合，多くの蓋石を重ねることによって石棺内にドーム状の空間を作り出す例を有する，弥生時代以来の五島列島[註1]や西北九州の海岸[註2]沿いに見られる各遺跡の場合とは構造的にやや異なるが，遺構の上を多くの石材で覆う特長は，これらの地域の伝統を引き継いでいるものと思われる。

箱式石棺を主体とする墓地は，殆どの場合副葬品の僅少さからその正確な時期を決定するのは容易ではない。これまで経験では，やはり副葬品から時期決定が出来ない場合は，石棺の法量すなわち棺の長径[註3]が長い程時期が後出するという傾向や，棺床に栗石を持つ例は古墳時代に多いということから時期を推定してきた。本遺跡の場合，全ての石棺が1.5mを越し，また棺床に砂利石を敷くものが有る。また，3，4，8号のように弥生時代後期以降に見られる石蓋土壙が混在している。これらの事実を考慮すると，弥生時代後期以降古墳時代にいたる墓地であった可能性が高い。なお，特に18号については石棺系石室であることは前述した。このタイプはこれまで大村市黄金山古墳[註4]，小佐古石棺1号[註5]で知られていたが，有明海に面した古墳では初例である。時期的には4世紀末から5世紀中頃までに比定されよう。

2条検出された溝と墓地との関係等については後日稿を改めたい。

註1　小値賀町教育委員会　「神ノ崎遺跡」　小値賀町文化財調査報告書　第4集　1984

2　佐世保市教育委員会　「宮の本遺跡」　佐世保市埋蔵文化財調査報告書　1970

3　多良見町教育委員会　「化屋大島遺跡」　多良見町文化財調査報告書　第2集　1974

4　小田富士雄　「長崎県大村市・黄金山古墳」　九州考古学39・40　1970

5　大村市教育委員会　「小佐古石棺墓群」　大村市文化財調査報告書　第13集　1988

四、長崎県高来町中江遺跡出土の人骨

分部　哲秋*，野田　耕一*，佐伯　和信*，長島　聖司*

はじめに

長崎県北高来郡高来町大字下与名字中江に所在する中江遺跡は，高来町小江地区県営圃場整備事業のために1991年（平成３年）10月から11月にかけて，高来町と長崎県教育委員会文化課によって調査され，６基の石棺から６体の人骨が検出された。

長崎県においては弥生時代人骨は比較的多数が出土しており，その位置付けは内藤芳篤らによってなされているが，それに続く時代の人骨はほとんど出土しておらず，この地域の人々の骨格がどのように変化していったのか解明されていないのが現状である。本遺跡出土人骨のうち１体は古墳時代に属するものであり，また，地理的にみてこの遺跡は有明海に面していることから，有明海沿岸地域との関係を捉えるうえでも，人骨の特徴について報告を行うことは重要であると考えられる。人類学的観察および計測を行い，興味ある結果を得たので報告する。

資料・方法

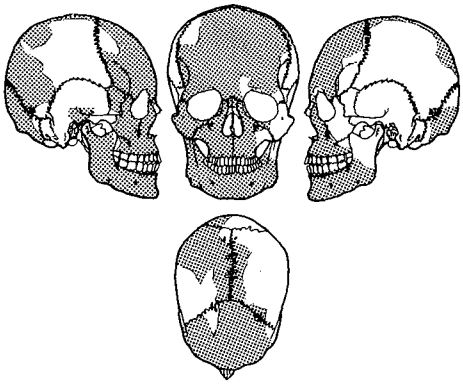
中江遺跡においては18基の石棺と１基の古墳が発掘調査され，それらのうち Tab. 2 に示しているように６基の石棺から６体の人骨が検出された。発掘時の調査並びにその後の分析の結果では，１石棺に複数体を埋葬した例は見出せなかった。各人骨の所属の時代は，別稿で述べられているように考古学的所見から，１号石棺人骨については古墳時代に属するものと考えられているが，他の５人骨については弥生時代に属するのか古墳時代のものかは確定されていない。また，主な人骨の残存状態は Fig. 29に示しているとおりである。

計測は，Martin-Saller（1957）の方法に従ったが，脛骨の横径についてはオリビエの方法で行った。

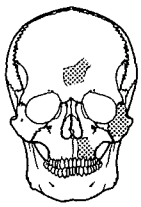
Tab. 2　人骨資料

人骨番号	性別	年齢	遺　構	時　代	備　　考
１号石棺人骨	男性	熟年	箱式石棺	古墳	
４号石棺人骨	不明	不明	箱式石棺	弥生～古墳	
６号石棺人骨	不明	不明	箱式石棺	弥生～古墳	
８号石棺人骨	不明	不明	箱式石棺	弥生～古墳	
16号石棺人骨	男性	熟年	箱式石棺	弥生～古墳	朱（頭蓋）
17号石棺人骨	不明	不明	箱式石棺	弥生～古墳	朱（頭蓋下の土）

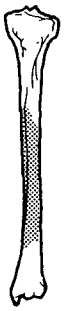
＊長崎大学医学部解剖学第二教室



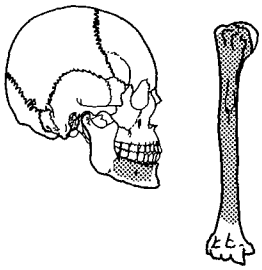
1 号石棺人骨
（男性，熟年）



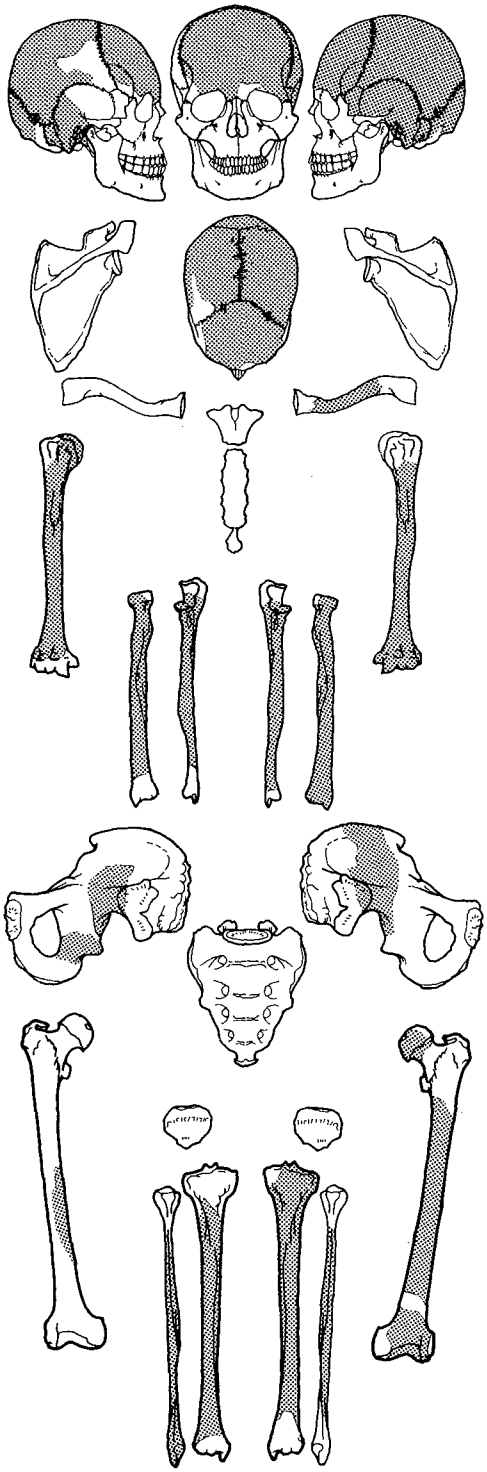
4 号石棺人骨
（不明，不明）



8 号石棺人骨
（不明，不明）



17号石棺人骨
（不明，不明）



16号石棺人骨
（男性，熟年）

Fig. 29　人骨の残存図（アミかけ部）

所　　見

各骨の計測値は，文末に一括して掲げている。

1号石棺人骨（男性，熟年）

1．頭　　蓋

脳頭蓋は左側と底部を，顔面頭蓋は左側の頬部を欠損している。脳頭蓋の骨壁は厚くはないが，眉上弓が発達し，眉間も前方に強く突出しており，外後頭隆起も発達している。縫合は矢状および冠状縫合の内板が閉鎖，外板は半分程度閉鎖している。また，顔面では咬合形式も鉗子状咬合に近く，歯槽性の突顎は認められない。

脳頭蓋の計測値は，頭蓋の前後方向の径を示す最大長が191㎜と長く，頭蓋の最大幅は右半の径を2倍することによりもとめると（144［72㎜×2］）㎜となる。したがって頭蓋長幅示数は（75.39）となり，頭型は長頭型に近い中頭型に属し，長頭傾向がうかがわれる。

顔面頭蓋の計測値は，顔面の幅を示す計測項目の一つである中顔幅は右半の径を2倍することによりもとめたもので（104［52㎜×2］）㎜，また，一般的に言われる顔の長さを示す顔高は114㎜，上顔高は68㎜で，したがって顔のプロポーションを示す顔示数（Virchow's）は（109.62），上顔示数（Virchow's）は（65.38）を示し，顔面形態の分類ではそれぞれ過広顔型，広上顔に極めて近い中上顔型に属す。また，眼窩の形態を示す眼窩示数は72.34（右）を示し，分類では低眼窩に属し，鼻部の形態も鼻示数は56.86を示し，過広鼻に近い広鼻型に属す。つまりこの人骨の顔面は，眼窩および鼻部を含み低顔傾向が著明である。

下顎骨については下顎体が頑丈で，下顎枝の幅も広い。

歯はほとんどが残っており，これを歯式で示すと次のとおりである。

*	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	×	×	*
×	×	×	○	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

〔○ 歯槽開存
× 歯槽閉鎖
* 未 萌 出〕

咬耗の程度は切歯群がBrocaの3度で，その他の歯は2度である。風習的抜歯は認められない。

2．四 肢 骨

左側の鎖骨の一部と上肢骨の小骨片が残存しているが，保存状態が悪く計測はできない。下肢骨等は工事により欠失したものと考えられる。

3．性別・年齢

この人骨は骨盤が残存していないのでこれからの性別の推定はできないが，頭蓋の眉間や外後頭隆起はかなり特徴的で，男性と推定される。推定年齢は，縫合の閉鎖はかなり進行しており，また，咬耗の程度もやや強いことから，熟年に相当するものと考えられる。

4号石棺人骨（不明，不明）

頭蓋の一部のみ残存していた。骨種が同定されたのは，前頭骨，左側頬骨，左側上顎骨および下顎骨の一部である。いずれも腐朽がひどく，骨の長さや頑丈さを知ることはできない。また，下顎骨に付随して数本の歯の痕跡が認められたが，歯種および乳歯か永久歯か否かについても不明である。したがって性別および年齢の推定もできない。

6号石棺人骨（不明，不明）

頭蓋は，脳頭蓋が約10×8cmの大きさで残存しており，おそらく頭頂部と推測される。縫合の有無および骨壁の厚さは不明である。四肢骨については，大腿骨の骨体中央部付近が骨片となって残っているが，左右の別は不明である。したがって性別および年齢は不明である。

8号石棺人骨（不明，不明）

頭蓋については，脳頭蓋の一部と考えられる骨細片が残存しているが，骨種は不明である。四肢骨は，大腿骨と脛骨が残存している。このうち大腿骨は右側が小骨片，左側と骨体中央部後面の一部である。脛骨は右側が小骨片，左側は骨体中央部で，左側については計測が可能であった。骨体周は74mm（左），骨体中央断面示数は64.29（左）で値は小さくて，骨体は扁平である。

性別の推定については各骨の太さから推定される場合もあるが，この人骨では参考資料が脛骨のみであり，危険が大きいので性別の推定は行わない。また，年齢も不明である。

16号石棺人骨（男性，熟年）

1．頭　　蓋

脳頭蓋のみが残っている。前頭結節は良く発達し眉上弓の隆起は弱く，骨壁も薄いので，一見女性骨の印象を受けるが，乳様突起の基部は大きく，また外後頭隆起は後方に強く突出している。縫合は内板が閉鎖し，外板はブレグマの周囲のみが開いている。

脳頭蓋の計測値のうち頭蓋最大長は173mm，頭蓋最大幅は133mmで，脳頭蓋は小さい。頭蓋長幅示数は76.88となり，頭型は長頭型にやや近い中頭型に属している。

2．四 肢 骨

1）上肢骨

上腕骨は，右側は遠位端，左側は骨頭を欠損している。計測値表には掲げていないが，両側を合わせて最大長を計測してみると，295mmとなる。骨体の周径は小さく，骨体は長さの割に細い。骨体断面示数は65.22（右），66.67（左）となり，骨体には強い扁平性が認められる。

前腕では，橈骨の最大長が計測でき，230mm（左）の値が得られ，これを用いての推定身長はピアソン法では161.16cm，藤井法では159.30cmが算出された。

2）下肢骨

大腿骨はやや細く，骨体後面の粗線のうち外側唇は発達しているが，柱状形成の像は認められない。しかしながら，上骨体断面示数は75.86（左）を示して示数値は小さく，骨体上部は扁平である。

脛骨も大腿骨と同様に骨体は細く，ヒラメ筋線などの筋付着部の発達も良好である。また，骨体の横断面形を表す中央断面示数および栄養孔位断面示数は，それぞれ62.07（右），65.52（左），64.71（右），63.64（左）となり，示数値は小さく，骨体に扁平性が認められる。

3．性別・年齢

性別は骨盤をつくる寛骨の大坐骨切痕の形態と外後頭隆起の発達の程度から男性と推定した。年齢については，先ず高年齢で癒合する寛骨等の骨端が癒合を完了していることから成人である。また，縫合のほとんどが閉鎖前であることと老人性の骨変化を強く示す部位が見当たらないことから，熟年とした。

4．埋葬状態

発掘時の所見と整理過程で得られた所見を総合すると，伏臥埋葬と判断される。上肢については左側上肢は手を頭部の下におき，右側上肢は下肢とは逆方向において屈しており，下肢はほぼ伸展して埋葬されている。特異な埋葬形態と考えられるので記載しておく。

17号石棺人骨（不明，不明）

頭蓋は下顎の右半が残存しているが，辛うじて部位が同定できる程度である。四肢骨では上腕骨と大腿骨が残存している。共に腐朽が激しく，上腕骨と発掘時の所見から右側と判断されたが，大腿骨については左右の別は不明である。

全体的に保存状態が悪く，性別および年齢の推定はできない。

考察および総括

長崎県から佐賀県にかけての遺跡から出土した弥生人骨は，これまでに内藤芳篤らによって収集され，脊振山系によって隔てられた北部九州の平野部出土の弥生人と西北九州の海浜部出土の人骨群に分けられている。前者は高顔，高身長を特徴とする人骨群で，後者は低広顔，低身長を特徴としており，このことから内藤は後者を縄文人の継続と考え，同時代に地域を異にして二系の弥生人が存在していたことを明らかにした。この論は作業仮説として定着しつつあるが，同時に，これに先立ち三津遺跡（佐賀県東脊振村）および土井ケ浜遺跡（山口県豊北町）の資料をもとに弥生人の渡来説を展開した金関らの論の補強にもなっている。

ここで報告する中江遺跡は，地理的にみて縄文系弥生人骨が出土している長崎県の西海岸部と渡来系と考えられている弥生人骨が出土する佐賀県平野部の中間にあたること，また有明海に面していることから，海を介しての人的交流の痕跡は伺われるのか否か。先述した弥生人が

弥生中期を中心とする人骨群であるのに対して，1号石棺出土人骨は古墳時代に属しており，時代的変化が認められるのかの観点から考察を試みた。

頭蓋に関して，西北九州タイプの弥生人とされている西北九州弥生人（内藤）および大友弥生人（佐賀県呼子町），北部九州タイプの弥生人とされている三津弥生人（佐賀県東脊振村）および二塚山弥生人（佐賀県東脊振村）の計測値とTab. 3において比較してみる。1号石棺人骨（古墳時代）の頭蓋長幅示数は比較群の各平均値よりも小さく，長頭の傾向が認められる。また，16号石棺人骨（弥生～古墳）も程度は弱いが同様の傾向を示している。

顔面頭蓋では，1号石棺人骨の中顔幅は比較群と大差はないが，顔高は西北九州および大友弥生人よりも小さく，高顔である三津および二塚山弥生人との差は大きい。上顔高も西北九州および大友弥生人の平均値に近く，三津および二塚山弥生人よりもかなり小さい。したがって，ウイルヒョウ氏の顔示数は，三津および二塚山弥生人はもとより西北九州および大友弥生人よりもさらに小さい示数値を示している。上顔示数は西北九州および大友弥生人に近似して，三津および二塚山弥生人よりもかなり小さい示数値を示しており，つまり，顔面には強い低顔傾向が認められる。眼窩の形態を示す眼窩示数は，西北九州および大友弥生人よりも小さい示数値を示し，鼻示数は大きい示数値を示して，西北九州タイプの弥生人以上に低眼窩および広鼻（低鼻）の傾向が強い。

Tab. 3　頭蓋計測値比較（男性）　(mm)

計測項目		中江 1号石棺（古墳）	中江 16号石棺（弥生～古墳）	西北九州（弥生） n	西北九州（弥生） M	大友（弥生） n	大友（弥生） M	三津（弥生） n	三津（弥生） M	二塚山（弥生） n	二塚山（弥生） M
1.	頭蓋最大長	191	173	21	182.8	24	183.7	15	184.7	13	183.0
8.	頭蓋最大幅	(144)	133	20	145.0	24	143.3	10	145.6	14	143.5
8／1	頭蓋長幅示数	(75.39)	76.88	20	79.2	20	77.9	10	78.5	12	78.1
46.	中顔幅	(104)	—	17	105.0	24	101.8	10	104.3	6	106.0
47.	顔高	114	—	14	117.1	18	118.7	10	125.0	9	122.6
48.	上顔高	68	—	17	68.1	16	66.6	13	74.5	10	71.6
47／46	顔示数（V）	(109.62)	—	14	111.8	17	116.6	8	121.6	5	117.5
48／46	上顔示数（V）	(65.38)	—	17	64.8	15	64.7	10	71.7	6	69.6
51.	眼窩幅（左）	47(R)	—	15	43.1	23	44.0	14	42.9	9	44.7
52.	眼窩幅（左）	34(R)	—	15	32.8	24	33.5	13	35.3	12	36.1
52／51	眼窩示数（左）	72.34(R)	—	15	76.2	22	76.5	13	82.5	9	81.4
54.	鼻幅	29	—	16	27.8	25	27.4	13	27.2	11	26.3
55.	鼻高	51	—	16	51.0	23	50.7	14	53.0	11	55.2
54／55	鼻示数	56.86	—	16	54.4	22	54.5	13	51.4	11	47.8

Tab. 4　四肢骨計測値比較（男性，右）

(mm)

			中江	大友		三津		二塚山	
			16号石棺	(弥生)		(弥生)		(弥生)	
			(弥生～古墳)	n	M	n	M	n	M
上腕骨	1.	最大長	−	9	294.3	4	309.8	2	300.0
	7.	骨体最小周	60	37	64.6	13	67.2	9	65.9
	7 (a).	中央周	64	35	71.0		−	12	69.9
	6／5	骨体断面示数	65.22	37	73.6	13	76.5	12	74.5
大腿骨	8.	骨体中央周	80(L)	41	87.2	13	91.0	25	91.8
	6／7	骨体中央断面示数	100.00(L)	41	111.7	13	105.9	25	108.7
	10／9	上骨体断面示数	75.86(L)	42	81.3	14	88.8	21	82.5
脛骨	10.	骨体周	76	34	82.9	12	89.9	20	84.2
	10b.	最小周	69	34	75.4	12	80.8	11	76.6
	9／8	中央断面示数	62.07	34	68.0	12	71.6	20	72.7
	9a／8a	栄養孔位断面示数	64.71	30	67.2	12	68.0	16	70.9

四肢骨については，16号石棺人骨（弥生～古墳時代）の計測値と他遺跡の弥生人の成績をTab. 4に示している。先ず，各骨の骨体の大きさは，16号石棺人骨の周径は大友弥生人よりも小さく，三津および二塚山弥生人に比べて非常にきゃしゃである。また，上腕骨，大腿骨骨体上部および脛骨の断面示数は，大友弥生人よりも小さい示数値を示して骨体の扁平性も強く，示数値の大きい三津および二塚山弥生人との差は著しい。

以上，中江遺跡出土の人骨は，顔面は強い低顔傾向を示す。四肢骨はきゃしゃで，骨体には強い扁平性が認められることを特徴としており，北部九州タイプの弥生人の要素は形態的にはほとんど認められない。今後有明海沿岸地域で弥生時代に続く時代の人骨が追加され，面的な広がりをもつことを期待したい。

〈擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育委員会文化課ならびに高来町教育委員会の諸先生方に感謝いたします。〉

参 考 文 献

1）金関丈夫，1956：人種の問題。日本考古学講座　4．河出書房，東京：238－252.

2）金関丈夫，1959：弥生時代の日本人。日本の医学－第15回日本医学会総会学術集会記録1：167－174.

3）金関丈夫，他，1960：山口県豊浦群豊北町土井ケ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨について。人類学研究7（付録）：1－36.

4）金関丈夫，1962：弥生時代人。日本の考古学III，河出書房，東京：460－471.

5）Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart : 429-597.

6）松下孝幸，1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山（佐賀県文化財調査報告書　46）：242－255.

7）松下孝幸，1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：223－253.

8）内藤芳篤，1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌79：236－248.

9）内藤芳篤，松下孝幸，1981：弥生時代人骨。季刊人類学　12(1)：27－37.

10）内藤芳篤，1981：弥生時代人骨。人類学講座5，日本人I，雄山閣出版，東京：57－99.

11）内藤芳篤，1984：九州における縄文人骨から弥生人骨への移行。人類学その多様な発展，日本人類学会編，日経サイエンス社

12）鈴木　尚，1963：日本人の骨。岩波書店

13）牛島陽一，1954：佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究，1：273－303.

Tab. 5　脳頭蓋計測値　(mm)

	人骨番号	1号石棺 (男性)	16号石棺 (男性)
1.	頭蓋最大長	191	173
8.	頭蓋最大幅	(144)	133
17.	バジオン・ブレグマ高	—	—
8／1	頭蓋長幅示数	(75.39)	76.88
17／1	頭蓋長高示数	—	—
17／8	頭蓋幅高示数	—	—
9.	最小前頭幅	98	—
10.	最大前頭幅	—	—
5.	頭蓋底長	—	—
11.	両耳幅	—	120
12.	最大後頭幅	—	—
13.	乳突幅	—	—
7.	大後頭孔長	—	—
16.	大後頭孔幅	—	—
23.	頭蓋水平周	—	—
24.	横弧長	—	—
25.	正中矢状弧長	—	—
26.	正中矢状前頭弧長	124	120
27.	正中矢状前頂弧長	—	120
29.	正中矢状前頭弦長	111	104
30.	正中矢状前頂弦長	—	105

Tab. 6　顔面頭蓋計測値　(mm)

	人骨番号	1号石棺 (男性)
40.	顔長	—
41.	側顔長	—
42.	下顔長	—
43.	上顔幅	112
45.	頬骨弓幅	—
46.	中顔幅	(104)
47.	顔高	114
48.	上顔高	68
47／45	顔示数（K）	—
48／45	上顔示数（K）	—
47／46	顔示数（V）	(109.62)
48／46	上顔示数（V）	(65.38)
50.	前眼窩間幅	—
44.	両眼窩幅	—
51.	眼窩幅（左）	—
	眼窩幅（右）	47
52.	眼窩高（左）	—
	眼窩高（右）	34
52／51	眼窩示数（左）	—
	眼窩示数（右）	72.34
54.	鼻幅	29
55.	鼻高	51
54／55	鼻示数	56.86
56.	鼻骨長	—
57.	鼻骨最小幅	—
57(1).	鼻骨最大幅	—
60.	上顎歯槽長	—
61.	上顎歯槽幅	—
62.	口蓋長	—
63.	口蓋幅	—
64.	口蓋高	—
66.	下顎角幅	102
67.	前下顎幅	50
69.	オトガイ高	29
69(1).	下顎体高（右）	30
	下顎体高（左）	30
69(2).	下顎体高（右）	—
	下顎体高（左）	31
71a.	最小枝幅（右）	35
	最小枝幅（左）	—

Tab. 7　上腕骨計測値　(mm)

人骨番号		16号石棺(男性)	
		(右)	(左)
5.	中央最大径	23	21
6.	中央最小径	15	14
7.	骨体最小周	60	55
7(a).	中央周	64	60
6／5	骨体断面示数	65.22	66.67

Tab. 8　橈骨計測値　(mm)

人骨番号		16号石棺(男性)	
		(右)	(左)
1.	最大長	—	230
2.	機能長	—	222
3.	最小周	40	40
4.	骨体横径	15	14
4 a.	骨体中央横径	15	14
5.	骨体矢状径	12	11
5 a.	骨体中央状径	12	11
5(5).	骨体中央周	43	40
3／2	長厚示数	—	18.02
5／4	骨体断面示数	80.00	78.57
5 a/4 a	中央断面示数	80.00	78.57

Tab. 9　尺骨計測値　(mm)

人骨番号		16号石棺(男性)	
		(右)	(左)
11.	尺骨矢状径	15	15
12.	尺骨横径	15	16
S.	中央最小径	12	12
L.	中央最大径	15	15
C.	中央集	43	43
11／12	骨体断面示数	100.00	93.75
S／L	中央断面示数	80.00	80.00

Tab. 10　大腿骨計測値　(mm)

人骨番号		16号石棺(男性)	
		(右)	(左)
6.	骨体中央矢状径	—	25
7.	骨体中央横径	—	25
8.	骨体中央周	—	80
9.	骨体上横径	—	29
10.	骨体上矢状径	—	22
6／7	骨体中央断面示数	—	100.00
10／9	上骨体断面示数	—	75.86

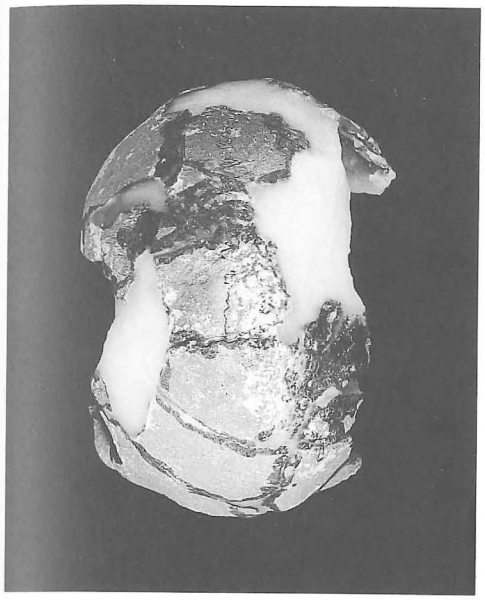
Tab. 11　脛骨計測値　(mm)

人骨番号		8号石棺(不明)		16号石棺(男性)	
		(右)	(左)	(右)	(左)
8.	中央最大径	—	28	29	29
8 a.	栄養孔位最大径	—	—	34	33
9.	中央横径	—	18	18	19
9 a.	栄養孔位横径	—	—	22	21
10.	骨体周	—	74	76	77
10 a.	栄養孔位周	—	—	89	87
10 b.	最小周	—	67	69	71
9／8	中央断面示数	—	64.29	62.07	65.52
9 a/8 a	栄養孔位断面示数	—	—	64.71	63.64

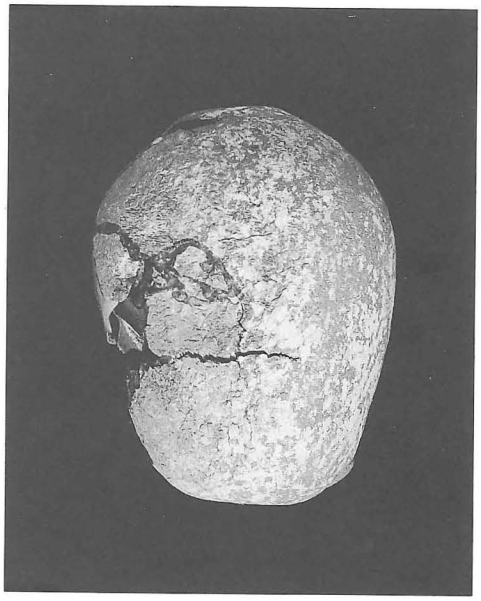
Tab. 12　腓骨計測値　(mm)

人骨番号		16号石棺(男性)	
		(右)	(左)
2.	中央最大径	14	—
3.	中央最小径	11	—
4.	中央周	40	—
3／2	中央断面示数	78.57	—

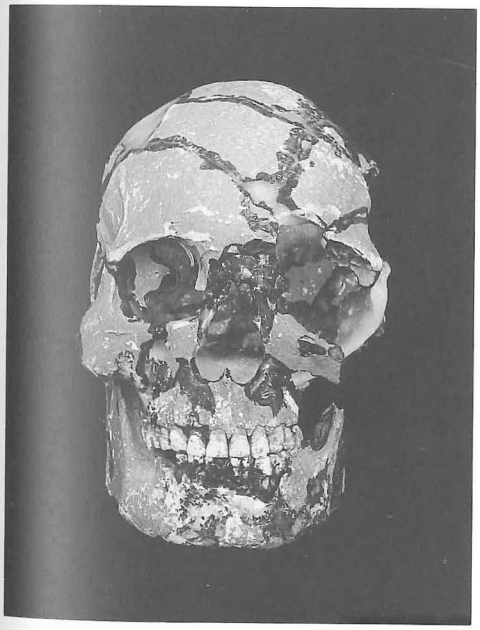
PL. 24



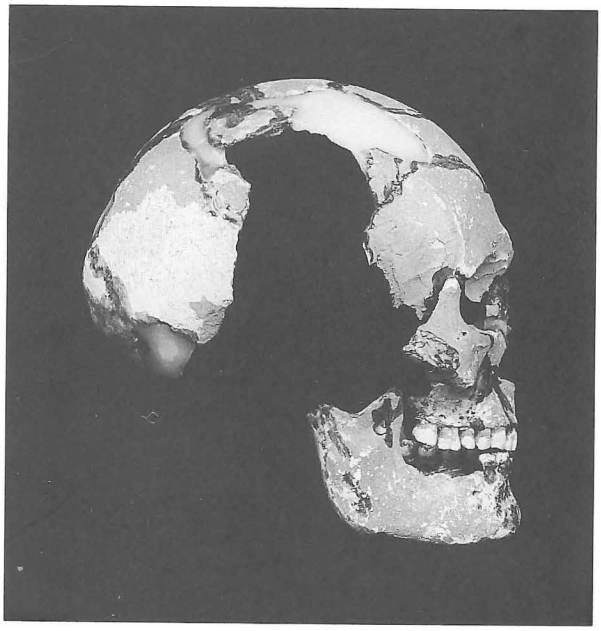
頭蓋上面
1号石棺人骨（男性，熟年）



頭蓋上面
16号石棺人骨（男性，熟年）



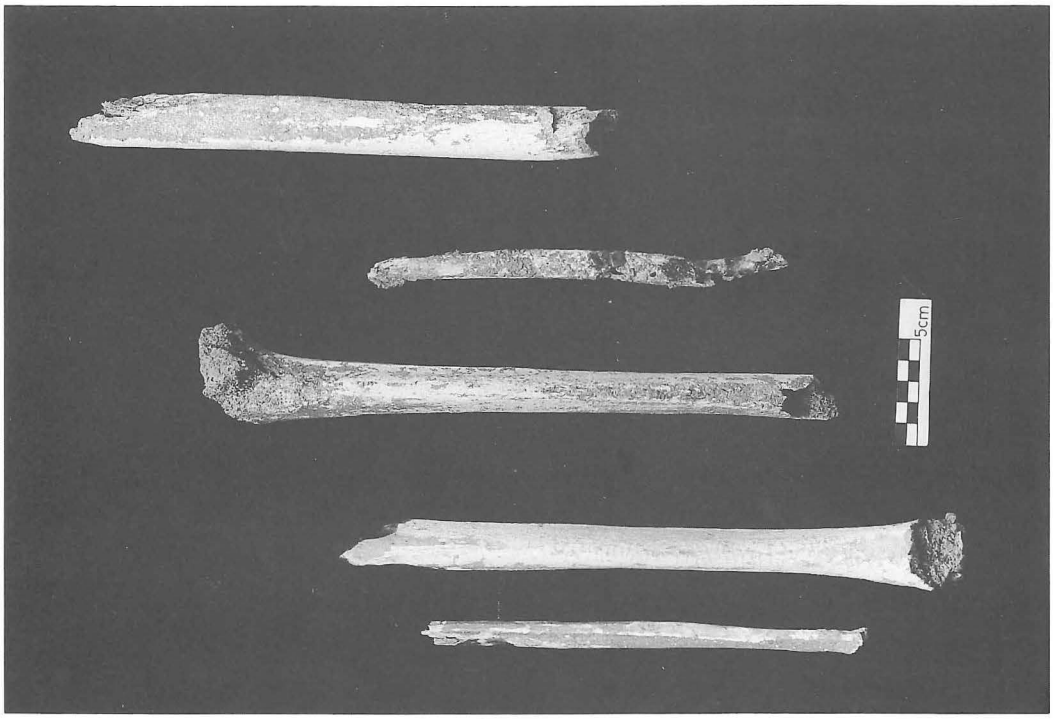
頭蓋全面



頭蓋側面

1号石棺人骨（男性，熟年）

PL. 25



下肢骨

上肢骨

16号石棺人骨（男性，熟年）

Ⅳ　上田井原遺跡の調査

一、調査方法と概要

本遺跡は北高来郡高来町小江峯名上田井原に所在する。この小江峯名は昭和31年に湯江村と合併して高来町となるまでは小江村の行政区であった。小江川河口には干潟干拓による水田があるが，『小江』という地名からして元々は小さな入江を形成していたことが考えられる。江戸期当村には刀匠が居住し，初代の伊予大掾をはじめ宗次などを名乗った[注1]。南部を長崎街道浜通り（多良越え往還）が通り，地区には一里松の地名が残っている。

地理的には多良岳の南麓に位置し，西を諫早市に接し，小江川によって形成された沖積地上に立地している。本遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての包蔵地として周知されていたもので（Fig. 2－21），周辺の遺跡としては，中世の山城である小江城跡（Fig. 2－20），古墳時代の田淵遺跡（Fig. 2－22）等がある。

今回の調査は，上田井原地区に農業基盤整備事業の計画が策定されたのに伴って実施したもので，まず当該の周知の遺跡の範囲を調査対象区域（9,337m²）として試掘調査を行った。この調査結果から当該事業の主体者である諫早耕地事務所の方で遺跡の包含層にかからないよう圃場の設計変更をしてもらったが，小江川からの取水口との水位差の関係からどうしても設計変更が不可能な範囲（550m²）については本調査を実施した。調査期間は，試掘が平成２年11月19日～11月29日。本調査が平成３年９月27日～10月９日の間で実施した。

なお，周知の遺跡以南においても表土を剝がして黄褐色土層が露出した段階で，分布調査したところ，土器や黒曜石の散布がみられたので，試掘壙を２箇所入れたところ，ＴＰ14に於いては，黄褐色土層の下に灰色土層があり，その下の暗灰色弱粘質土層から良好な弥生時代前期[注2]（板付Ⅱ式並行の壺，そして「亀ノ甲タイプ」の刻目突帯文土器，器面調整を丁寧に行う弥生期の刻目突帯文土器，打製石斧，石鏃他）の一括の資料を検出した。

また，ＴＰ15に於いては，標高7.73mの地表下，２m下まで灰青色のグライ土壌が認められ，中に棒状の木片等もあった。このＴＰ14についても，工事が包含層にかかる恐れがあったので，設計変更によって包含層より30cm上までは工事が及ばないようにしてもらった。ＴＰ15についてもグライ土壌の部分は残存することとなった。

そして，田淵遺跡の西側部分の松尾永一氏所有の水田でも土師器の甕等が採集されたことから，田淵遺跡がここまで広がるものと判断されるが，この部分についても緊急調査を行った。以下に試掘調査の概要から記してみたい。

二、試掘調査（周知の遺跡範囲）

１．試掘調査の概要

調査対象地に磁北と東西の基準線を設け，概ね25mの方眼に２m×２mの試掘壙を１箇所ずつ，計15箇所設定した。地形等の条件により，任意に設定した所もある（Fig. 30）。

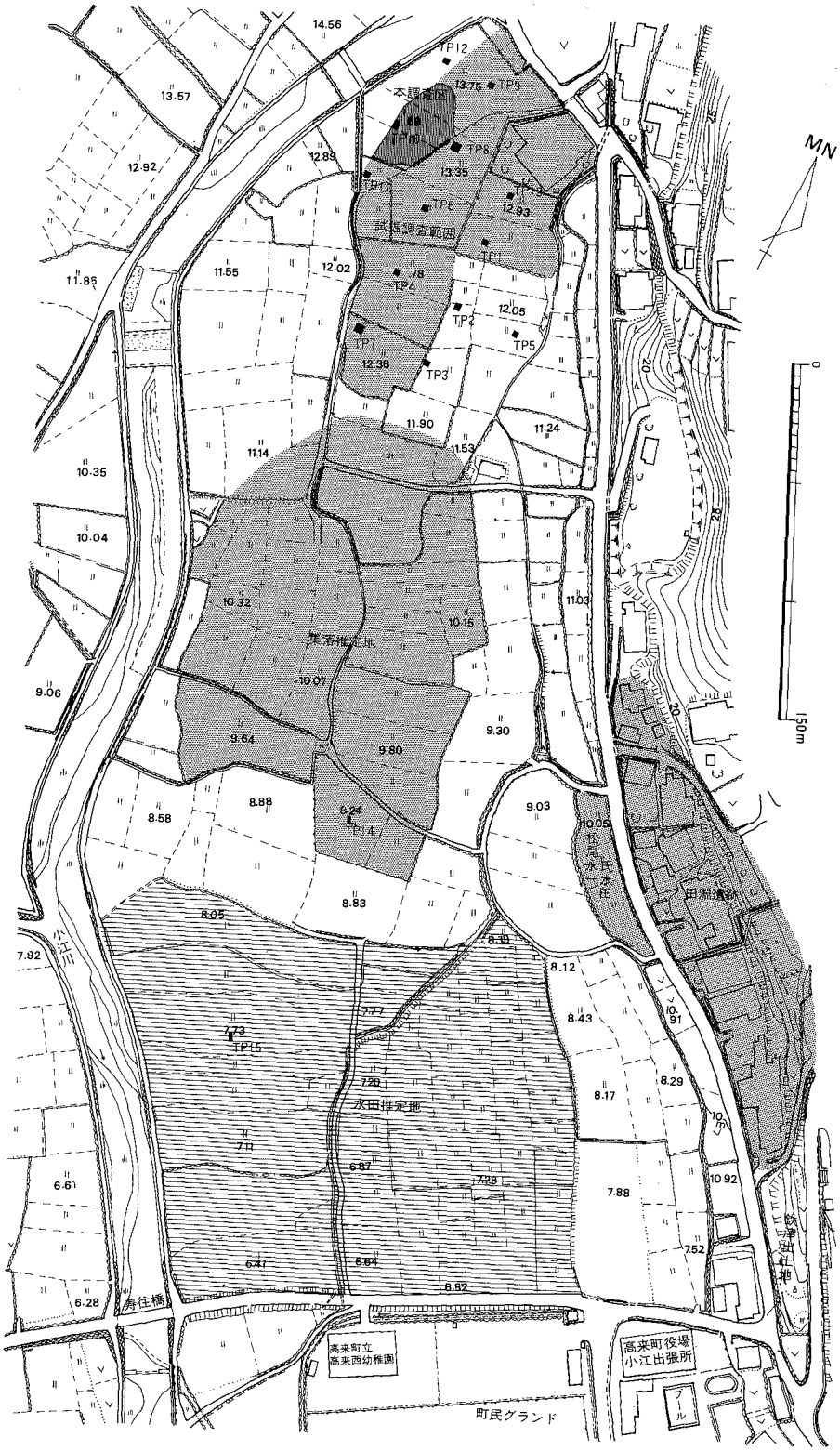


Fig. 30　上田井原遺跡試掘調査及び本調査位置図

試掘の結果ＴＰ１，７，８，９，10，11，13の７箇所から縄文時代晩期と古墳時代，中世の遺構・遺物を確認した。

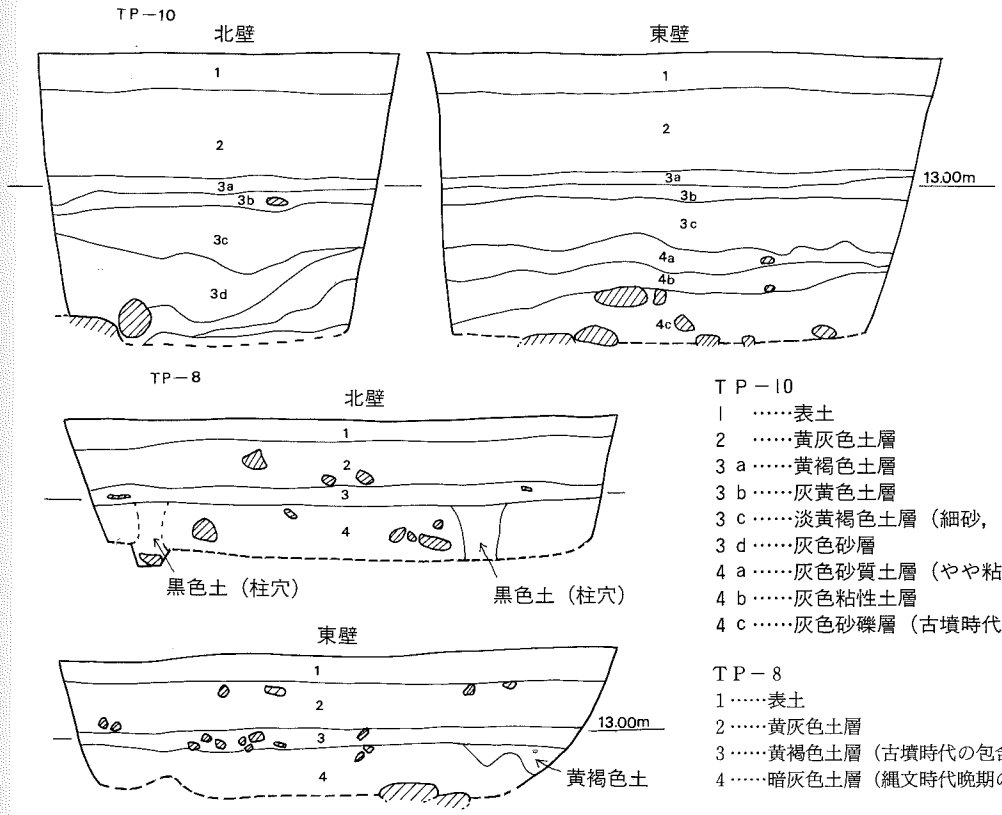
特に，ＴＰ８に於いては，古墳時代の土師器を包含する層と，その下層の縄文時代晩期の包含層からそれぞれの時期の柱穴の検出と土器が出土したことから，各々当該期の建物跡が存在したものと思われる。この縄文時代晩期の柱穴の近くからは炭化材も検出している。

このＴＰ８は遺構の広がりを見るために４ｍ×４ｍに拡張した。

ＴＰ９では，柱穴等は確認できなかったものの，古墳時代の包含層から５個体分の高杯が出土した。これは、祭祀と関連があるものと思われる（Fig. 33)。

ＴＰ７では第４層の黒色土層から古墳時代の完形の土師器の碗が出土した。第３，４層ともに古墳時代の包含層と判断される。第４層の黒色土層は，ＴＰ７にだけ堆積している。３ｍ×３ｍに拡張。

ＴＰ10では，地表下１ｍ50cmの３ｇ層から（Fig. 31)，木製品が出土しているが，同時に古墳時代の土師器・須恵器等が出土した。このＴＰ10は小江川に近く，現状は水田になっているものの，古墳時代の頃は河川の流路に近かったことを示していると思われる（２層の水田床土



ＴＰ－10
1　……表土
2　……黄灰色土層
3ａ……黄褐色土層
3ｂ……灰黄色土層
3ｃ……淡黄褐色土層（細砂，川砂混じり）
3ｄ……灰色砂層
4ａ……灰色砂質土層（やや粘性あり）
4ｂ……灰色粘性土層
4ｃ……灰色砂礫層（古墳時代の包含層）

ＴＰ－８
1……表土
2……黄灰色土層
3……黄褐色土層（古墳時代の包含層）
4……暗灰色土層（縄文時代晩期の包含層）

Fig. 31　上田井原遺跡試掘調査土層図

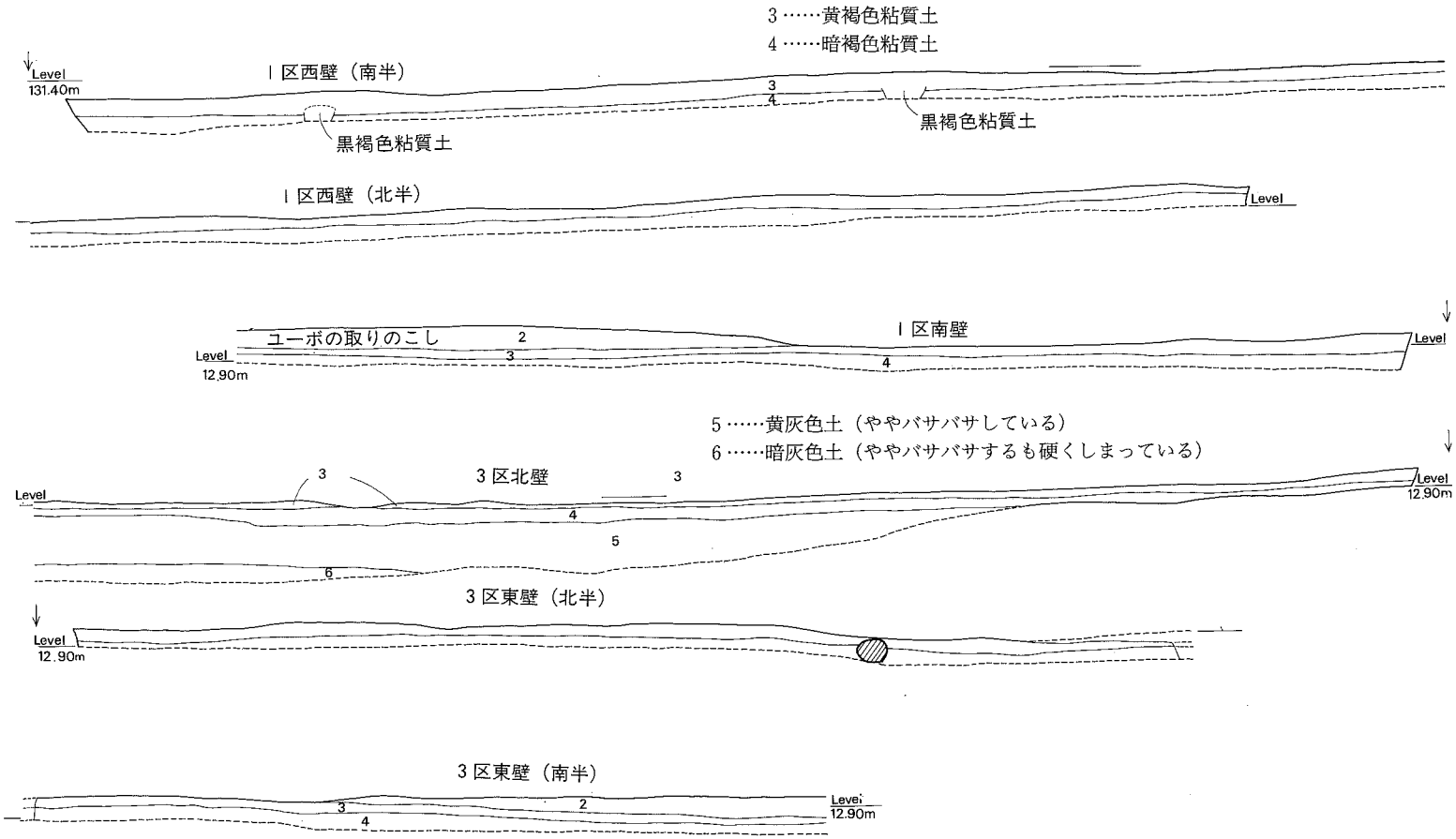


Fig. 32　上田井原遺跡本調査土層図

の下層に川砂の堆積が認められる)。このＴＰ10も２ｍ×３ｍに拡張した。

ＴＰ13の層では中世期の瓦器碗が出土した。

試掘調査時の出土遺物としては，縄文時代の晩期の土器，古墳時代の土師器，木製品，中世期の瓦器碗等が出土した。

２．土　　層

ＴＰ８の土層を以下に示すと。

１層……表土層（水田の耕土）

２層……黄灰色土層（水田の床土）

３層……黄褐色土層（古墳時代の土師器を包含する）

５層……暗灰色土層（縄文時代晩期の包含層）

となるが，ＴＰ７のように３層の黄褐色土層の下に４層として黒色土層があるところや，ＴＰ10のように２層の水田の床土が厚く，また，その下層に川砂の砂層の堆積が認められるところもある。

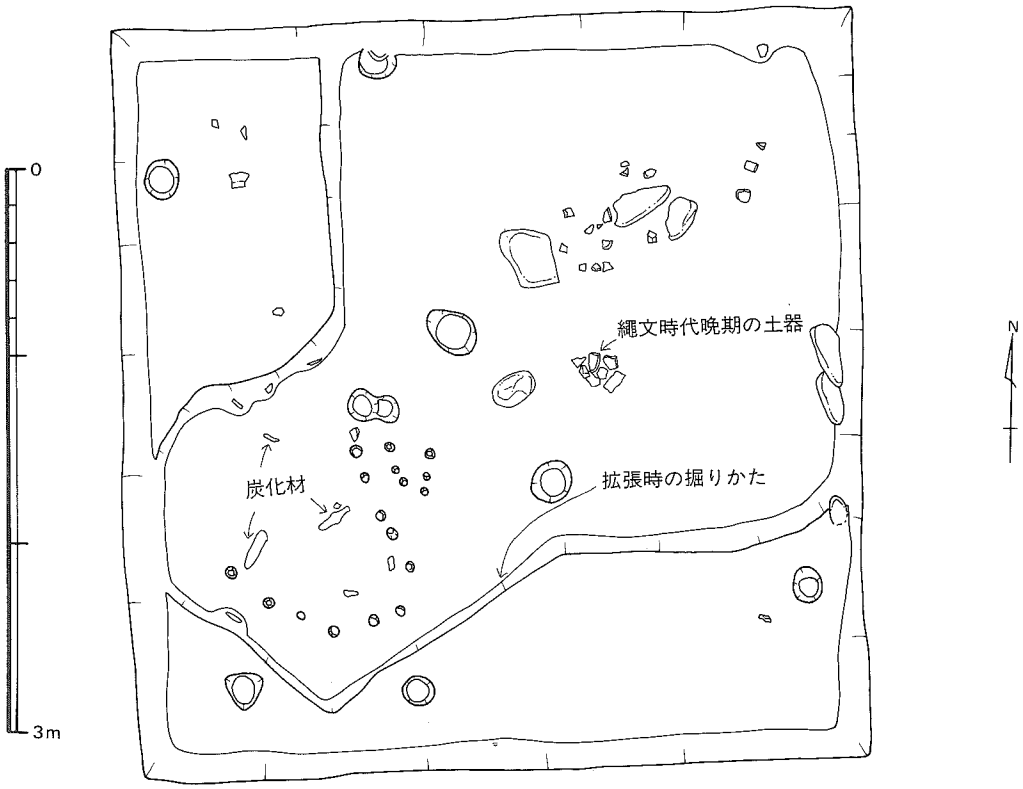


Fig. 33　上田井原遺跡（ＴＰ８）柱穴等検出状況

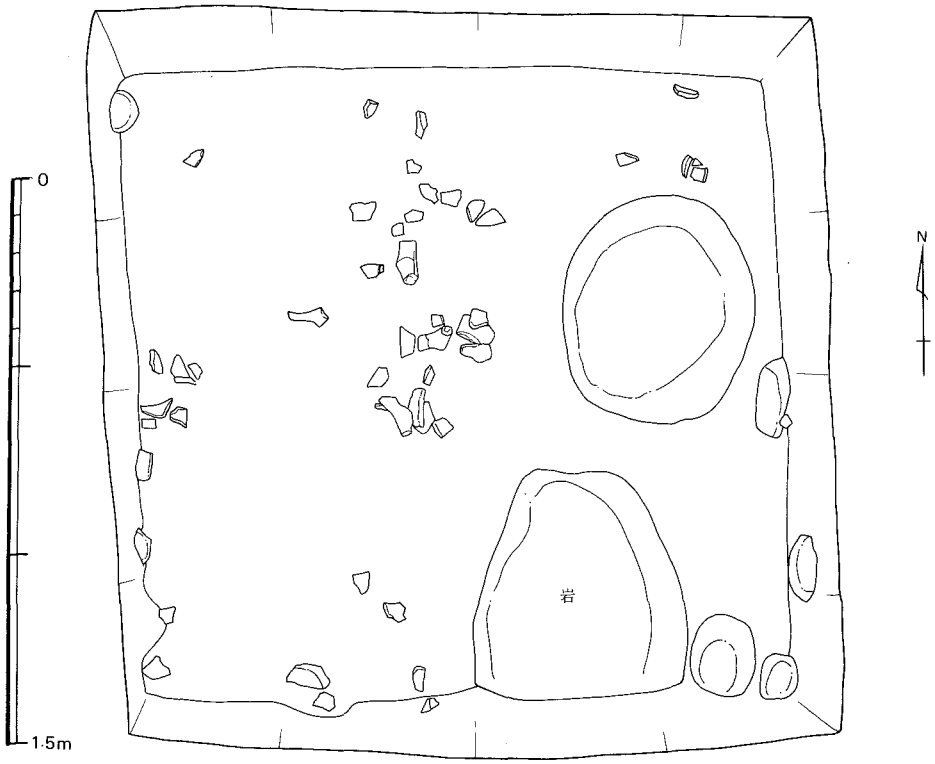


Fig. 34　上田井原遺跡（ＴＰ９）高杯出土状況

4．小　結

①出土した遺物により時代的に重複する生活の跡であることが判った。古い順に縄文時代晩期，古墳時代，中世期等。

また，縄文時代晩期の包含層と古墳時代の包含層があり，それぞれ柱穴等の遺構も確認されたことから各々時代の建物跡と判断され，集落を形成することも考えられる。

②ＴＰ５，10において川砂の堆積が認められ，現在の小江川の流路とは違う河川の流れ，ないしは洪水等の氾濫があったものと思われる。

註１　『長崎県地名大辞典』，角川書店，pp. 204

２　藤尾慎一郎『西部九州の刻目突帯文土器』，国立歴史民俗博物館研究報告第26集，平成２年３月，国立歴史民俗博物館等の文献を参考。

三、本　調　査

1．調査概要

調査対象地に任意の中心点を設け，そこから磁北に合わせて南北軸と，それに直交する東西軸を設けて調査区を四分割した。調査区は時計回りに1～4区とした（Fig. 35）。

遺構・遺物等の検出及び出土状況は，1区の中央から南にかけてと2区の4層上面でピット（柱穴）群を検出し，1区の南端と2区・3区で古墳時代の土師器の集中地点を3層中より検出したが，一部4層からも出土した。3区では，東側の半分が傾斜して落ち込んでいく状況が窺われ，試掘調査の知見と合わせて考察すると，東側の半分は旧河川の流路に近かったものと思われ，この傾斜して落ち込んでいく手前の辺縁に土器を廃棄した状況が確認された。この3区では土器の集中はその範囲も広く，数量も多い。1区～3区で土器の集中箇所は13箇所程認められる。この13箇所の集中箇所のうち，第2集中箇所は壺と高杯の構成であるし，第4集中箇所は甕と高杯，第5集中箇所は，碗，壺，甕と高杯，ミニチュア土器で構成される。また，10，11集中箇所は，碗と甕のみの構成となっており，その性格もバリエーションをもつことも考えられる。

出土遺物としては，古墳時代の土師器の甕，壺，高杯，碗，ミニチュア土器，須恵器，鉄鎌等がある。高杯の出土する割合が高い。

2．土　　層

試掘調査の結果から3層の黄褐色土器からが遺物包含層であることが判っていたので，1，2層は掘削器により排土した。3区北壁の土層より東側に地形が落ち込んでいく状況が観察できる。

四、出土遺物

1．土 器 他

出土した土器によりその所属する時期を古い順にみていきたい。まず，一番古いところではＴＰ８の４層から出土した縄文時代晩期の粗製の甕がある（Fig. 36－２）。次に古いところでは，周知の遺跡の以南に位置するＴＰ14の一括資料であろう「亀ノ甲タイプ」のもの（Fig. 44－129～133，135，136）と，恐らくジャポニカ種と思われる籾痕を胴部に残す精製浅鉢（134），山形文ではなく重孤文をもつところから板付II式に担当すると思われる壺（137），器面調整を丁寧に行う弥生期の刻目突帯文土器（138～140），弥生時代前期の甕底部（141）等がある。これらの129～141の土器の組成は複雑な様相をもっているが，刻目突帯文土器文化が繁栄した島原半島・有明海沿岸地域での，弥生前期まで残存した刻目突帯文土器文化の一群としてとらえたいと思う。

弥生時代中期・後期の資料は今回の調査では一点もなかったが，Fig. 37－30の資料は，口唇部の傾きの特徴等から，古墳時代初頭のものであろう。

土師器の古い方からみていくと，Fig41—82は，庄内系有段高杯の残存形態を思わせるもので，柳田康雄氏編年[註1]のⅢａ式に相当すると思われる。また，Fig. 36－７，Fig. 41－83等は，布留系高杯の残存形態を思わせる杯の部分が円く内湾しながら立ち上がるもので，同じく柳田康雄氏編年のⅢｂ式に相当するものだろう。Fig. 41－80は，口縁部の特徴からⅢｂ式の範疇に入るものだろう。甕では，口縁端部が内傾するものがみられないことから，Ⅲｂ～Ⅳ，そして，一部Ⅴ式の範疇に納まるものと思われる。Ⅴ式の高杯としてはFig. 36－９等がある。Fig. 43－116は須恵器の杯身であるが，口縁の立ち上がりがやや内傾する特徴から舟山良一氏編年[註2]のⅢ期に相当するものだろう。

土師器の編年ではⅢａ式が４世紀後半，Ⅲｂ式が５世紀前半，Ⅳ式が５世紀中頃以後，Ⅴ式は５世紀後半になる。出土した数量からみれば５世紀代を主体としている。須恵器のⅢ期は，６世紀中頃～後半になる。

Fig. 36－16～19の瓦器碗は松浦市の楼楷田遺跡等で類似資料が出土していることから13～14世紀のものであろう。Fig. 43－117，118の資料も底部に糸切りの跡のタヌキ痕が残っているところから13世紀位の時期のものであろう。これらの資料の他にも，石鍋等の中世期の遺物の出土を，松尾永一氏水田の調査区から検出した。ここから出土したふいごの羽口と，鉄滓も中世紀に属するものか。他に古墳期の壺，鍋等もある。

註１　柳田康雄　２　九州『古墳時代の研究６』土師器と須恵器，雄山閣出版。
　２　舟山良一　２　九州『古墳時代の研究６』土師器と須恵器，雄山閣出版。

Fig. 35　上田井原遺跡本調査遺構配置図

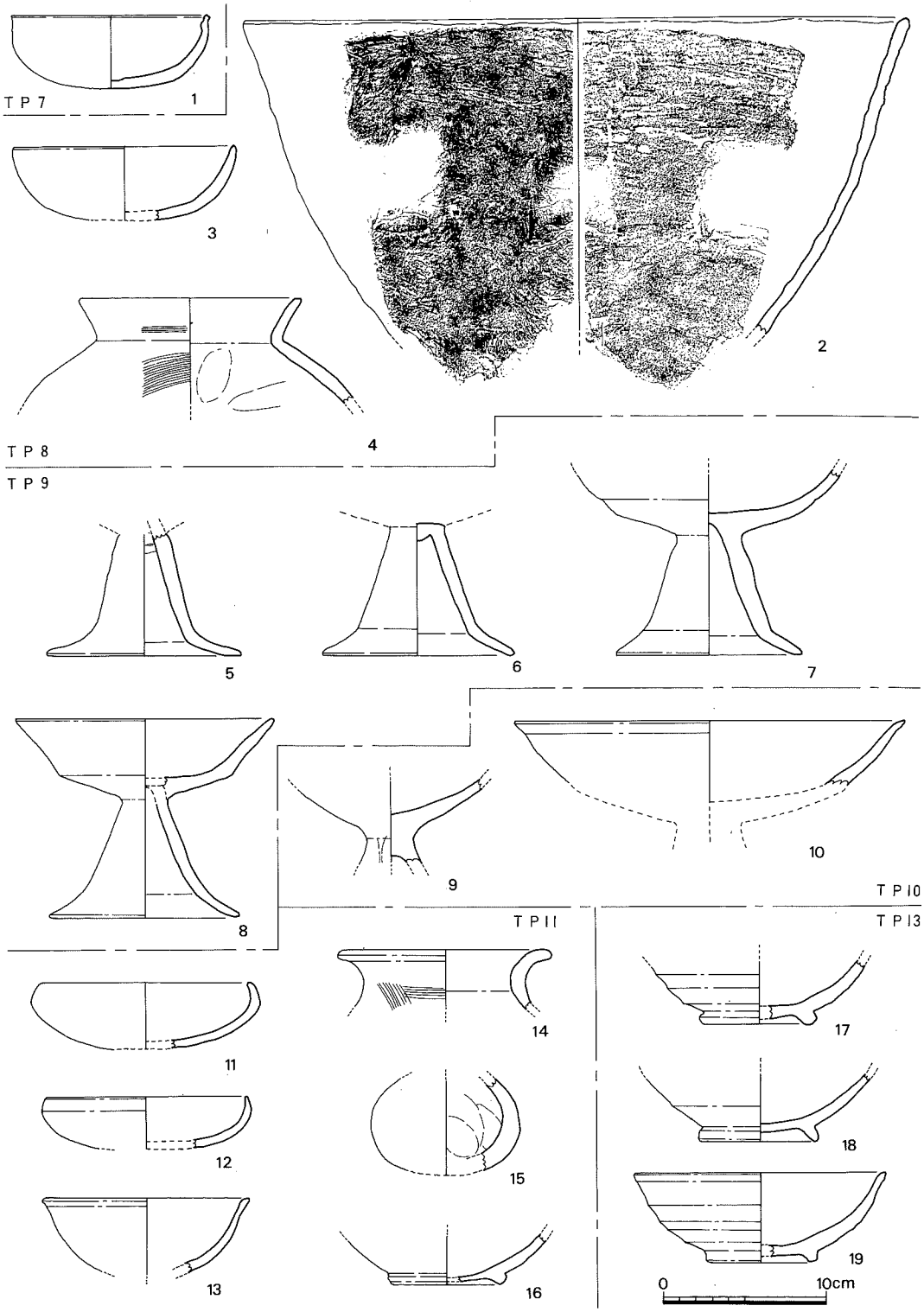


Fig. 36　上田井原遺跡出土土器　①

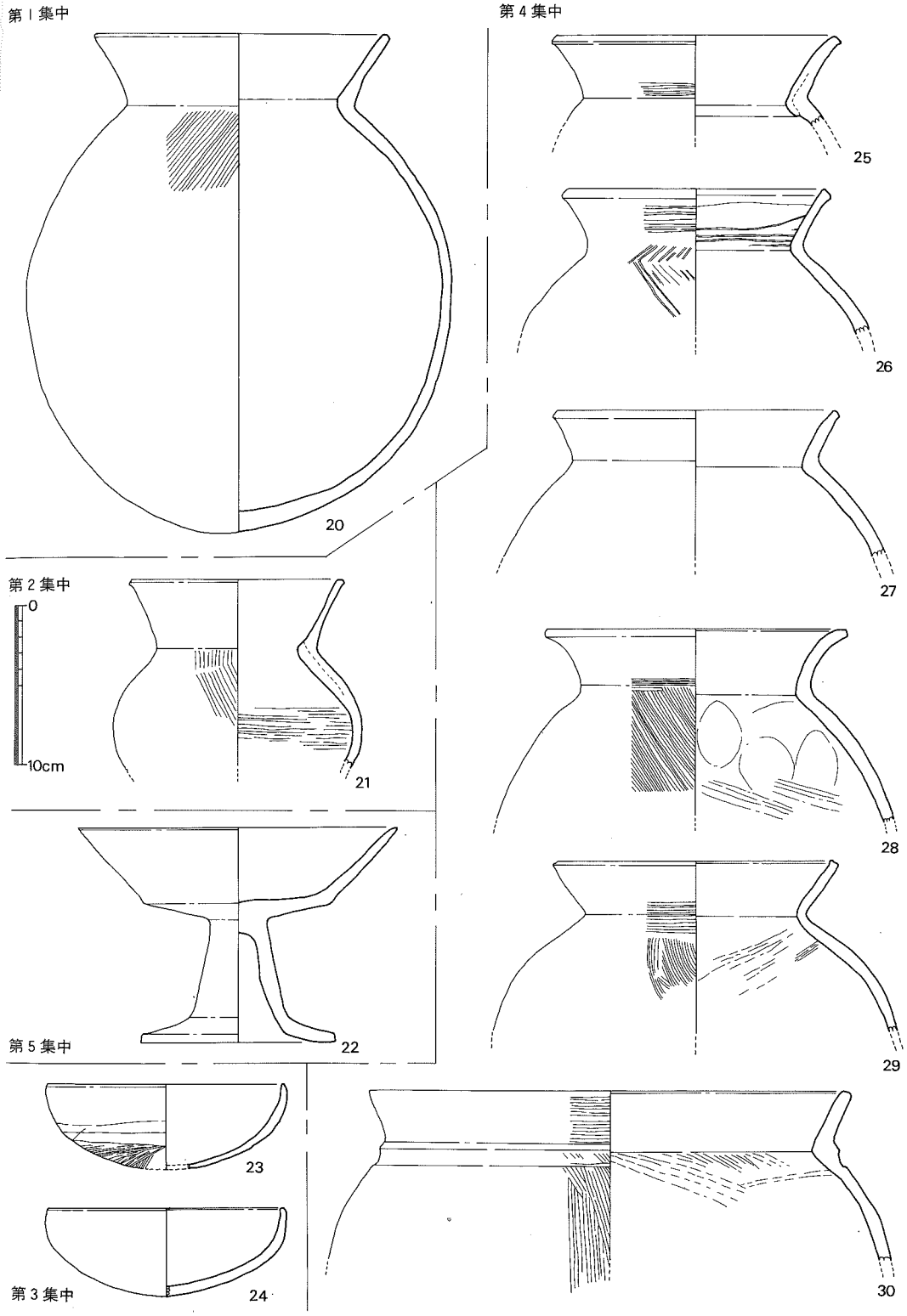


Fig. 37　上田井原遺跡出土土器　②

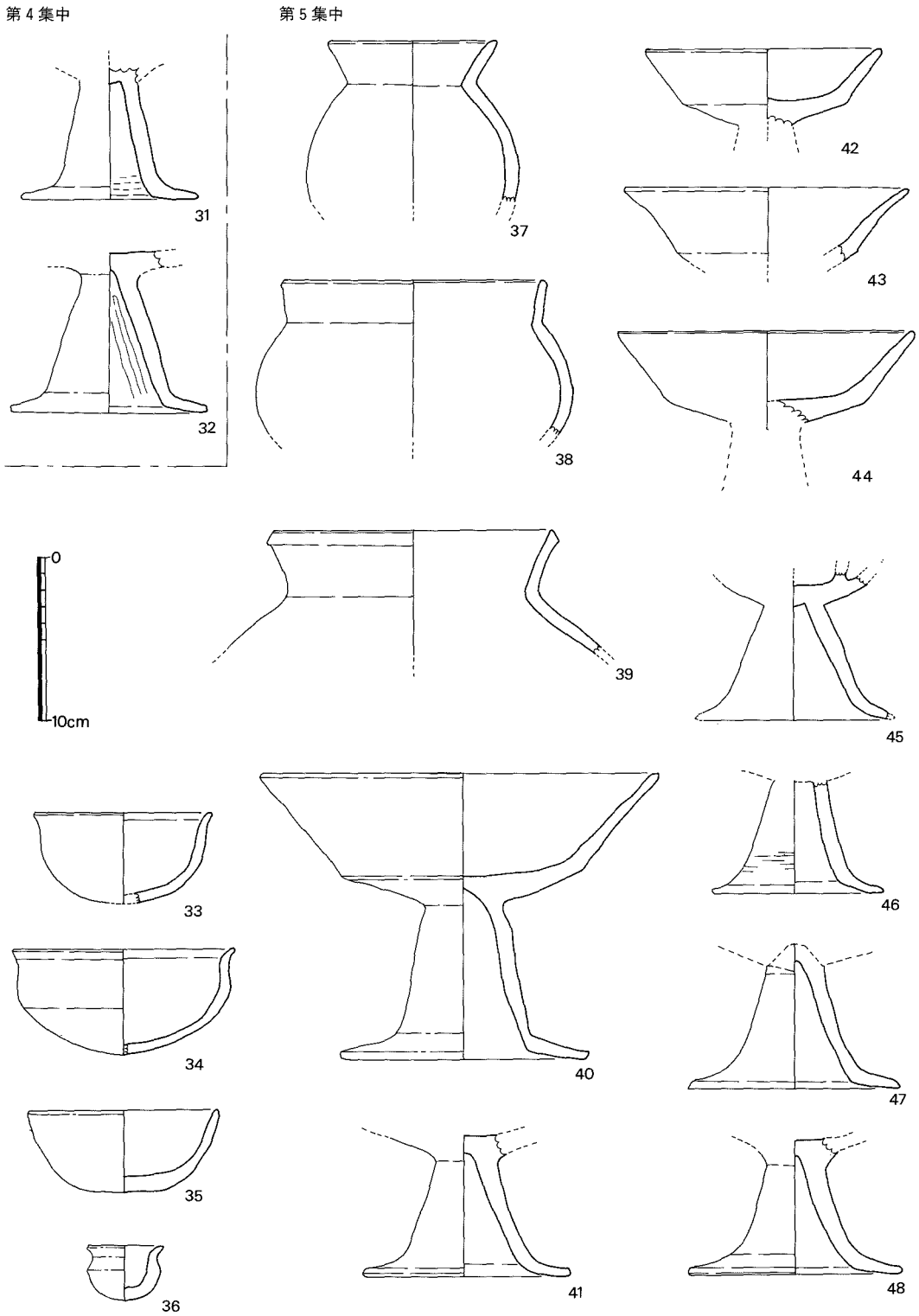


Fig. 38　上田井原遺跡出土土器　③

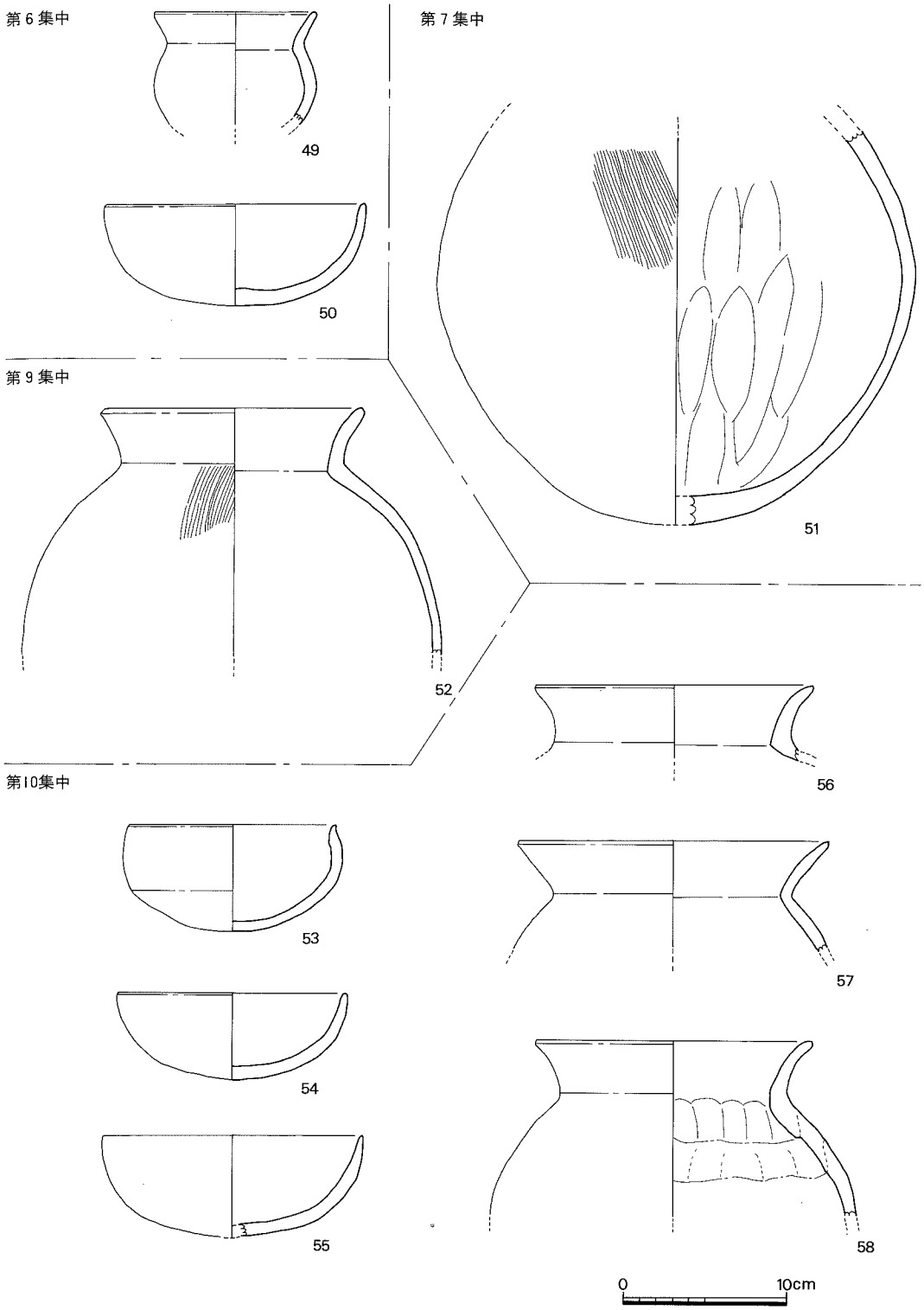


Fig. 39　上田井原遺跡出土土器　④

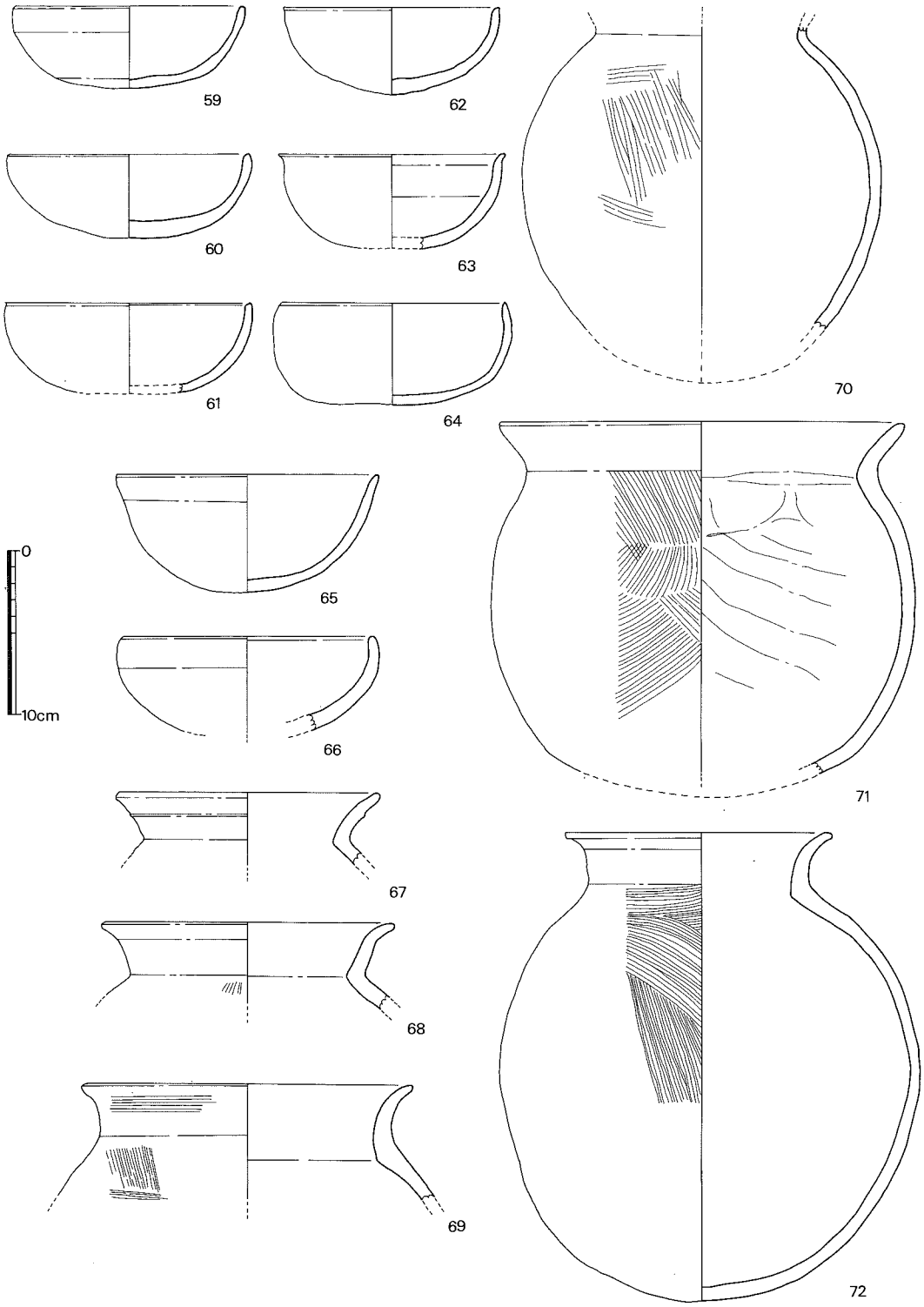


Fig. 40　上田井原遺跡出土土器　⑤

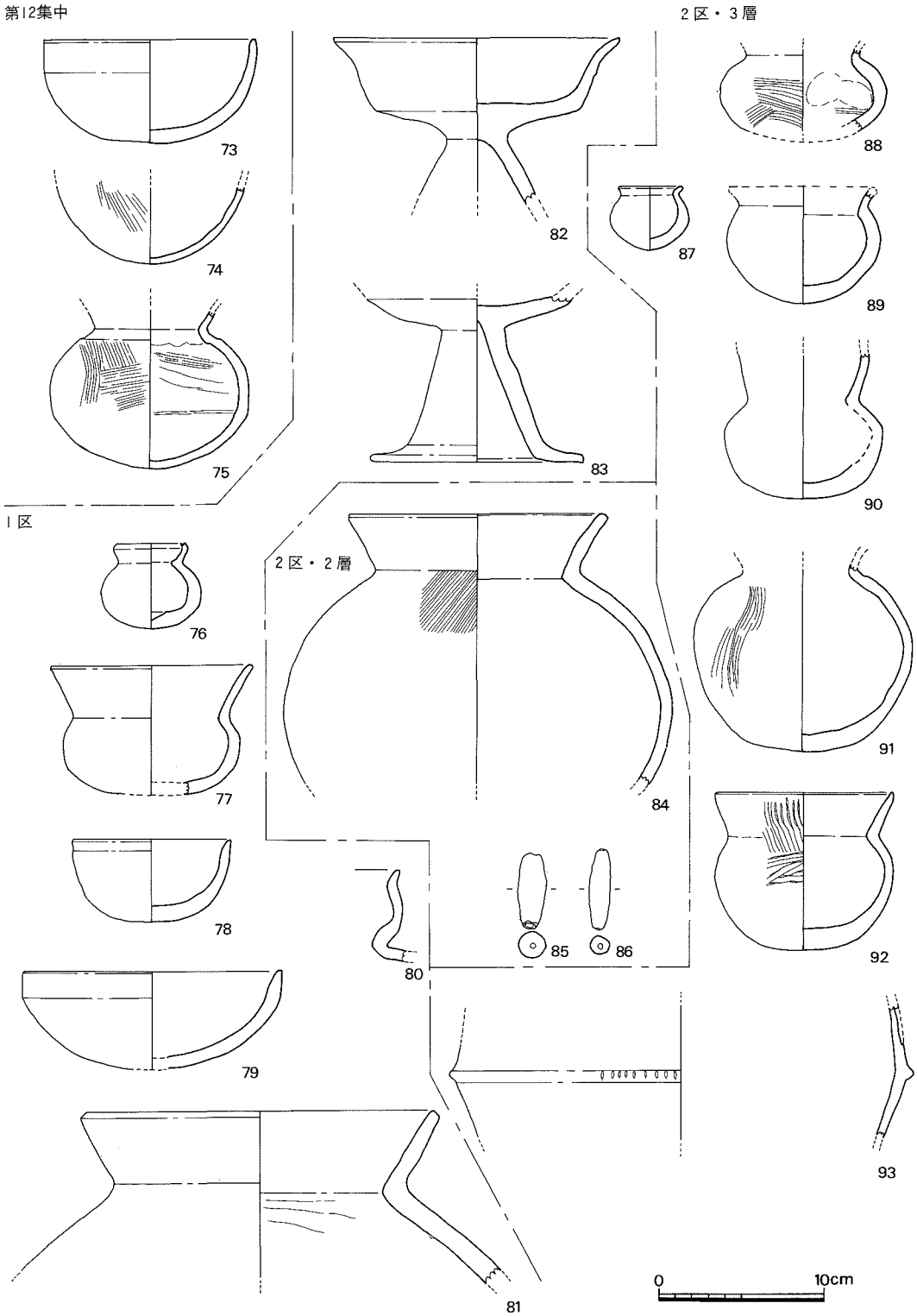


Fig. 41　上田井原遺跡出土土器　⑥

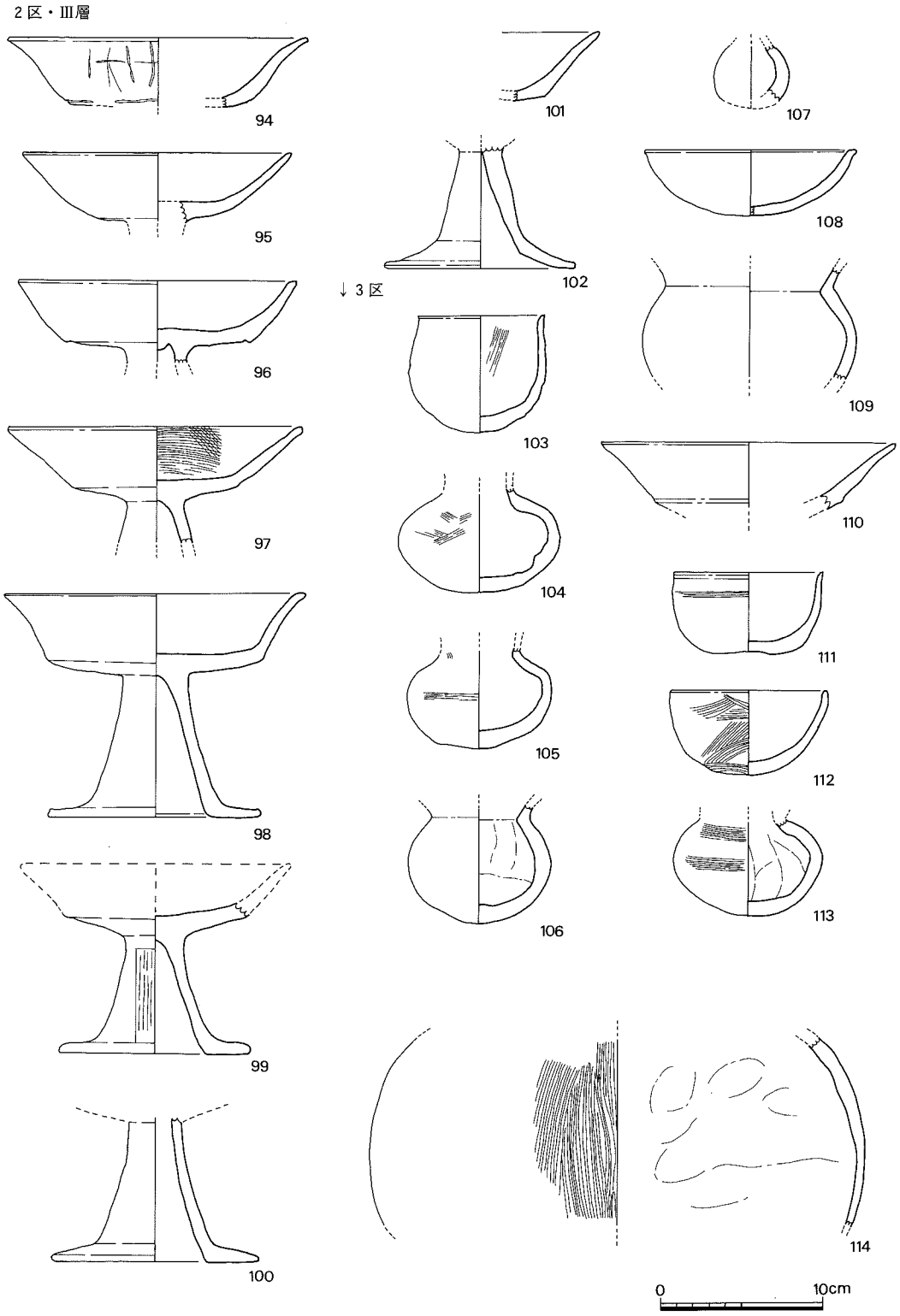


Fig. 42　上田井原遺跡出土土器　⑦

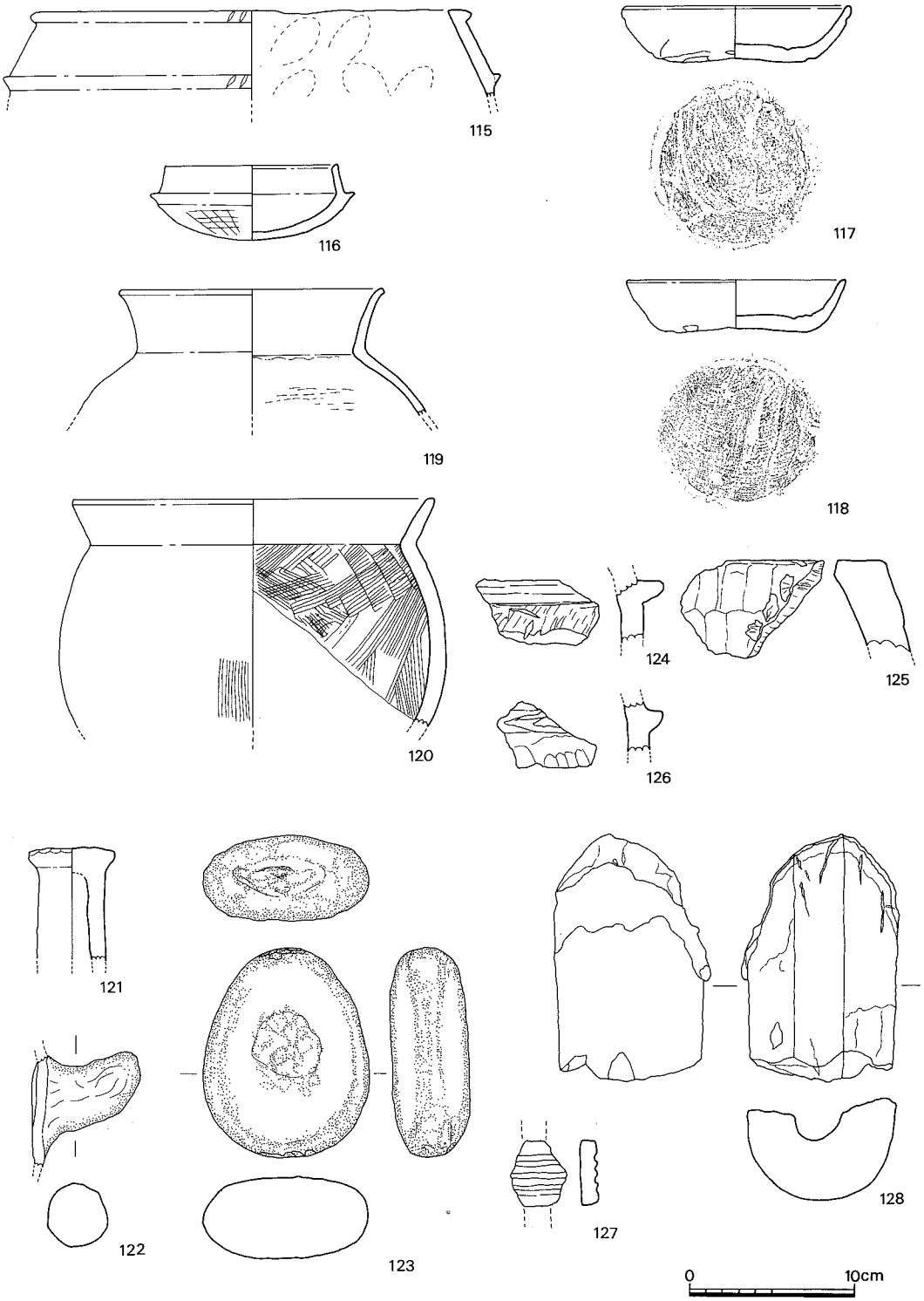


Fig. 43　松尾永一水田出土土器他

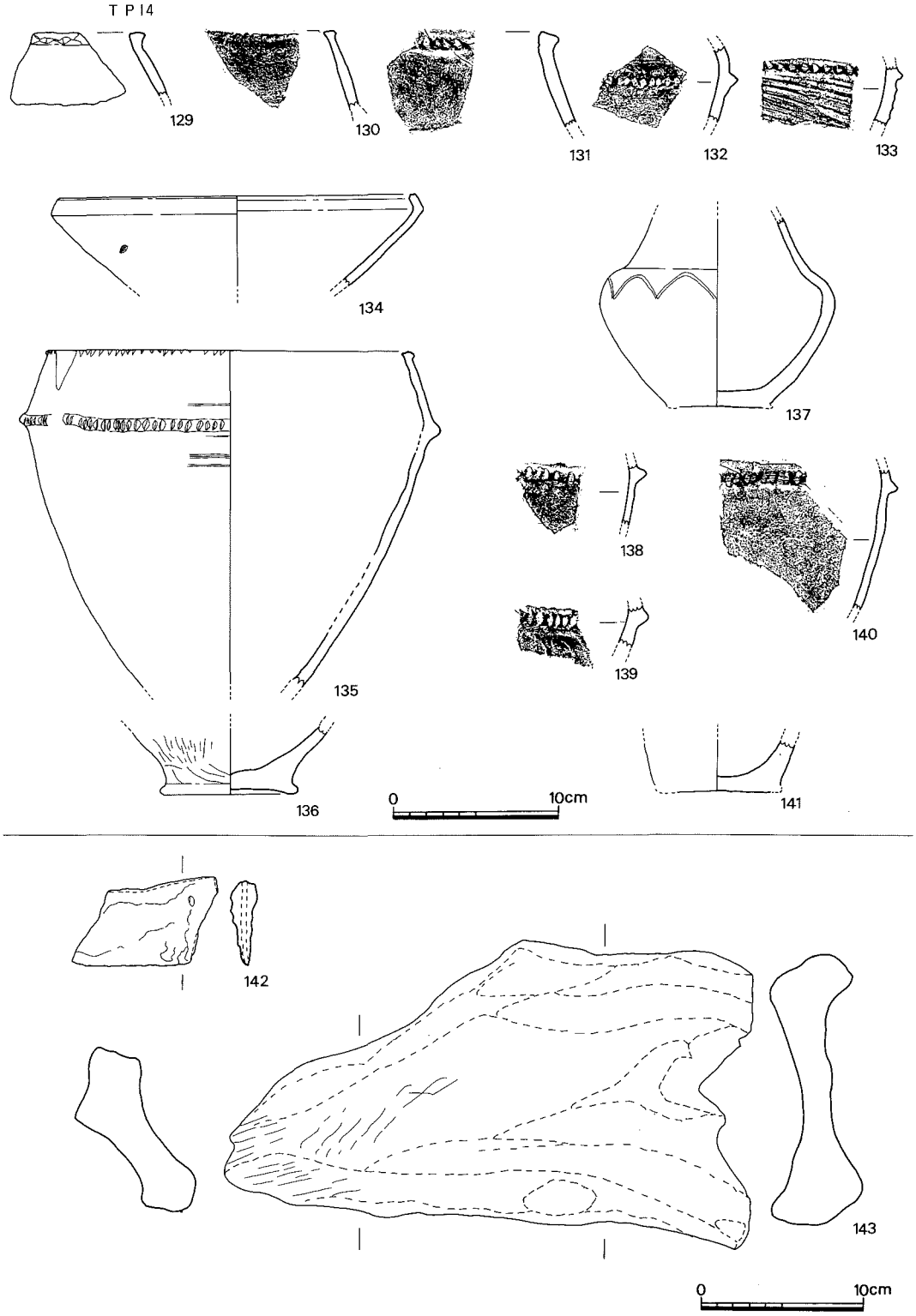


Fig. 44　上田井原遺跡以南（TP14）出土土器

Tab. 13　上田井原遺跡出土土器観察表　①

（単位は㎜，g）

No.	出土地区	器種	口径	器高	底径	色調（外・内）	特　徴　等
1	7 III	鉢	123	45		淡赤橙色・　〃	内底にツメ跡
2	8・P 1・III	甕	408			黄褐色・灰黄色	
3	8・P 1・III	鉢	136	46		暗黄褐色・淡赤橙色	
4	8・P 1 III	甕	135			暗灰褐色・淡赤橙色	
5	9・III	高杯			119	黄褐色・　〃	
6	9・III	〃			118	黄褐色・　〃	
7	9・III	〃			113	黄褐色・　〃	
8	9・III	〃	169	122	116	暗赤橙・淡赤橙	外側に黒い付着物
9	10・IV	〃				淡赤橙・　〃	
10	10・III	〃	239			黒灰色・暗赤橙色	胎土・焼成とも良好
11	11・III	鉢	130	40		淡黄橙色・淡黄橙色	
12	11・IV	〃	122	32		淡黄橙色・　〃	
13	11・IV	〃	127			淡赤橙色・黒赤橙色	
14	11・III	甕				黒色・黄褐色	
15	11・III	丸底壺				赤橙色・灰黄色	内底に指頭痕
16	11・III	土師，椀			70	黒色・　〃	
17	13・III	〃			67	灰黒色・黒灰色	
18	13・III	〃			73	暗灰色・　〃	
19	13・III	〃	154	55	68	黒色・　〃	
20	1・III・1	甕	182	310		淡灰黄色・　〃	
21	3・III・2	直口壺	132			淡灰橙色・暗灰黄色	
22	3・III・5	高杯	198	133	120	淡赤橙色・　〃	胎土・焼成とも良好
23	3・III・3	鉢	150	53		淡赤橙色・　〃	外面に黒い付着物
24	3・III・3	〃	150	55		淡赤橙色・　〃	
25	3・III・4	甕	180			淡赤黄色・　〃	
26	3・III・4	〃	168			淡黄褐色・灰褐色	
27	3・III・4	〃	180			灰褐色・淡黄色	
28	3・III・4	〃	189			黄褐色・黄灰色	
29	3・III・4	〃	176			淡灰褐色・暗黄褐色	
30	3・III・4	〃	299			灰黄色・黄褐色	
31	3・III・4	高杯			110	淡黄色・暗黄褐色	
32	3・III・4	〃			120	淡橙色・黄褐色	
33	3・III・5	鉢	108	56		淡橙色・　〃	
34	3・III・5	〃	136	64		淡橙色・　〃	
35	3・III・5	〃	116	50		灰褐色・淡灰褐色	
36	3・III・5	ミニチュア土器	46	33.5		淡橙色・　〃	
37	3・III・5	直口壺	104			淡灰黄色・灰褐色	

※　〃は左の色調に同じ

Tab. 14　上田井原遺跡出土土器観察表　②　　（単位は㎜，g）

No.	出土地区	器種	口径	器高	底径	色調（外・内）	特　徴　等
38	3・Ⅲ・5	直口壺	164			暗灰褐色・淡灰黄色	
39	3・Ⅲ・5	甕	170				
40	3・Ⅲ・5	高杯	238	174		淡橙色・　〃	
41	3・Ⅲ・5	〃			127	淡黄色・　〃	
42	3・Ⅲ・5	〃	145			灰褐色・　〃	内底剝落
43		〃				灰黄色・黄褐色	
44	3・Ⅲ・5	〃	182			淡灰黄色・黄褐色	
45	3・Ⅲ・5	〃			約123	淡灰黄色・　〃	ナデ仕上げ
46	3・Ⅲ・5	〃			105	淡黄色・　〃	
47	3・Ⅲ・5	〃			129	暗黄灰色・黄褐色	ナデ仕上げ
48	3・Ⅲ・5	〃			131	暗灰黄色・黄褐色	
49	3・Ⅲ・6	小型丸底壺	99			淡灰褐色・　〃	
50	3・Ⅲ・6	鉢	160	62		明赤橙色・　〃	内底に花弁状のヘラ痕
51	3・Ⅲ・7	甕				黄褐色・灰褐色	腹径291
52	3・Ⅲ・9	〃	160			赤橙色・　〃	
53	3・Ⅲ・10	鉢	126	65		淡灰褐色・　〃	
54	3・Ⅲ・10	〃	140	53		淡赤橙色・　〃	外底ヘラ削り
55	3・Ⅲ・10	〃	160	63		赤橙色・淡赤橙色	外面に黒い付着物
56	3・Ⅲ・10	甕	170			淡赤橙色・　〃	
57	3・Ⅲ・10	〃	190			淡赤橙色・淡灰色	
58	3・Ⅲ・10	〃	170			淡赤橙色・淡灰黄色	内面に指頭痕あり
59	3・Ⅲ・11	鉢	141	50		明赤橙色・　〃	
60	3・Ⅲ・11	〃	146	51		黄褐色・淡赤橙色	外底ヘラ削り
61	3・Ⅲ・11	〃	150	約55		淡灰黄色・　〃	
62	3・Ⅲ・11	〃	132	53		淡黄灰色・赤橙色	
63	3・Ⅲ・11	〃	138	57		黒褐色・明赤橙色	
64	3・Ⅲ・11	〃	138	62		暗赤橙色・赤褐色	
65	3・Ⅲ・11	〃	159	71		暗赤橙色・　〃	
66	3・Ⅲ・11	〃	155			暗黄橙色・　〃	
67	3・Ⅲ・11	甕	160			暗灰黄色・灰黄褐色	
68	3・Ⅲ・11	〃	178			黄灰色・灰黄色	胎土に砂粒多し
69	3・Ⅲ・11	〃	200			暗灰色・　〃	
70	3・Ⅲ・11	〃				淡灰褐色・　〃	2～10㎜の石英粒等混じる
71	3・Ⅲ・11	〃	244			暗灰色・暗灰褐色	
72	3・Ⅲ・11	〃	162	285		灰黄色・黒褐色	
73	3・Ⅲ・12	鉢	130	63		赤橙色・　〃	
74	3・Ⅲ・					赤橙色・　〃	

Tab. 15　上田井原遺跡出土土器観察表　③

（単位は㎜，g）

No.	出土地区	器種	口径	器高	底径	色調（外・内）	特　徴　等
75	3・III	小型丸底壺				淡赤橙色・　〃	
76	1・III	ミニチュア土器	46	52		暗灰色・　〃	
77	1・III	小型丸底壺	124			黄褐色・　〃	
78	1・III	鉢	97	50		淡黄色・　〃	
79	1・III	〃	160	60		赤橙色・　〃	
80	1・III	複合口縁壺				黄褐色・　〃	
81	1・III	甕	219			明赤橙色・暗赤橙色	
82	1・III	高杯	176			淡灰橙色・暗褐色	
83	1・III	〃			131	黄褐色・　〃	
84	2・II	甕	160			淡灰橙色・　〃	
85	2・II	管状土錘			長さ46	淡赤橙色・　〃	
86	2・II	〃			長さ50	淡赤橙色・　〃	
87	2・III	ミニチュア土器	40	39		淡灰橙色・　〃	ほぼ完形
88	2・III	小型丸底壺				黄褐色・　〃	
89	2・III	〃				淡灰橙色・　〃	
90	2・III	〃				赤橙色・　〃	
91	2・III	〃				黄灰色・　〃	
92	2・III	〃	110	96		淡灰褐色・暗灰色	
93	2・III	甕			腹径284	暗灰色・灰色	
94	2・III	高杯	184			赤橙色・　〃	
95	2・III	〃	165			淡赤橙色・淡黄橙色	胎土・焼成良好
96	2・III	〃	172			淡黄褐色・暗黄褐色	
97	2・III	〃	181			淡灰橙色・　〃	
98	2・III	〃	188	138	131	淡灰橙色・　〃	
99	2・III	〃			118	淡橙色・　〃	
100	2・III	〃			127	淡赤橙色・　〃	
101	2・III	〃				黄橙色・　〃	
102	2・III	〃			117	淡黄灰色・　〃	
103	3・III	鉢	78	72		黄褐色・　〃	ほぼ完形
104	3・III	小型丸底壺				淡赤橙色・淡灰黄色	内底に指頭痕
105	3・IV	〃				淡黄灰色・　〃	〃　〃
106	3・III	〃				灰褐色・　〃	
107	3・III	ミニチュア土器				淡黄色・　〃	
108	3・III	鉢	130	41		淡黄橙色・　〃	
109	3・III					赤黄色・淡黄色	
110	3・III	高杯	180				
111	3・IV	鉢	92			淡赤褐色・　〃	ほぼ完形

Tab. 16　上田井原遺跡出土土器他観察表　④

（単位はmm，g）

No.	出土地区・層位	器種	口径	器高	底径	色調（外・内）	特　徴　等
112	4・Ⅳ	鉢	98	52		暗灰褐色・暗赤褐色	
113	4・Ⅳ	小型丸底壺				赤橙色・灰黄色	内底に指頭痕
114	11・Ⅳ	甕？				暗灰色・淡灰色	
115	4黒	甕	265			赤橙色・　〃	
116	ＴＰ5・Ⅲ・Ⅳ	杯身				灰色・　〃	
117	ＴＰ5	土師器杯	140	34	98	淡橙色・　〃	底部糸切り
118	〃	〃	132	32	93	〃・〃	
119	A区・B・1・712②	甕	160			黄褐色・淡灰褐色	
120	松尾永・水田・表彩	〃	220			淡橙色・　〃	
121	ＴＰ5	高杯				淡赤橙・　〃	
122	ＴＰ4黒色土	鍋？				黄灰色	
123	マツ黒	叩石			縦126 横100		
124	2次7	石鍋				灰色	
125	ＴＰ4黒	〃				〃	
126	ＴＰ1黒	〃				〃	
127	東丘Ⅲ黒色土	器台				淡灰橙色・　〃	
128	ＴＰ2黒	羽口			全長149 幅 88	淡白色・淡黄灰色	
129	南	甕				淡灰橙色・　〃	
130	南	〃				暗赤橙色・赤橙色	
131	南	〃				淡橙色・暗褐色	
132	南	〃				暗赤橙色・赤橙色	
133	南	〃				暗灰色・灰黄色	
134	南	浅鉢	220			暗赤橙色・黒色	
135	南	甕	226			暗赤橙色・赤橙色	
136	南	甕・底			85	暗灰褐色・暗赤橙色	
137	南	壺			64	淡灰褐色・　〃	
138	南	甕				灰黒色・暗灰色	
139	南	〃				暗灰色・淡灰黄色	
140	南	〃				黒灰色・暗灰色	
141	南	甕・底			77	暗灰色・灰褐色	
142		不明 鉄製品	長 90	幅 55	厚18		
143	ＴＰ10	不明 木製品	長334	幅192	厚56		

2．石　　器

ここではＴＰ－14から検出された石器群を取り上げる。剥片・砕片類まで含め総数296点。包含層は第３層。調査時の所見によれば，垂直的に20cm前後の深度幅に集中して出土している。平面分布を追求するため長軸方向に拡張したが，集中箇所は当初の範囲に限定されていた。

伴出遺物は１個体の板付Ⅱ式を除き，全て縄文時代晩期終末の突帯文土器及び精製磨研土器である。狭小な範囲から出土した本石器群は，その量の多さと密度に加え，伴出土器の単純性などから考えて，時間的・空間的に極めて限定された，該期の一括資料として捉え得るものと思われる。調査の性格上，必ずしも集中箇所の全貌を把握できたわけではなく，それゆえ遺物の回収率にも問題を残しているが，一応の器種別組成表を示しておく（Tab. 17）。

表から明らかなように，本石器群の特徴は剥片・砕片類の多量さにある。二次加工を施した剥片石器としては石鏃，石鏃未製品，尖頭状石器，尖頭状石器未製品，掻・削器類があるのみで，これに扁平打製石斧および叩石を加えた組成内容を示しており，全体として貧弱な印象を受ける。その一方で器種として剥片・破片類に分類されながら，縁辺部に微細な剥離痕を残す資料の占める比率が高い。加工の有無に関わらず，こうした使用痕跡（と思われる剥離痕）を有する剥片類の多さが，本石器群の一面を特徴づけていると言えよう。

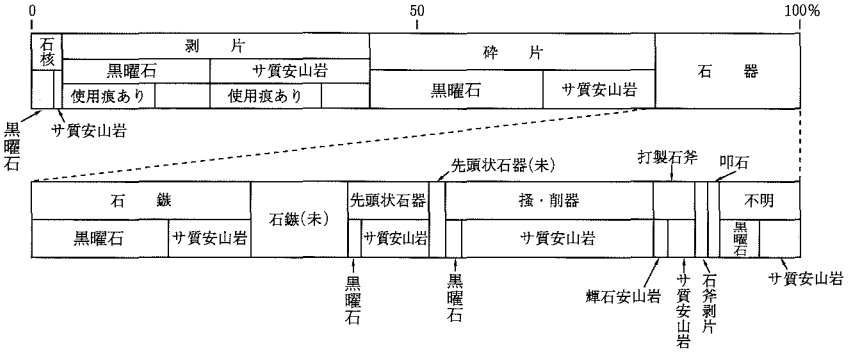
石器群の分布の遺存状態についての詳細な検討はできなかったが，11点の石核と大量の剥片・砕片類，未製品の存在，叩石を伴う点などから，石器製作址的な場であった可能性が高い。

【石器群の石材】　剥片石器群の石材は黒耀石とサヌカイト質安山岩の２種類のみである。黒曜石は漆黒色を呈する良質のものが多いが，夾雑物を含む暗灰色の粗悪なものも散見される。サヌカイト質安山岩は，もちろん剥片石器石材として利用し得る程度の緻密さはあるものの，概して肌が荒く，良質とは言い難い。打製石斧と叩石の石材は輝石安山岩と思われる。

Tab. 17　石材別器種組成表

器種／石質	石核	使用剥片	剥片	砕片	石鏃	石鏃（未）	尖頭状石器	尖頭状石器未	掻・削器	打製石斧	石斧剥片	叩石	不明	合計
黒　曜　石	8	36	21	67	10	7	1	0	1	0	0	0	3	154
サ質安山岩	3	43	19	43	6	0	5	1	14	2	0	0	3	139
輝石安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3
合　　計	11	79	40	110	16	7	6	1	15	3	1	1	6	296

注：サ質安山岩は『サヌカイト質安山岩』，（未）は『未製品』を表す



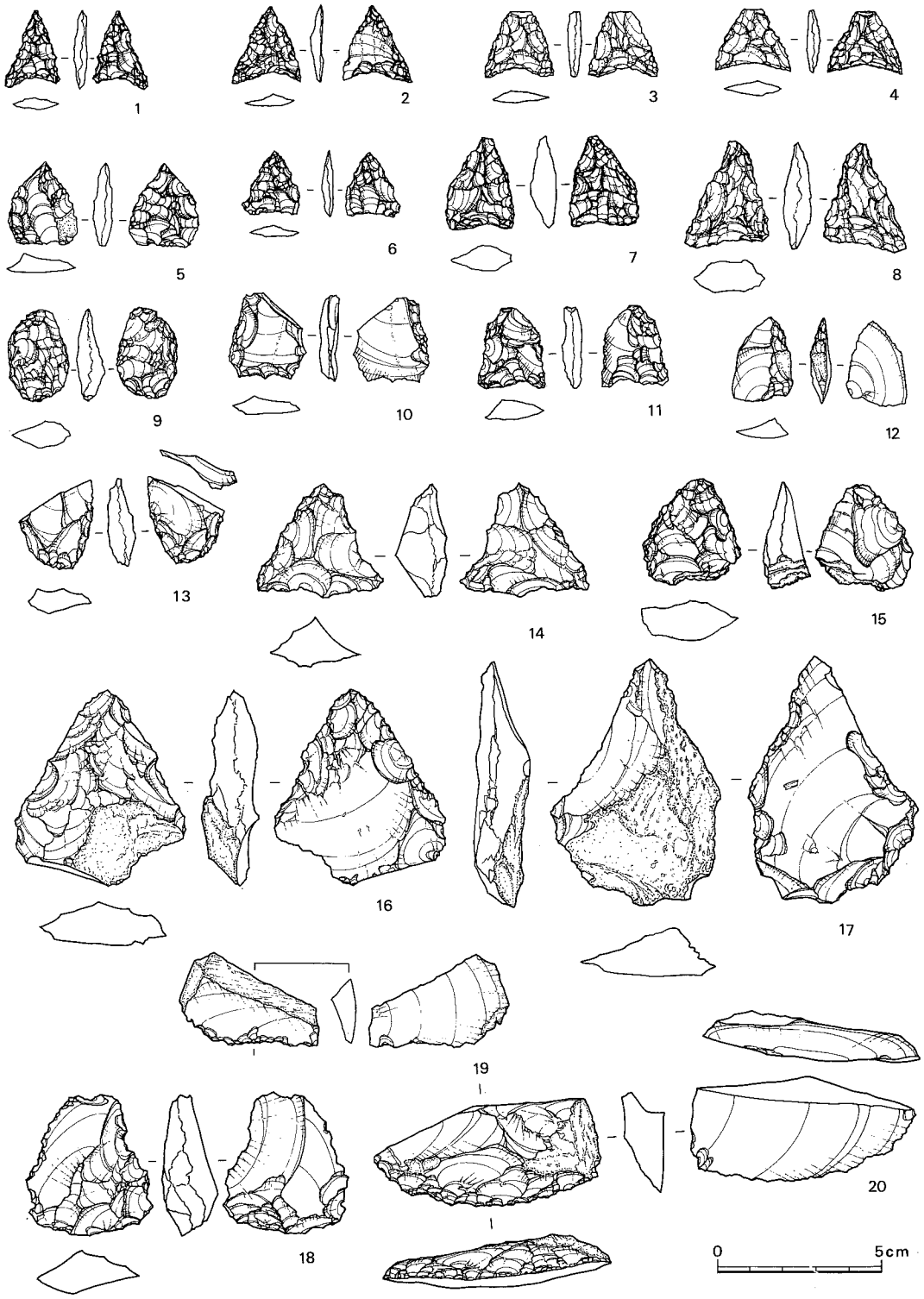


Fig. 45　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器　①

【石　鏃】(Fig. 45－1～9)　完形またはそれに近いものが多い。総じて基部の抉り込みは浅く，平面概形は正三角形を呈するもの（2，4，6）と二等辺三角形のもの（1，7，8）とがある。後者のうち7，8は肉厚・非対称形で端部加工も鋭さを欠くなど，多くの点で共通性が認められる。9は石鏃に含めたが，サイドブレイドとすべきか。丁寧な両面加工を施している。

【石鏃未製品】(Fig. 45－10～12)　石鏃の未成品と思われるものを一括した。素材の用い方は様々だが10，11のようにバブルを上位にする例が多い。12は剝片鏃としての完成した形かもしれない。砕片類を入念に観察したが，石鏃チップと思えるものは見出せなかった。

【尖頭状石器】(Fig. 45－13～17)　二次加工が，器体整形あるいは尖頭部の作出を主目的にしていると思われる一群である。13は石槍の基部破片と思われる。14は粗い加工によって正三角形状に仕上げたもの。15は夾雑物を含むあまり良質ではない黒耀石の剝片を素材とする。背面の尖頭部にはやや丁寧な加工が見られるが，全体としては粗雑な加工に留まっている。主要剝離面側の大きな剝離痕は素材の厚さを減じるためか。16は大きめのサヌカイト質安山岩製剝片を素材とするもので，主要剝離面側からの加撃によって全体を整形した後，バルブを除去するように尖頭部を作出している。17の素材も16と同様であるが，本来の形状を大きく変形することなく全体を整形している。尖頭部の作出は認められず，主要剝離面側縁辺部の連続的な剝離痕をスクレーパーエッジと見ることもできそうだが，裏側は粗礫面であり整形を意図したものと思われる。

【尖頭状石器未製品】(Fig. 45－18)　基部両面および背面の一側縁に加工を施した状態の未製品と思われる。最終形状は14に近似するものであろう。未加工部には使用痕が顕著である。

【掻・削器類】(Fig. 45－19，20　Fig. 46－21～24)　様々な形状のものがある。20は大型厚手の素材を半裁し，縁辺部に入念な加工を施したもの。21は輪切状に剝出された大型剝片を素材とする。22は唯一の黒耀石製。三面を折断によって作出し，一側縁に急斜な加工の刃部を施している。23は幅広剝片の縁辺部に断続する小ノッチを施したもの。このため刃部は粗鋸歯状を呈する。通常のスクレーパーエッジが主要剝離面→背面方向の加工であるのに対して本例は逆になっており，刃部形状の特異さとともに希有な例である。24は厚手の縦長剝片を素材とし，末端部に刃部を作出したもの。左側縁の使用痕は，彫器的に用いられた結果かもしれない。

【扁平打製石斧】(Fig. 46－25～28)　27は鉄平石と称される板状節理の岩片を素材とする。実測図の点描部分が節理面である。刃部付近の節理面には条線状の使用痕が観察される。28は打製石斧作製の際に生じたと思われる剝片である。点描部は自然面（礫面）。25と26は，その形状から打製石斧に含めている。しかし石材はサヌカイト質安山岩であり，剝片を素材としていることや小型・薄手であること，全体の作りがシャープである点など27の偏平打製石斧とは趣を異にしている。両例ともに擦痕や摩耗痕等は認められず，土堀り具的な用途とも思えない。打製石斧とは別の分類をすべきであったが，適切なカテゴリーを思いつかなかったため本類に含めている。便宜的な分類であることを了解されたい。

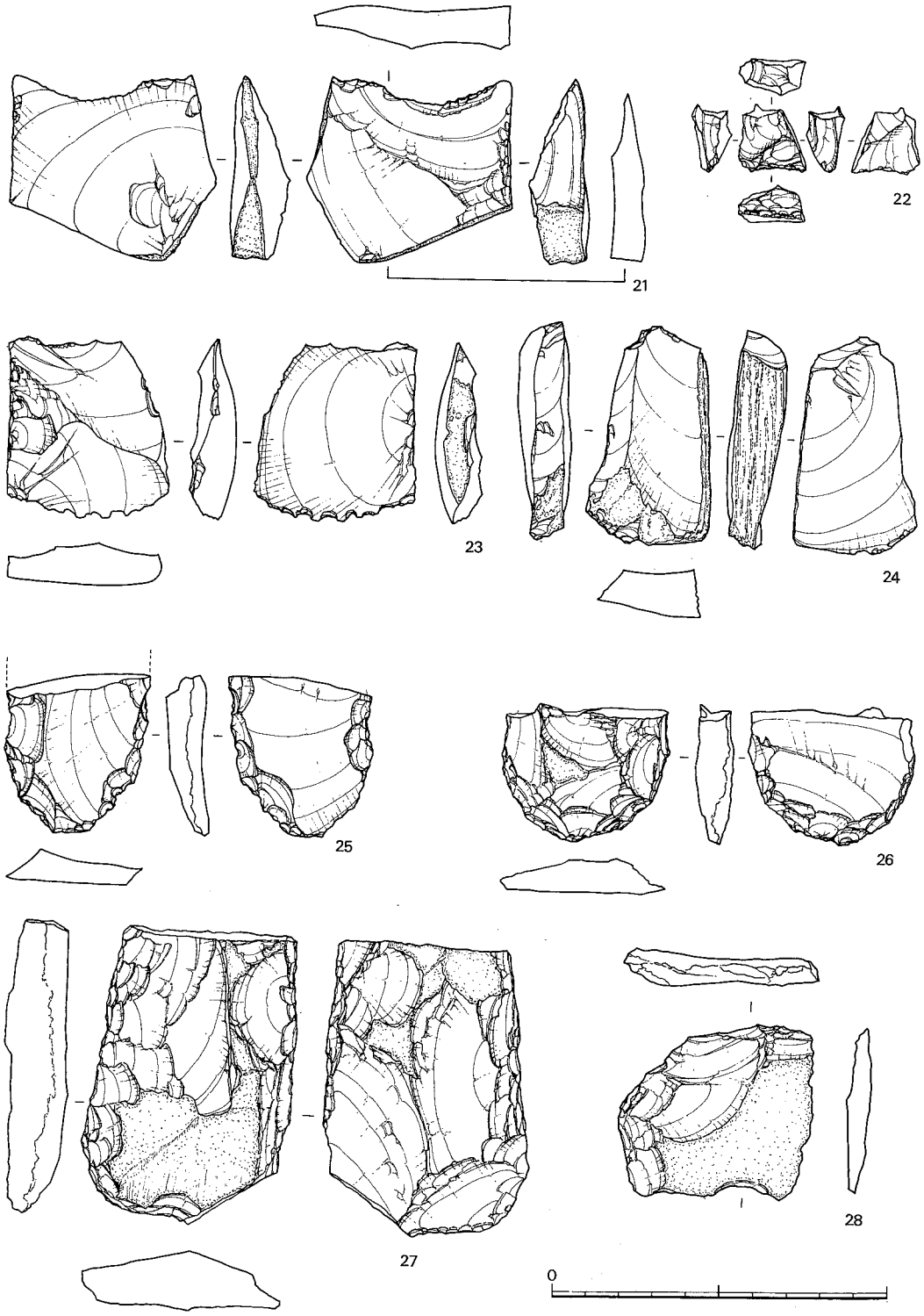


Fig. 46　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器　②

【石核】(Fig. 47－29, 30)　両例とも漆黒色黒耀石製で比較的良質。90度あるいは180度の打面転移を行いながら不定形剥片を剥出している。29は最大例で数個のパンチ痕が観察される。打面は自然面あるいは剥離面を利用するものが多く，総じて調整を施す例は少ない。図示外の石核は，黒耀石では長軸3～4cm以下のものが多く，短軸が2cm以下の例もある。残核と呼ぶべき状態である。サヌカイト質安山岩製石核は長軸6～7cm，短軸4～5cmである。黒耀石製石核とは異なり，大型厚手の剥片を素材として剥片剥離作業を行っているようだ。当初の母岩から生産された剥片は，そのまま石器として加工されるものと，小型石器素材を生産するための石核として転用されるものとに分離されているのかもしれない。なお尖頭状石器や大型掻・削器類の素材になり得る大形剥片は存在するものの，対応するような石核は検出されなかった。

【剥片】(Fig. 47－31～32)　黒耀石とサヌカイト質安山岩剥片のうち，使用痕跡の顕著な例を図示しておく。剥片群の全体についてはＰＬ．35を参照されたい。黒耀石製の剥片・砕片類は一部に自然面を残す例が多い。原石にサイズの小さい亜角礫を用いているためであろう。

【叩石】(Fig. 47－33)　輝石安山岩の棒状円礫を素材とする。班晶が粗大で表面は風化しているが，上・下端部にダメージを認めることができる。実測図中，大きく窪んでいるように表現されている部分は素材の間隙であって，使用痕跡ではない。

【小結】　前述したように，本石器群は縄文時代晩期終末期に位置づけられるものであり，極めて限定された時間内に生産あるいは廃棄された一括遺物と思われる点で貴重な資料である。県内の縄文晩期石器群としては，これまでにケイマンゴー遺跡（西彼杵郡西海町），黒丸遺跡（大村市），宮の本遺跡（佐世保市），朝日山遺跡（南高来郡小浜町）などの諸遺跡から良好な資料が得られており，これらを含む西北九州地域の様相については橘昌信の論考（橘1984）がある。それによると西北九州縄文晩期に於ける剥片剥離技術は，比較的小形の原石（4～5cm）を母岩としてアトランダムに大量の不定形剥片を生産するものであり，好資料を多出した十郎川遺跡（福岡市西区）の名を冠して「十郎川型剥片剥離技術」と命名している。この「十郎川型剥片剥離技術」によって生産された不定形剥片の中から「剥片石器の素材にふさわしい大きさ，形のものを選択して利用」する剥片石器製作の在り方は黒丸遺跡やケイマンゴー遺跡でも指摘されており（稲富1980，福田1980），縄文晩期全般に共通した特徴となっているようだ。

石器組成についてはいくつかの問題がある。扁平打製石斧は通常，数十～数百本単位で出土する例が多いが，本組成中では極めて少数である。石錐や石匙，磨製石斧などの工具的石器類についても，それが縄文時代のほぼ全期を通じての普遍的存在であることを考えれば，本質的に欠落しているとは思えない。調査区の限定性と石器製作址と思われる場の特殊性を考慮して解釈すべきであろう。一方，大陸系磨製石器については，先の縄文系石器群とは異なる次元で考察すべき問題を残している。唐津市菜畑遺跡では，晩期後半の石器組成中に大陸系磨製石器が出現しており，終末期には縄文系石器群との比率を逆転するほど充実した内容を示している。

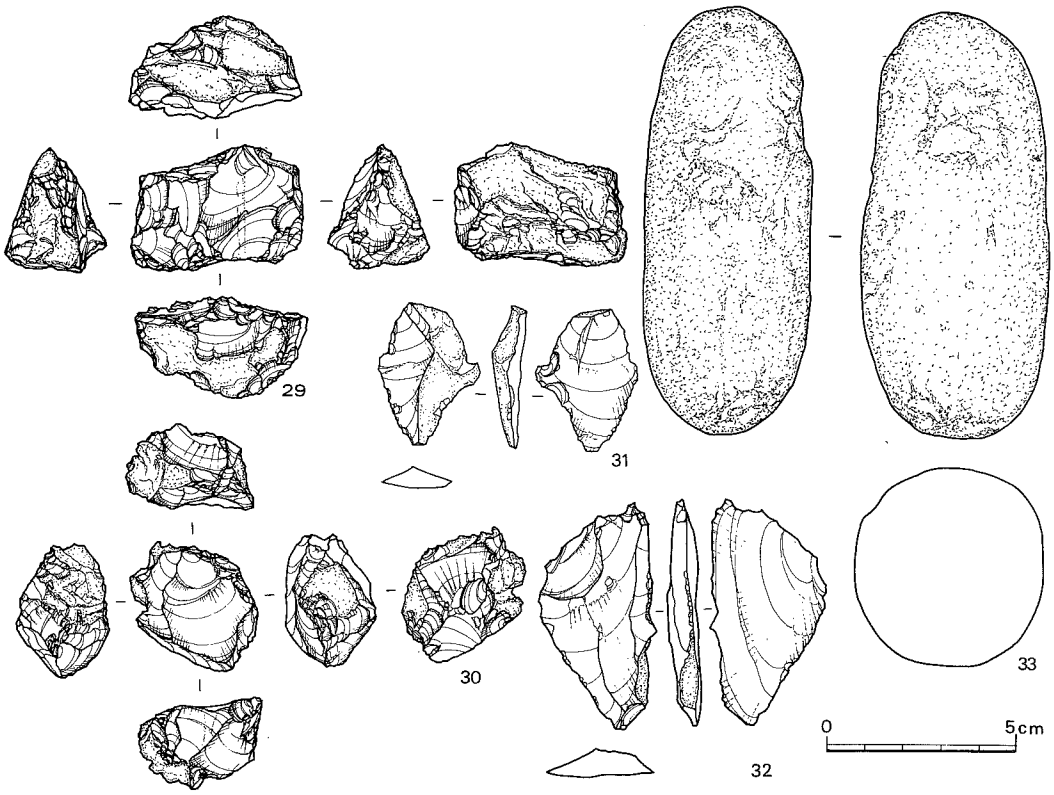


Fig. 47　上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器③

時期的な視点に限れば，本遺跡において大陸系磨製石器群が存在しても不思議ではなかろう。遺跡の占地環境や形成年代，土器に残された籾の圧痕などから考えて稲作文化を受容していた可能性は極めて高いものと思われる。にもかかわらず石器群の内容は，石鏃や尖頭状石器などの狩猟具系列と思われる器種が主体であり，剥片剥離技術を含めた石器群総体の印象は，いかにも縄文的である。旧文化と新文化が接触し，変容してゆく過程での複雑な様相の一面を示しているのであろう。

引用・参考文献

橘　昌信　1984　「縄文晩期の石器－西北九州における縄文時代の石器研究(六)－」『考古学論叢』
稲富裕和　1980　「縄文晩期の石器製作について」『黒丸遺跡』大村市黒丸遺跡調査会
中島直幸・田島龍太・他　1982　『菜畑』唐津市文化財調査報告書第５集　唐津市教育委員会
福田一志　1980　「縄文晩期の石器」『ケイマンゴー遺跡』長崎県文化財調査報告書第52集　長崎県教育委員会
高野普司・他　1981　『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書第１集　長崎県小浜町教育委員会
久村貞男・他　1980　『宮の本遺跡』佐世保市埋蔵文化財調査報告書　佐世保市教育委員会

Tab. 18

番号	器　　種	石　　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	備　　考
1	石鏃	黒燿石	24.0	17.0	4.0	0.83	
2	〃	〃	24.0	21.0	4.0	0.91	
3	〃	サ質安山岩	(20.0)	21.0	4.0	1.39	
4	〃	〃	(19.0)	23.0	4.5	1.21	
5	〃	黒燿石	26.0	21.5	6.0	2.30	
6	〃	〃	20.0	(17.0)	4.0	0.80	
7	〃	〃	(28.0)	21.0	8.0	3.66	
8	〃	サ質安山岩	33.5	26.0	8.5	4.96	
9	〃	黒燿石	28.5	18.5	8.5	3.43	
10	石鏃未成品	〃	27.0	24.5	5.5	2.99	
11	〃	〃	25.0	20.5	7.0	2.77	
12	〃	〃	26.0	19.0	6.5	2.20	
13	尖頭状石器	サ質安山岩	28.5	23.0	9.0	3.79	
14	〃	〃	35.0	38.5	16.0	11.76	
15	〃	黒燿石	33.0	30.5	14.5	10.07	
16	〃	サ質安山岩	58.0	51.0	18.0	36.18	
17	〃	〃	75.0	52.0	17.5	48.76	
18	尖頭状石器未成品	〃	42.0	37.0	17.0	20.75	
19	掻・削器類	〃	28.0	43.0	7.5	8.53	
20	〃	〃	31.0	69.5	14.0	32.12	
21	〃	〃	56.0	63.0	18.0	54.12	
22	〃	黒燿石	21.0	20.5	12.0	4.02	
23	〃	サ質安山岩	48.0	53.0	14.0	32.88	
24	〃	〃	66.5	37.5	17.0	40.43	
25	扁平打製石斧？	〃	48.0	43.5	13.5	23.83	
26	〃	〃	42.0	51.0	11.5	26.87	
27	扁平打製石斧	輝石安山岩	89.0	63.5	20.0	114.36	
28	打製石斧（剝片）	〃	59.0	53.0	11.0	30.80	
29	石核	黒燿石	33.0	46.0	27.0	33.21	
30	〃	〃	36.0	33.5	24.5	26.68	
31	剝片	〃	37.5	27.0	9.0	4.75	
32	〃	サ質安山岩	60.0	31.0	8.5	11.41	
33	叩石	輝石安山岩	113.0	50.5	44.0	284.22	

五、ま と め

今回の調査の成果をまとめると以下のようになる。

① 周知の遺跡の範囲以南で試掘したＴＰ14において，一括性の強い弥生時代前期の資料（板付II式併行期の壺・「亀ノ甲タイプ」の刻目突帯文土器・胎土，器表面調整とも弥生期の特徴をもちながらタイプとしては刻目突帯文土器である。いわゆる折衷系の土器。そして，打製石斧，縄文時代晩期の剝片剝離技法による剝片を利用した鏃等の石器群）を検出したが，このことは，弥生時代前期の突帯文期における沖積地への進出の様相を知る上で，[註1]貴重な知見であるといえる。また，宮崎貴夫氏[註2]により「縄文時代晩期前半の礫石原遺跡に代表される標高250～300mの山麓扇状地上の高燥域にあった遺跡が，縄文時代晩期後半，弥生時代前期になるにしたがい，低位化し，沖積地を意識した立地になる。低地及び沖積地に存在する遺跡は突帯文期に編入される可能性をもっている」と指摘されたことを，具体的な事実として確認できたことにも意義があろう。

また，精製浅鉢の胴部に籾痕を残す資料を検出できた事とＴＰ15においてグライ土壌を確認できた事は水稲耕作を行っていた可能性を示すものと思われる。耕作作業は縄文晩期以来の打製石斧で，そして，米の収穫はFig. 46—21，23等の削器類を，石包丁の代用品として使っていたことも考慮に入れておかねばならないだろう。また，石鏃の未製品が３点ある事や，石核・剝片の存在から，このＴＰ15で石鏃の製作も行っていた可能性が強い。[註3]Fig. 30には，グライ土壌を確認したＴＰ15付近の低地部を水田の想定地として示している。また，ＴＰ14付近の微高地を集落として想定しているが，恐らくこの集落の近くには墓地域が存在するはずで，その時の墓地は支石墓ではなかったか[註4]とも推測される。

なお、ＴＰ８の４層で検出した晩期の粗製土器と柱穴等からこのＴＰ８付近の微高地も集落が想定されるが，ＴＰ14の土器の時期と同一時期であることも考えられる。

②古墳時代では，その出土した土師器群から５世紀代を主体とする集落跡をＴＰ８付近に考えられるが，日常使用した土器や祭祀に使用した高杯等を廃棄したのが本調査区域の３区の辺縁に残ったことが考えられる。この場合，集中箇所毎に土師器の器種の構成が異なっているので，碗と甕のみの器種構成をなす第11集中箇所は日常使用した土器を廃棄したところ，高杯・ミニチュア土器を混じるものは祭祀に使用したものを廃棄したと考えられるが，その器種構成も，壺と高杯のみの構成の第２集中箇所，甕と高杯の構成の第４集中箇所，碗，壺，甕，高杯，ミニチュア土器で構成される第５集中箇所等があるので，祭祀の種類，または，その規模の大小のいかんによって，廃棄された器種の構成が異なり，その数量の差を生じたことが考えられる。時期的には，IV式５世紀中頃以後のものが，高杯では多い。

この古墳時代の墓地としては，南東300m程の所にある田渕遺跡で石棺が以前に出土しているのでここが墓域である可能性があるが，距離が離れすぎている感がしないでもない。

③中世期では，ＴＰ13周辺に13，14世紀頃の生活・居住の場が考えられる。また，田渕遺跡西側の松尾永一氏所有の水田部分では，滑石製石鍋破片，中世期の土師器の皿，ふいごの羽口，鉄滓等が出土している。古墳時代の土師器・甕の混入はあるが，恐らく中世の時期の製鉄・鍛冶遺構の可能性が考えられる。南東部の畑地では，多量の鉄滓の出土があったとの地元の方の話がある。

終りに，遺跡の継続期間，東側丘陵の中江遺跡との関連について触れてみたい。上田井原遺跡では，弥生時代前期，古墳時代の４世紀後半～６世紀の間で，５世紀代を主体とするが，弥生時代の中・後期は，全く空白の時期であるし，６世紀以降は希薄になっていく現象が看取される。一方，中江遺跡では，これらの空白ないしは希薄な時期の資料がみられるので，上田井原遺跡から中江遺跡へと移っていった事も考えられ，相互補充的な遺跡であったことも考えられるところである。上田井原遺跡は沖積地に立地するし，中江遺跡は丘陵上に立地するが，この地理的な要因も関連するものであろうか，丘陵上の２条の溝の存在と併せて興味深いところである。試掘，本調査等合わせて土器22,659点，石器435点，須恵器93点，陶磁器340点，ふいごの羽口８点，鉄滓を含む鉄製品460点（表面採集を含む）となっている。

補記

上田井原遺跡の本調査開始時の９月27日，超大型の台風19号がやって来た。高来町へ向かう道すがら，コンクリート製の電柱は，まるで割箸でも折ったように根元からバタバタとなぎ倒され，投宿予定の旅館の屋根は台風で吹き飛ばされ，青空天井という惨状であった。とても遺跡調査をやれるような状況ではなかったが，限られた期間の中でなんとか調査を終了することができた。これもひとえに地元の方の協力で成就できた事で，ここに深く感謝いたします。

針小棒大なまとめに終始した事をおわびすると同時に，大方の御批判を仰ぎたい。

註１．低地部から沖積地への進出は，陸稲から水稲への転換も意味するものと思われる。

２．宮崎貴夫 『肥賀太郎遺跡』，長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅻ，長崎県文化財調査報告書第97集　長崎県教育委員会　1990，p.p. 48，49

３．佐世保市四反田遺跡でも，住居址で石鏃の製作を行っていたと報告されている。

４．福岡県糸島郡志摩町の新町遺跡では，支石墓を含む墳墓域の副葬品として板付Ｉ式併行期の壺がでているし，佐世保市四反田遺跡でも支石墓が報告されている。また，南高有家町の西鬼塚石棺は，標高60～66mの場所に位置するが，石棺の周囲に支石らしきものがあり，縄文時代晩期の甕と浅鉢の小片の出土から晩期の支石墓である可能性が高い。高い標高域にある北有馬町の原山遺跡から低地化する経過の一支石墓であるとも考えられる。

橋口達也 『新町遺跡』－福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査－志摩町文化財調査報告書第７集，1987　志摩町教育委員会

村川逸朗 『Ⅲ，西鬼塚石棺』，長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅻ，長崎県文化財調査報告書第108集，1993　長崎県教育委員会

遺跡遠景（南西から）

ＴＰ８　付近

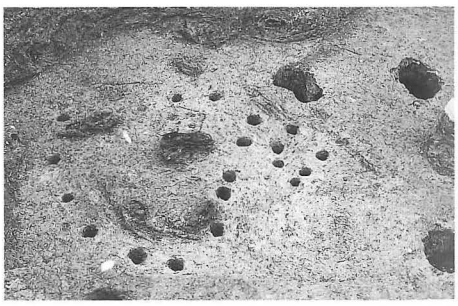
調査状況

ＴＰ９　高杯出土状況

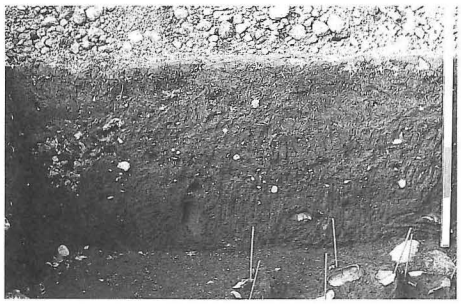
ＴＰ８　土層

ＴＰ８　柱穴等検出状況

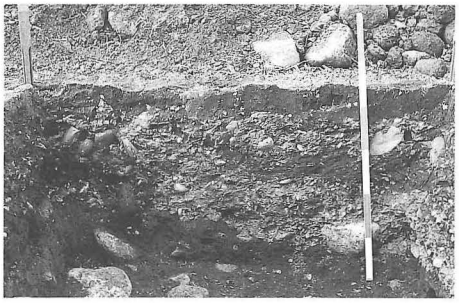
ＴＰ８（上段は古墳時代，下段は縄文時代晩期の生活面）



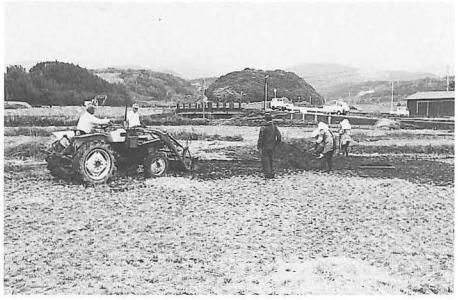
ＴＰ８　柱穴，炭化材等検出状況



TPII　北壁　土層



TP5　北壁　土層



試掘調査埋め戻し状況

本調査・調査状況

本調査・調査区全景（南から）

1・4区　柱穴検出状況（東から）

3区　北壁　土層

2・3区　遺物出土状況（西から）

2・3区　遺物出土状況（東から）

第5集中箇所

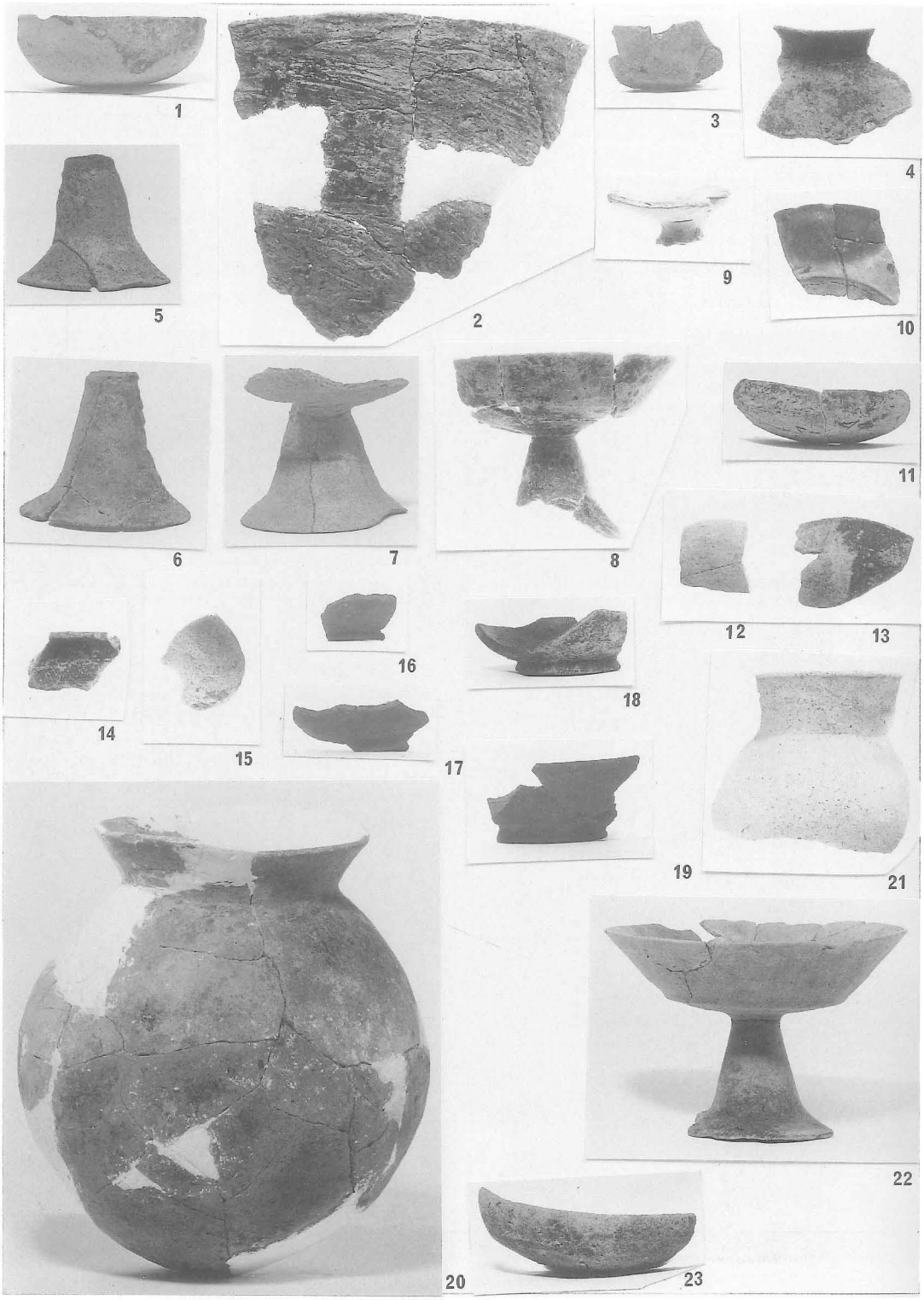
第5集中箇所

第11集中箇所

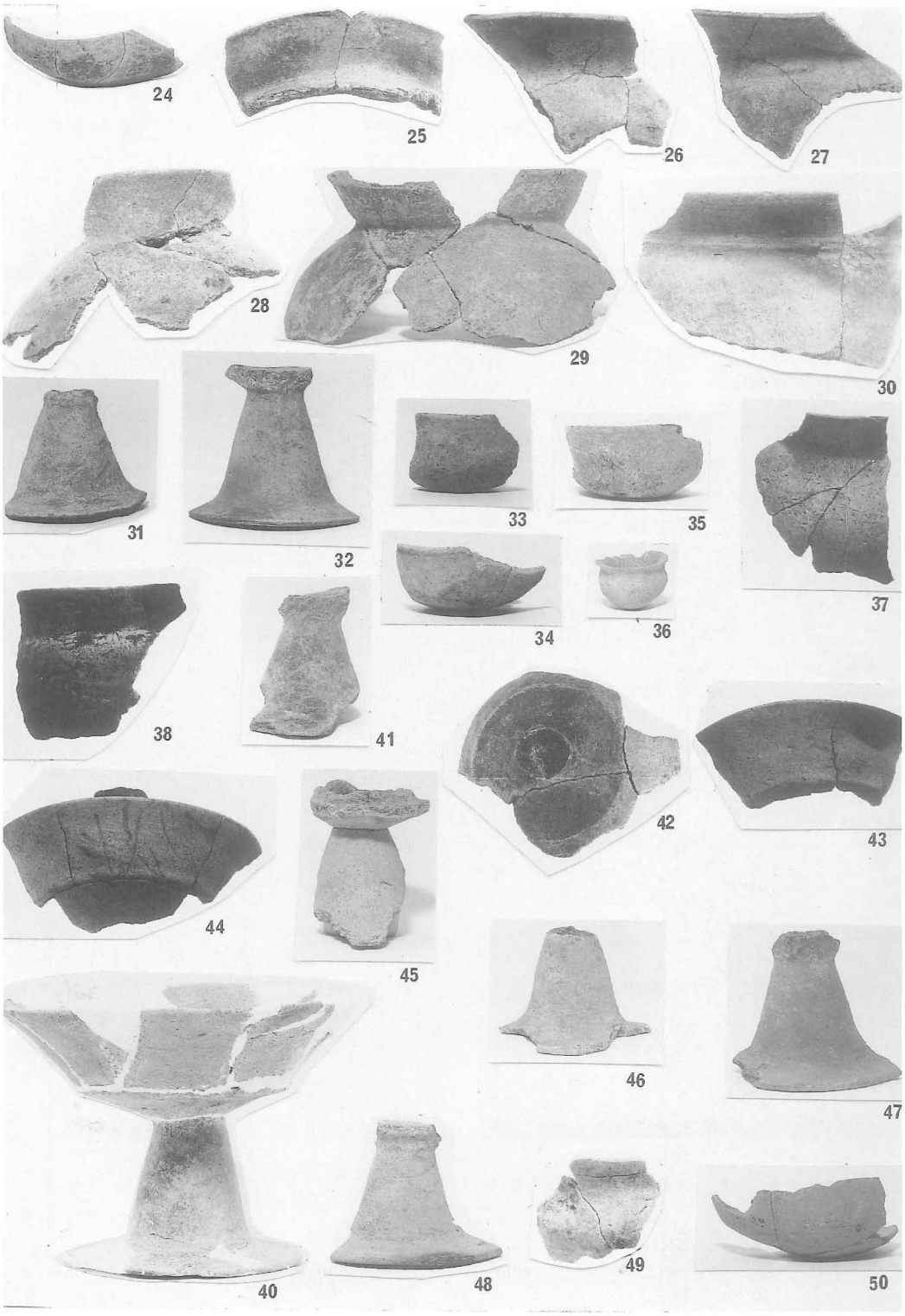
本調査状況

本調査区全景

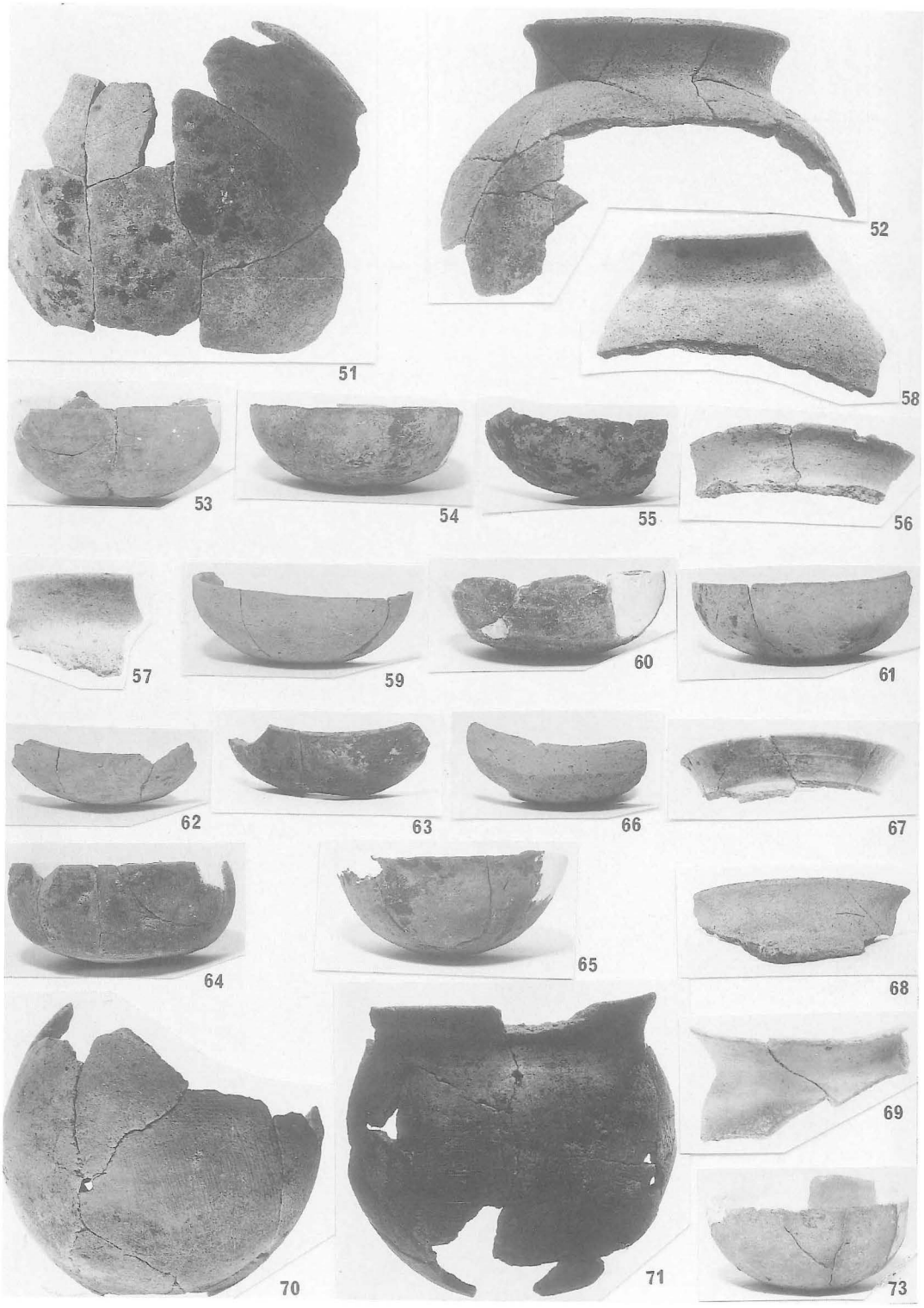
PL. 30



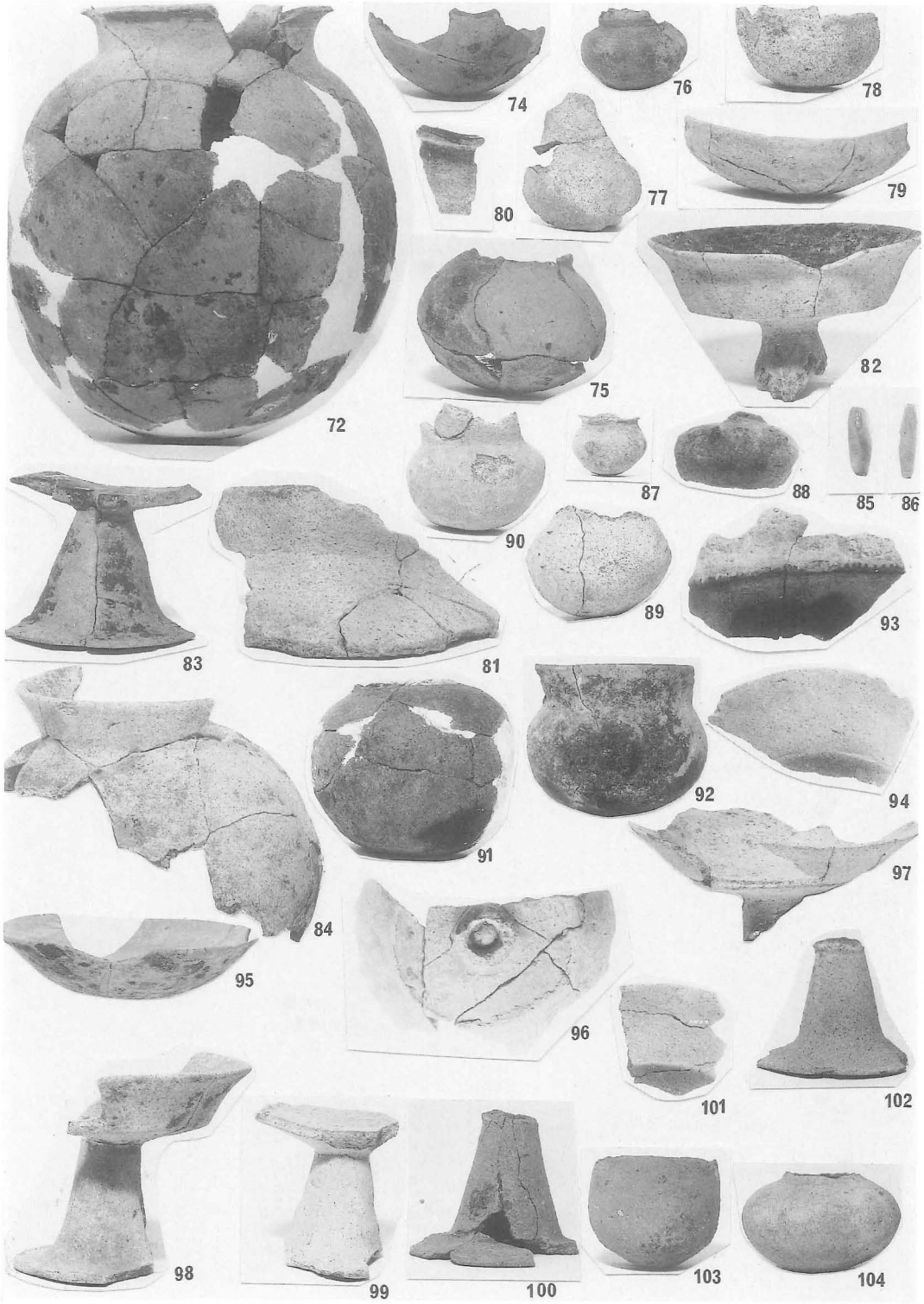
上田井原遺跡出土の土器①　1／4



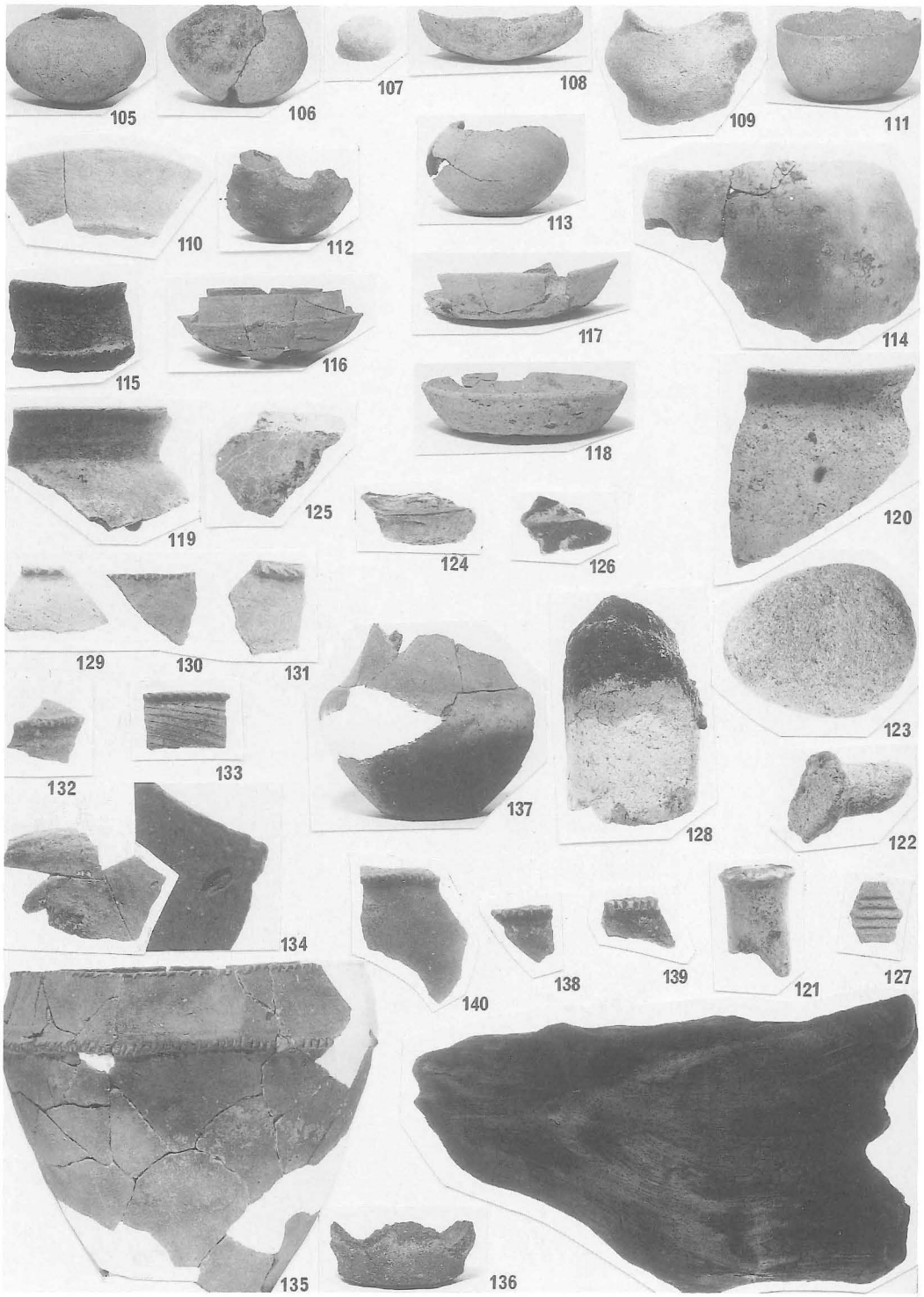
上田井原遺跡出土の土器② 1／4



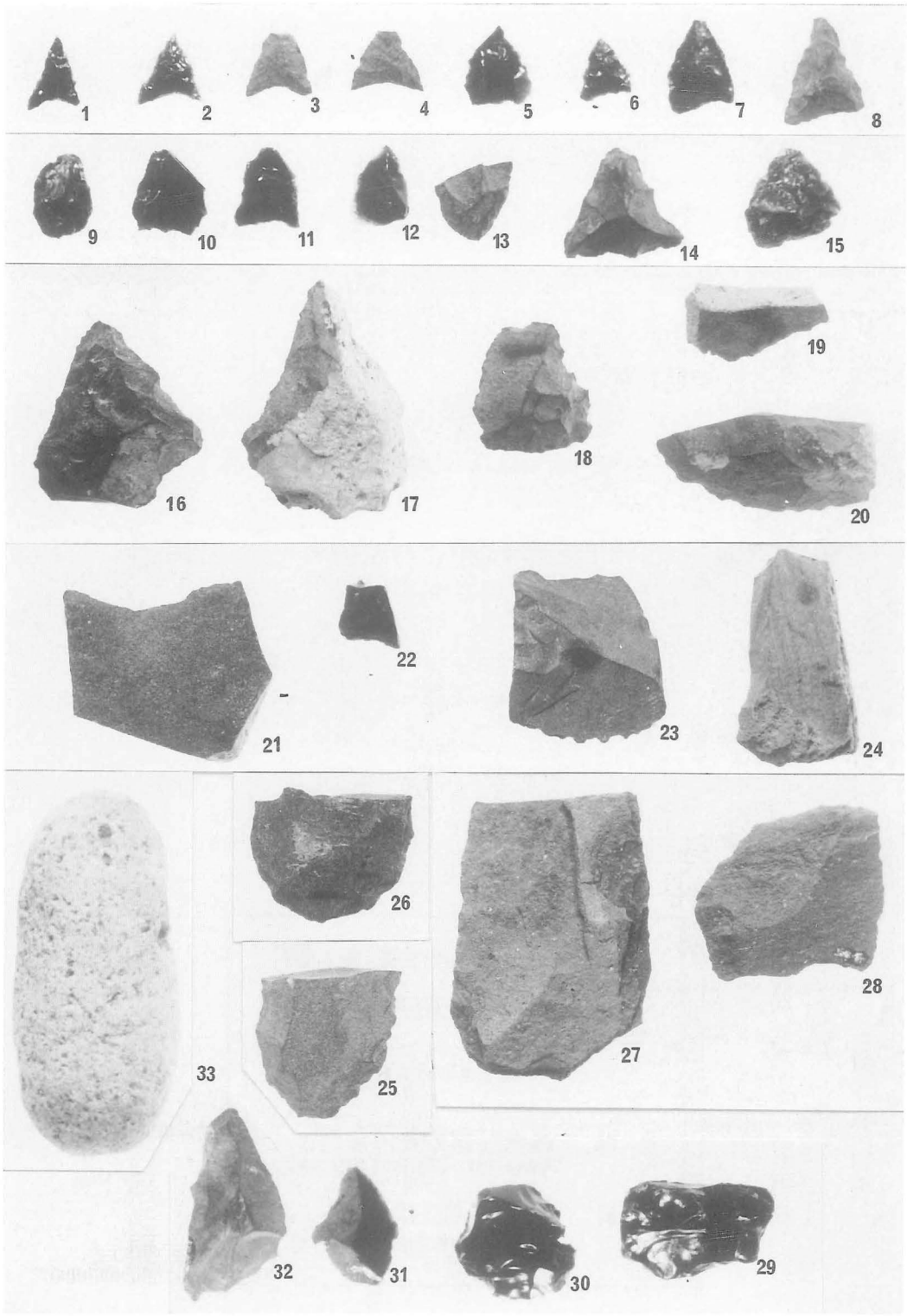
上田井原遺跡出土の土器③　1／4



上田井原遺跡出土の土器④　1／4



上田井原遺跡他出土の土器等　1／4



上田井原遺跡以南（ＴＰ14）出土の石器

高来町文化財調査報告書　第１集

中江遺跡・上田井原遺跡

平成５年３月31日

発　行　**高来町教育委員会**
〒859－01　長崎県高来町三部壱名

印　刷　**昭　和　堂　印　刷**
〒854　諫早市長野町1007番地